

# 日本語文法入門

吉田 典子



本書はNAFL Institute 日本語教師養成通信講座『日本語の文法』(1)～(3)を学んでいる人のための参考書となるように十分配慮し、表を多用してできるだけわかりやすく解説したものである。が、仮に通信講座を受けていなくても、本書で日本語文法の概略は理解できるように工夫してある。

本書は通信講座の本と相補うような形で解説してある。つまり、通信講座の本で簡単にしすぎたところを、本書でややくわしく述べたり、逆に通信講座の本でながながと書いたことを、本書で簡潔にまとめたりしてある。

また、本書の特色として、“日本語の文法”をより深く理解していただくために、外国語の例を引いて説明してあるところがある。日本語のことを理解するために外国語との対照が必要である、とは日本語教育の初歩的常識であって、つねづね言われていることである。そういう意味では、ここに入れた外国語の例は決して十分ではない。もっと外国語の例を入れたかったのだが、今回はこれだけにしておく。

外国語の例を入れたのは、本書をありきたりの文法書にしたくない、という意図もあった。さらに、次のような希望も持っている。つまり、本書の文法論は、日本語教育から発してはいるが、別に日本語教育のためだけの文法論ではない。本書に展開したような考え方を、広くことばに興味を持つ一般の日本の方々に知っていただきたいと思う。

1989年4月

吉川 武時

# 目 次

1	「文法」ということについて	5
2	日本語文法の概要	10
3	名詞文 (1)	19
4	名詞文 (2)	21
5	名詞文 (3)	24
6	「はい」と「いいえ」一応答詞	26
7	「はい、そうです」	29
8	存在文と所在文	31
9	「何がありますか」と「何かありますか」	35
10	形容詞	38
11	属性形容詞と感情形容詞	42
12	数詞・助数詞・序数詞	46
13	「ごろ」と「ぐらい」一時刻と時間(と量)	51
14	動詞について	55
15	動詞を述語とする構造文型	64
16	自動詞と他動詞	71
17	複合動詞	75
18	往来の目的	82
19	動詞のテの形	86
20	テの形の意味	88
21	連体修飾	95
22	「～たり ～たり する」一動作の列挙	99
23	アスペクトについて	102
24	補助動詞について	106
25	「～ている」の意味	107
26	連体修飾句のテンス・アスペクト	111
27	「～てある」の意味	117
28	「～ておく」の意味	121
29	「～てしまう」の意味	127
30	「～てくる」「～ていく」の意味 (1)本動詞としての「くる」「いく」	131
31	「～てくる」「～ていく」の意味 (2)補助動詞としての「くる」「いく」	136

32	「～てみる」の意味	139
33	依 頼	143
34	命 令	145
35	意 志	147
36	誘いかけ	150
37	希望の表現「～たい」	152
38	部分の表現「～は ～が ～」など	154
39	無意志的な動作の表現	156
40	比較の表現	158
41	忠告の表現「～たほうがいい」	163
42	経験の表現「～たことがある」	165
43	許可「～でもいい」	167
44	禁止「～てはいけない」	168
45	義務「～なければならない」	170
46	不必要「～なくてもいい」	172
47	可 能	173
48	伝聞の表現「～そう」	176
49	様態の表現「～そう」	178
50	受 身	184
51	使 役	190
52	やりもらい	194
53	理 由	199
54	条件の表現 (1)問題点	203
55	条件の表現 (2)形の作り方	206
56	条件の表現 (3)導入法	207
57	条件の表現 (4)文末制限	209
58	条件の表現 (5)時間的前後関係について	211
59	条件の表現 (6)まとめ	214
60	逆 接 (1)「のに」による文の接続	217
61	逆 接 (2)「ても」による文の接続	220

索引	223
----	-----

参考文献	4
------	---



# 1 「文法」ということについて

文法と文型の違いは

文法 国語の文法 (五段活用、助動詞、形容動詞など)

文型 日本語教育の文法(変化語尾、テの形、ナ形容詞など)

ではなく、

文法 国語でも日本語教育でも、文を作る規則の総体

文型 文法の一分野としての文の形 構造文型 表現文型など

である。

## (1) 国語の文法と日本語教育での文法\*

文法というと、一般の日本人は中学や高校で習った、国語の文法のことを思い出すだろう。五段活用とか「未然、連用、……」とかという、あれである。ここでいう文法はそれとは違う。まず、この点をはっきりさせておかなければならない。

そもそも文法とは何だろう。われわれが、ことばを話すときには、ある決まりに従って話しているはずだ。日本人が、日本語を話したり、聞いたり、書物を読んでその内容を味わったりできるのは、日本語の決まりを知っているからである。このことばの決まりのことを文法というのである。

ところが、われわれ日本人は、日本語の文法を教えてもらって初めて日本語が話せるようになるのではない。小学校の国語の授業で文法を習うはるか以前、4歳ぐらいまでには日常生活のたいていの会話はできるようになって

いるのである。

つまり、日本人は文法を知らなくても日本語が話せるのである。たぶん、生まれた直後からの日常の言語の経験のなかで無意識のうちに習得してしまうものなのだろう。(この文法を習得するメカニズムはまだ解明されていない。)

一方、われわれ日本人が英語を学習するときはどうだろう。単語を並べて英語の文章をつくる時、文法を知らなくてはできない。われわれが文法を意識するのは、初めて外国語を学んだときといえるだろう。

ここで注意しておきたいことは、日本語を全く知らない外国人を相手にするのが日本語教育だ、ということだ。日本人の子どもであれば、小学校に入る前に、かなり多くの単語を知っていて、それを組み立てて文章にし、会話することができる。日本語教育ではこうはいかない。

つまり日本語教育でいう文法は、国語の文法とは違うということだ。

国語の文法は、相手がすでに日本語が話せるということを前提に文法を解説している。五段動詞か一段動詞かを見分けるには、否定の言い方を作ってみて、「ない」の前がアの段だったら五段動詞、イかエの段だったら一段動詞だ、と教える。しかし日本語を初めて学ぶ外国人相手にはこういう説明はできない。

学習者は「ない」の形を知らないのだから、五段動詞の否定の形はこうやって作ります、と教えてやらなければならない。日本語教育では、日本語が話せない者を相手に、一から日本語の構造を教えていかなければならないのである。

日本語教育での文法と国語の文法とを区別して、日本語教育の文法を「文型」と言う人が多い。そして日本語教育では、基本文型、構造文型、表現文型、文型練習、各課の主要文型というように「文型」という言葉がさかんに使われている。そこでは、つまり、文を作る規則という意味で「文法」の意味で使われているのである。本来の意味の「文型」は、「文法」の意味するものよりずっとせまい。しかし日本語教育では、文法の学習のなかで文型の占める割合が圧倒的に大きい。

日本人相手に教えるのは「文法」、外国人相手の日本語教育でするのは「文型」

と、違う名称で呼ぶ必要はない。そこで、ここでは「文法」と呼ぶ。ただし、何度も言うように、国語の文法とは異なるものである。

われわれが国語の文法で習った活用表は、日本語を学ぼうとする外国人には役に立たない。国語の文法でおかしいと思われるものの一つは、いわゆる「活用表」の中に過去形がないことであろう。「食べた」というのは「動詞の連用形(食べ)に助動詞(た)がついたもの」とされ、二語のあつかいになっている。また、「食べて」のことは、「動詞の連用形(食べ)に接続助詞(て)がついたもの」と説明されている。日本語教育では、テの形(te-form)と言っている。つまり、単語の認定のしかたが違うのである。

国語の文法と日本語教育での文法とで、大きく違うところは、この助動詞のあつかいである。

※ここを「日本語教育の文法」とすると、「日本語教育でのみ行われている特殊な文法」という印象を与えてしまう。そうではなく、ごく普通に「日本語教育で行われている文法」という意味で「日本語教育での文法」とした。

## (2) なぜ文法を学ぶか

最近の外国語教育では、「コミュニケーション」「コミュニケーションな会話」とよく言われるようになった。そこには「ことばはコミュニケーションのためにあるのであって、文法ばかり習ってもしょうがない」とか、「文法は習わなくてもいい」というニュアンスが含まれている。が、はたしてそうだろうか。

ことばはコミュニケーションのためにある。これはその通りである。では、コミュニケーションとは何か。自分の意志や考えを相手に伝えることである。相手に伝えるためにことばを使う。ことばでなく身ぶりで、こちらの言いたいことを伝えることも、時にはできる。しかし、それは簡単なことだけで、複雑な内容になると、不可能である。

文法は、こうしたコミュニケーションの基本としてあるのである。「文法なんか知らなくてもコミュニケーションができる」というのはうそである。もともと文法とコミュニケーションとを対立したものと考えるのが間違いなので

ある。つまり、基礎としての文法を習ってから、あるいは習いつつ、コミュニケーションの方法も習うべきなのである。

### ③ コミュニケーションは何のためにするか

さらにコミュニケーションは何のためにするかと言えば、相手を動かして自分のしたいことをするためである。

例えば、ホテルの部屋に入って、ビールでも飲もうと思ったとする。備え付けの冷蔵庫を開けると、中にビールはあるが、栓抜きがなかった。そういうときはフロントに電話して頼むことになる。

このとき「栓抜きがありません」と言えば、日本では持ってきてくれるが、ドイツではたとえドイツ語で言ったとしても「栓抜きがない」だけではだめで、「栓抜きを持ってきてくれ」と言わなければ、持ってきてくれないそうである。まず第一にドイツ語の単語を知っていなくてはならない。しかし「栓抜きがない」ではなく「栓抜きを持ってきてくれ」と言わなければならないと知るのはコミュニケーションの問題である。つまり「ビールを飲む」という行動をしたいときに、何を誰にどう伝えればよいか。これはコミュニケーションの問題である。そのとき単語を組み合わせて、どんな文型を使うか。これは文法の問題である。さらに、実際に発話するとき、正しい発音で言えるかも問題となる。これは音声の問題である。

以上のどれが欠けても、自分の思うようにビールを飲むことはできないだろう。他人に頼まず、すべて自分でするなら、コミュニケーションの問題はなく、文法の問題も起こらず、発音も問題にならない。

### ④ コミュニケーションのための基礎練習

ところで、文法は、音韻論、形態論、構文論の三部門から成っており、音声は音韻論の中であつかわれる。つまり、音声は文法に含まれているが、およそ次のような図式が成り立つ。

我々の行動 → コミュニケーション → 文法 → 音声

このうち、あとの方ほど基礎的である。だから発音練習がすべての基礎に

なる。大声を張り上げて「アー、エー、オー」とか、「シ、チ、ス、ツ」とかと発音の練習をすることは、コミュニケーションのために何の役に立つのか、と疑問に思う人がいるかもしれないが、発音練習は基礎的な練習としてきわめて重要なことである。正確に発音できなければ、意思は伝わらないのである。

同様に、「書く」→「書いた」、「読む」→「読んだ」などの語形変化の練習がコミュニケーションのために何の役にたつのか、と思う人がいるかもしれないが、これも基礎練習だと思って根気よくやる必要がある。

「～ます」の形から基本形(辞書の形)を導く練習では、

あります。→ ある。

これだけの練習でもいいが、もう少しコミュニケーションにしたいのなら、

ありますか。→ たぶんあるでしょう。

ぐらいでもいいだろう。

少しでもコミュニケーションであろうとして、

ありますか。→ よくわかりませんが、たぶんあるでしょう。

という練習をさせる教科書があるが、この場合は学習者に「よくわかりませんが」の意味がよくわかっていることが前提となろう。

日本語教育では、とかく文法事項中心に教えがちだが、学習者が知りたいのはコミュニケーションの方法である。(これを「ストラテジー」(Strategy)と言う。)しかし、いきなりストラテジーを教えようとしても、文法の基礎ができていないと、無理である。基礎に帰って練習する必要がある。その意味で、一見つまらなそうな文型練習をするのである。できるだけコミュニケーション練習をしたいのはやまやまだが、しかし、その前に基礎的な文型練習が必要なのである。

「文型練習はつまらないからやめろ」という論調が最近目だつようになった。しかし、「文型練習は、コミュニケーションのための基礎練習としてやっているのだ」という自覚があれば、そうした論調に惑わされることはない。

## 2 日本語文法の概要

### キーワード

格文法	日本語文法
核文(Proposition) ……構造文型(補語 述語)	
モダリティー(Modality) …表現文型	

最近、機械翻訳が注目されている。機械翻訳の目的で日本語を分析するとき、「格文法」という理論を用いると考えやすいという。格文法では、まず最初に、文を「核文」(Proposition)と「モダリティー」(Modality)とに分ける。つまり、文は「核文」と「モダリティー」とから成るとするのである。

よく考えてみると、これは日本語教育での文法のあつかい方とそっくりである。「核文」は、日本語文法で言う構造文型に当たり、「モダリティー」は、表現文型に当たる。

核文は、述語とその述語の意味を完全にするための補語とから成る。述語になるのは、動詞、形容詞、名詞+「だ」である。そして、その各々を述語とする文を次のように言う。

動 詞 を 述 語 と す る 文	……	動詞文
形 容 詞 を 述 語 と す る 文	……	形容詞文
名 詞 + 「だ」 を 述 語 と す る 文	……	名詞文

以下には動詞文の例をあげるが、他の場合も同じである。ただ、名詞文、形容詞文は、動詞文より構造が簡単である。

## (1) 構造文型

### キーワード

補語	格
必須の補語	格助詞
随意的補語	状況語

本を		読みます。
学校へ		行きます。
机の上に	本を	置きます。
冷蔵庫から	ビールを	取り出します。

上の文の述語は「読む、行く、置く、取り出す」という動詞である。各々の動詞の意味の完結性のために、「本を、学校へ、机の上に、本を、冷蔵庫から、ビールを」という語が必要である。つまり、それぞれ

読む	……	[何]を
行く	……	[どこ]へ
置く	……	[どこ]に [何]を
取り出す	……	[どこ]から[何]を

ということばがないと、それぞれの動詞の意味が完全にはわからない。これらのことばを、述語動詞の意味を完全にするために補う語という意味で「補語」と言う。(英文法の「補語(Complement)」とは違うので注意。)補語には必須の補語と随意的補語とがあるが、上にあげたのは必須の補語である。このように動詞には、それぞれ必須の補語が決まっている。

この動詞と補語との関係のことを「格」と言う。格を表すには、日本語では

「を、へ、に、から」などの格助詞を名詞の後に付ける。

このような動詞と格との組み合わせを構造文型と言う。

田中さんは		テレビを	見ます。
田中さんは	7時に	テレビを	見ます。
田中さんは	7時に	食堂で	テレビを 見ます。

この文では述語動詞は「見る」である。「見る」はその意味の完結性のために「～を」という補語が必要である。つまり、「見る」を使うとき必ず見られる物が存在する。つまり、「テレビを」は必須の補語である。

ところが、上の文で「7時に、食堂で」はどうか。

これらは、動詞の意味の完結性のために必要なものではない。そこでこの「7時に、食堂で」のようなことばを、随意的補語と言う。随意的補語には、状況を表すことばがなることが多い。そのうち、特に時とか場所を表すことばを状況語とも言う。

上の状況語は「名詞＋格助詞」という構成をしているが、この外に、副詞も一つだけで状況語になることがある。

また、上の文で、「田中さんは」はどうか。この文の「田中さんは」は動作の主体を表している。動作の主体を表すことばは、ほとんどすべての動詞が必要とするものである。したがって、構造文型を考える上からは、これは特に考える必要はない。

## ◎主題化変形

主格を表す助詞は「が」である。それがどうして上の文では「は」になっているのか。これが、「主題化変形」の一例である。

主題化変形というのは、補語の中の一つを主題として取り出して、これに変形をほどこすことである。具体的に言うと、主題として取り出す語に主題を示す助詞「は」をつけて、それを文頭に持って行くのである。



	田中さんが 7時に 食堂で テレビを 見ます。
田中さんは	7時に 食堂で テレビを 見ます。
7時には	田中さんが 食堂で テレビを 見ます。
食堂では	田中さんが 7時に テレビを 見ます。
テレビは	田中さんが 7時に 食堂で 見ます。

いちばん上の文では、なにも主題に取り立てられていない。いわゆる無題文である。

田中さんが 7時に 食堂で テレビを 見ます。

これから、各補語が主題として取り立てられると、「は」がついて文頭に移動する。ふつう主題は、文頭に置かれる。「は」がつくとき、「がは」「をは」は単に「は」となる。

「次郎が 冷蔵庫から ビールを 取り出す。」を主題化変形した文を作ってみなさい。

## (2) 表現文型

(1)で挙げた文の末尾を「～しましょう」に変えると次の文が得られる。

本を	読みましょう。
学校へ	行きましょう。
机の上に 本を	置きましょう。
冷蔵庫から ビールを	取り出しましょう。

同様に「～なさい」に変えると次のようになる。

本を	読みなさい。
学校へ	行きなさい。
机の上に 本を	置きなさい。
冷蔵庫から ビールを	取り出しなさい。

このように、文末を変えると表現意図が変わる。言い替えると、表現意図によって、文末を変えなければならない。したがって、表現意図によって種々の表現文型があることになる。

「学校へ行く」と「本を読む」とを例にして、種々の文末表現をあげてみよう。

- |                 |            |
|-----------------|------------|
| 1 学校へ行く。        | (叙述・現在)    |
| 2 学校へ行きます。      | (叙述・丁寧・現在) |
| 3 学校へ行きました。     | (叙述・丁寧・過去) |
| 4 学校へ行っています。    | アスペクト (いる) |
| 5 学校へ行ってしまう。    | 〃 (しまう)    |
| 6 学校へ行っている。     | 〃 (ある)     |
| 7 学校へ行っておく。     | 〃 (おく)     |
| 8 学校へ行ってくる。     | 〃 (くる)     |
| 9* 学校へ行っていく。    | 〃 (いく)     |
| 10 学校へ行ってみる。    | 試行         |
| 11 学校へ行ってください。  | 依頼         |
| 12 学校へ行きなさい。    | 命令         |
| 13 学校へ行こう。      | 意志         |
| 14 学校へ行きましょう。   | 誘いかけ       |
| 15 学校へ行くでしょう。   | 推量         |
| 16 学校へ行ったことがある。 | 経験         |
| 17 学校へ行ったほうがいい。 | 忠告         |
| 18 学校へ行きたい。     | 希望         |
| 19 学校へ行ってほしい。   | 〃          |

20	学校へ行ってもいい。	許可
21	学校へ行かなければならない。	義務
22	学校へ行ってはいけない。	禁止
23	学校へ行かなくてもいい。	不必要
24	学校へ行ける。	可能
25	学校へ行くことにする。	決心
26	学校へ行くことになる。	状態の推移
27	学校へ行くそうだ。	伝聞
28	学校へ行きそうだ。	様態
29	学校へ行かれた。	受身
30	学校へ行かせた。	使役
31	学校へ行かせられた。	使役の受身
32	学校へ行ってあげる。	やりもらい
33	学校へ行ってくれた。	〃
34	学校へ行ってもらった。	〃
35	学校へ行っていただく。	〃
1	本を読む。	(叙述・現在)
2	本を読みます。	(叙述・丁寧・現在)
3	本を読みました。	(叙述・丁寧・過去)
4	本を読んでいます。	アスペクト (いる)
5	本を読んでしまう。	〃 (しまう)
6	本を読んである。	〃 (ある)
7	本を読んでおく。	〃 (おく)
8	本を読んでくる。	〃 (くる)
9	本を読んでいく。	〃 (いく)
10	本を読んでみる。	試行
11	本を読んでください。	依頼
12	本を読みなさい。	命令
13	本を読もう。	意志

14	本を読みましょう。	誘いかけ
15	本を読むでしょう。	推量
16	本を読んだことがある。	経験
17	本を読んだほうがいい。	忠告
18	本を読みたい。	希望
19	本を読んでほしい。	〃
20	本を読んでもいい。	許可
21	本を読まなければならない。	義務
22	本を読んではいけない。	禁止
23	本を読まなくてもいい。	不必要
24	本が読める。	可能
25	本を読むことにする。	決心
26	本を読むことになる。	状態の推移
27	本を読むそうだ。	伝聞
28	本を読みそうだ。	様態
29	本を読まれた。	受身
30	本を読ませた。	使役
31	本を読ませられた。	使役の受身
32	本を読んであげる。	やりもらい
33	本を読んでくれた。	〃
34	本を読んでもらった。	〃
35	本を読んでいただく。	〃

【問】「机の上に本を置く」で、同様にいろいろな表現を作ってみなさい。

### (3) 連体修飾

実際の日本語の文は、上に述べたような簡単なものではない。日本語の文が複雑になっているのは、連体修飾の要素とつなぎの文型のためである。

きのう買った 本を 読みます。  
 父が卒業した 学校へ 行きます。  
 きのう買った 机の上に きょう買った 本を おきます。  
 ダイエーで買った 冷蔵庫から 冷えた ビールを 取り出します。

これらの文では、「本、学校、机、冷蔵庫、ビール」ということばがそれぞれ の ことばで修飾されている。

こうして複雑な文ができる。これを連体修飾構造と言う。

#### (4) つなぎの文型

時間があれば、本を読みます。  
 時間があれば、学校へ行きます。  
 時間があれば、机の上に本をおきます。  
 時間があれば、冷蔵庫からビールを取り出します。

これらの文では、「時間がある」を、条件の表現でそれぞれの文につないでいる。

時間があるので、本を読みます。  
 時間があるので、学校へ行きます。

これらの文では、理由の表現でつないでいる。

時間があれば本を読みますが、時間がないので本を読みません。  
 もっと時間があればもっとたくさん本を読みたいのですが、実際は時間があまりないので、本が読めないのです。

上の文では、条件の表現でつながれた文と、理由の表現でつながれた文が「が」によってつながれていて、さらに複雑な文になっている。

下の文は、同趣旨のことを、さらに副詞などを入れて、自由に表現してみたものである。

このようにして、実際の複雑な文ができる。また、複雑な文もこの要領で分析できるはずである。

### 3 名詞文 (1)

これは本です。

これは本ですか。

はい、それは本です。

いいえ、それは本ではありません。

これも本ですか。

はい、それも本です。

標準的な日本語の教科書はこのような文で始まる。

文法的に言うと、名詞文で始まるわけである。

これだけの例文の中に、次の文法事項が含まれている。

①文型 ～は N(名詞)+だ

②コソアド

③「か」 助詞。文末について疑問文を作る。

④「はい、いいえ」 応答詞(「6 『はい』と『いいえ』——応答詞」参照。)

⑤「も」 助詞。同類であることを表す。

#### (1) 名詞+「だ」

名詞文の述語は 名詞+「だ」 である。述語の形(叙述形)は、表のように変化する。名詞を「本」として示す。このうち、最初の段階で教えるのは丁寧形の現在形である。(太字の部分)

	普通形		丁寧形	
	肯定形	否定形	肯定形	否定形
現在形	本だ	本ではない	本です	本ではありません
過去形	本だった	本ではなかった	本でした	本ではありませんでした

## (2) コソアド(現場指示のコソアド)

これはノートですか。——はい、それはノートです。  
 それはボールペンですか。——はい、これはボールペンです。  
 あれは本ですか。——はい、あれは本です。

教室でのやりとりでは、話者に近くて聞き手に遠いものを「こ-」で指し、聞き手に近くて話者に遠いものを「そ-」で指すという原則から、一般に「こ-」に対して「そ-」、「そ-」に対して「こ-」で受けるが、大きな物や建造物などの前での会話では次のようになる。

これはあなたの自動車ですか。——はい、これは私の自動車です。

「こ-」に対して「こ-」で受ける。もし、「それは私の自動車です。」と言えば、二人は離れて話していることになる。

## (3) 疑問文(質問文)

尋ねる文を「疑問文」と言うが、よく考えるとこの用語はおかしい。「質問文」と言ったほうが適切であるが、慣用に従って「疑問文」と言うことにする。

日本語では、「はい、いいえ」で答える疑問文も、疑問詞による疑問文も文末に「か」がくる。

これはテレビですか。これは何ですか。



## 4 名詞文 (2)

これは 何ですか。                      本です。  
あなたの傘は どれですか。      ことです。

### (1) 「何」と「どれ」

「何」と「どれ」は英語で言えば what と which に当たるが、英語を使わない  
たてまえの場合、次のように教える。

これは 何ですか。 → これは 本です。  
本は どれですか。 → 本は ことです。

つまり、「何」に対しては名称で答え、「どれ」に対しては指示して答える。  
「本はどれですか。」に対して、「これは本です。」と答えるのは間違いである。

### (2) 名称を問うときと指示してもらいたいとき

「何」と「どれ」との違いは、一般に、名称を知りたいときと、指示してほしい  
ときの用法の違いになる。

	物	人(普通)	人(敬称)	方向	場所
名称を問う	何	だれ	どなた	どちら	どこ
指示を要求	どれ	どの人	どの方/どなた	どちら	どこ

## ①「何」は物の名前を聞く。

「これは何ですか。」「それは本です。」

「どれ」は物について指示してもらう。

「あなたの傘はどれですか。」「私の傘はこれです。」

## ②「だれ」は人の名前を聞く。

「あの子はだれですか?」「次郎です。」

「どの人」は、人について指示してもらう。

「上田さんはどの人ですか。」「あの人です。」

「山田さんはだれですか」は間違いである。

## ③敬意を持って人の名前を尋ねるには「どなた」を使う。

「あの方はどなたですか。」「佐藤先生です。」

指示要求には「どの方」を使う。

「小山さんはどの方ですか。」「あの方です。」

指示要求に「どなた」も使える。「大山さんはどなたですか。」と言っても、間違いとは言えない。

◎人の名前を尋ねる場合でも、例えば「数学の先生は何先生ですか。」と言い、「だれ(どなた)先生ですか。」とは言わない。

## ④方向、場所についてはこの区別はなくなる。

方向 学校はどちらですか。——南です。(名称を問う)

学校はどちらですか。——こちらです。(指示要求)

場所 駅はどこですか。——「明大前」です。(名称を問う)

駅はどこですか。——この先です。(指示要求)

## ③「これは本です。」と「本はこれです。」

上に見たように、

「これは何ですか。」に対しては「これは本です。」

「これは新聞です。」

「これはノートです。」

「これは写真です。」

など無数の答えの可能性がある。

「本はどれですか。」に対しては「本はこれです。」

「本はそれです。」

「本はあれです。」

という答え方しかない。

「これは本です。」と「本はこれです。」とは、全く違う機能を果たしているのである。

## ①「何」は物の名前を聞く。

「これは何ですか。」「それは本です。」

「どれ」は物について指示してもらう。

「あなたの傘はどれですか。」「私の傘はこれです。」

## ②「だれ」は人の名前を聞く。

「あの子はだれですか?」「次郎です。」

「どの人」は、人について指示してもらう。

「上田さんはどの人ですか。」「あの人です。」

「山田さんはだれですか」は間違いである。

## ③敬意を持って人の名前を尋ねるには「どなた」を使う。

「あの方はどなたですか。」「佐藤先生です。」

指示要求には「どの方」を使う。

「小山さんはどの方ですか。」「あの方です。」

指示要求に「どなた」も使える。「大山さんはどなたですか。」と言っても、間違いとは言えない。

◎人の名前を尋ねる場合でも、例えば「数学の先生は何先生ですか。」と言い、「だれ(どなた)先生ですか。」とは言わない。

## ④方向、場所についてはこの区別はなくなる。

方向 学校はどちらですか。——南です。(名称を問う)

学校はどちらですか。——こちらです。(指示要求)

場所 駅はどこですか。——「明大前」です。(名称を問う)

駅はどこですか。——この先です。(指示要求)

## ③「これは本です。」と「本はこれです。」

上に見たように、

「これは何ですか。」に対しては「これは本です。」

「これは新聞です。」

「これはノートです。」

「これは写真です。」

など無数の答えの可能性がある。

「本はどれですか。」に対しては「本はこれです。」

「本はそれです。」

「本はあれです。」

という答え方しかない。

「これは本です。」と「本はこれです。」とは、全く違う機能を果たしているのである。

## 5 名詞文 (3)

わたしは 学生です。

ヤンさんは どの 国の 学生ですか。

わたしは ○○○の 学生です。

### (1) 人称代名詞

ヨーロッパの言語では、人称によっていつも動詞の語尾が変化するから、一人称、二人称、三人称の唱え方を真っ先に教える。

イタリア語 amare (愛する)

io amo	noi amiamo	私が愛する	我々が愛する
tu ami	voi amate	お前が愛する	お前たちが愛する
egli ama	essi amano	彼が愛する	彼らが愛する

日本語ではこういうことはないから、一人称、二人称、三人称の唱え方を最初に教える必要がない。しかし、欧米の学習者が知りたがることは確かだろう。日本語には、このような人称代名詞はたくさんあるが、あまり使われない。

アジアの言語で、朝鮮語、タイ語では日本語と同様に人称代名詞がたくさんあるが、中国語はそうでもない。我(wǒ——一人称)、你(nǐ——二人称)、他(tā——三人称)と簡単だ。

日本語教育では、一応、一人称「私(わたし)」、二人称「あなた」、三人称「あの人」を示しておく。三人称の「彼、彼女」は翻訳語であり、文章語であるので、初級では教えない。

## (2) 特に注意を要する「あなた」

日本語では二人称の「あなた」を使わずに話ができる。いや使ってはならないとさえ言えそうだ。

チャンさん、チャンさんはシンガポールの学生ですか。

——はい、私はシンガポールの学生です。

先生、これは先生の時計ですか。

——ああ、そうだよ。

このように名前、身分で呼びかけて、二人称代名詞の役割をさせているわけである。

## (3) 自分の名前に「～さん」をつける間違い

「私はメリーさんです。」のように自分の名前に「～さん」をつける間違いがよくある。「～さん」は英語の Mr., Mrs., Miss のどれにも当たるなどと教えると、必ずこの間違いが出てくる。教える側は英語の Mr., Mrs., Miss は敬称ではないと心得るべきである。そうでないと、平気で自分の名前につけるのである。

否定文でもやはり、つけるのはおかしい。

あなたはメリーさんですか。

——\*いいえ、私はメリーさんではありません。

——いいえ、私はメリーではありません。

## (4) 国と言語・国民の言い方

英語では同じ Japanese が「日本語」も「日本人」も意味するが、日本語では、言語、国籍は「～語」「～人」と別の語になる。

自己紹介で「私は〇〇人です。」というのはおかしい。「〇〇人」というのは「タイ人はタイ語を話します。」のように〇〇人の属性を言う文に使われる。

## ⑥ 「はい」と「いいえ」—応答詞

これは本ですか。——はい、そうです。

これは本ではありませんか。——いいえ、本です。

これはビールではありませんか。——はい、ビールではありません。

### (1) 応答詞——原則と実際

「はい、いいえ」を特に応答詞と言う。これは、英語の“Yes, No”と使い方が違うことはよく知られている。つまり、英語では内容によって(後につづく文によって)Yes、No が決まるが、日本語では質問の通りだったら「はい」、そうでなかったら「いいえ」となる、と言われている。上の文の通りである。

ところが、実際には次のような会話をよく経験する。

行きませんか。——はい、行きます。

——いいえ、行きません。

これは、英語の答え方と同じである。どのような場合にこうなるかと言うと、返事を予想している場合にこうなるようだ。

### (2) フランス語・ドイツ語の応答詞(否定疑問文に対する肯定の答え)

このように応答詞で各国語で問題になるのは、否定疑問文に答えるときである。

フランス語では、ふつうの肯定疑問文に対する肯定の答えは、ご存じ Oui であるが、否定疑問文に対する肯定の答えには、Oui とは違う特別のことば



Si を使う。

Il n'est pas parti?—Si.

彼は出発しなかったのですか。——いいえ、(出発しました。)

Si というのは特別のことばかと言うと、そうではない。イタリア語では、Si はふつうの肯定疑問文に対する答えにも否定疑問文に対する肯定の答えにも使う。

ドイツ語では、否定疑問文に対する肯定の答えは doch を使うという。「だって」というほどの意味である。

	肯定疑問文に対する		否定疑問文に対する	
	肯定の答え	否定の答え	肯定の答え	否定の答え
日本語(1)	はい	いいえ	いいえ	はい
日本語(2)	はい	いいえ	はい	いいえ
英 語	Yes	No	Yes	No
イタリア語	Sì	No	Sì	No
フランス語	Oui	Non	Si	Non
ドイツ語	Ja	Nein	Doch	Nein

### (3) 電話の「はい、はい」——「聞いていますよ」

日本人が英語で電話をしているのを聞いていると、さかんに“Yes, yes”と言うが、あれは「はい、はい」というのを英語に直訳したのだ、ということがよく言われる。

日本語の電話で「はい、はい」と言うのは、「聞いていますよ」という合図で、べつに承諾したという意味ではないから、“Yes, yes”というのは間違いだ、という指摘である。

タイ人が(もちろんタイ語で)電話するのを聞いていると、さかんに“ka, ka”

と言う。これはちょうど日本語の「はい、はい」のようなものだ。「聞いていますよ」という合図である。つまり、タイ語でも日本語と同じことをしているのだ。

外国語はすべて日本語と違う、と考えるのは間違いである。また、英語以外の外国語も英語と同じだろうと考えるのは、さらに大きな間違いである。何よりも、英語を外国語の代表と考えるのは、大きな間違いである。

#### (4) 「ええ」

「ええ」という応答詞がある。これは、子どもが使うことはまずない。もし使っていると、生意気なやつだと思われる。

## 7 「はい、そうです」

これはあなたの本ですか。

はい、そうです。

いいえ、そうではありません。

お酒を飲みますか。

はい、飲みます。

いいえ、飲みません。

「そうです」は名詞を受けるときに使う。動詞を受けるのに「そう」を使うことはできない。

本がありますか。

\* はい、そうです。

\* いいえ、そうではありません。

コーヒーを飲みますか。

\* はい、そうです。

\* いいえ、そうではありません。

形容詞も「そう」で受けることはできない。

それはおいしいですか。 はい、おいしいです。

\* はい、そうです。

それはきれいですか。 いいえ、きれいではありません。

\* いいえ、そうではありません。

動詞文、形容詞文では、質問に表れた動詞・形容詞で答えなければならな

いのである。

「～のですか」には「そう」が使える。名詞あつかいになるからである。

本があるのですか。

はい、そうです。

いいえ、そうではありません。

コーヒーを飲むのですか。

はい、そうです。

それはおいしいのですか。

はい、そうです。

それはきれいなのですか。

いいえ、そうではありません。

## ⑧ 存在文と所在文

机の上に 本が あります。  
 木の下に ねこが います。  
 本は 机の上に あります。  
 ねこは 木の下に います。

標準的な日本語の教科書では、名詞文に続いて存在文を提示する。存在文の述語は「ある、いる」という動詞であるが、一般の動詞について学ぶ前にこのような存在文を学ぶ。存在文を例にして、次のような文法事項を学ぶ。

①文型 [場所]に N(名詞)が ある／いる

文型 N(名詞)は [場所]に ある／いる

②「ある」と「いる」

③場所を表すコソアド

④場所の関係の表し方

⑤「に」 助詞。存在場所を表す。

### (1) 存在文の文型

存在文というのは人や動物や物の存在を表す文のことである。文型は

[場所]に [物]が ある (例)客間にテレビがある。

[場所]に [人・動物]が いる 庭ににわとりがいる。

となる。「ある」と「いる」の使い分けは、

物の 存在を表すとき「ある」

人・動物の 存在を表すとき「いる」

を用いるということである。

この文型において、「～に」は存在場所を表し、「～が」は主体を表す。

② 所在文の文型

存在文の[物]あるいは[人・動物]を主題化変形した文を所在文と呼ぶ。所在文の文型は

[物]は [場所]に ある (例)テレビは客間にある。

[人・動物]は [場所]に いる にわとりは庭にいる。

となる。

存在文はふと見た情景を言う文であるのに対して、所在文はその物なり人なりを主題として取り上げ、それについてどこにあるか、またはいるかを述べる文である。

主題化変形については「2 日本語文法の概要」を参照。

③ 「ある」「いる」

	普通形		丁寧形	
	肯定形	否定形	肯定形	否定形
現在形	ある	ない	あります	ありません
過去形	あった	なかった	ありました	ありませんでした

存在文の述語は「ある」か「いる」である。

「ある」の述語の形(叙述形)は、表のように変化する。「ある」は五段動詞として変化するが、普通形の否定形のところだけが一般の五段動詞と異なり、「ない」「なかった」となる。(「あらない」などとはならない。)このうち、最初の段階で教えるのは丁寧形の現在形である(太字の部分)。

「いる」は一段動詞の変化表にそって変化する。

動詞の変化については「14 動詞について」参照。

#### (4) 場所を表すコソアド

場所を表すコソアドとは「ここ、そこ、あそこ、どこ」である。これらは次のように使われる。

<u>そこに</u> 何がありますか。	<u>ここに</u> 本があります。
<u>どこに</u> 鳥がいますか。	木の上にあります。
<u>どこかに</u> 鳥がいますか。	いいえ、 <u>どこにも</u> いません。

「どこかに」「どこにも」については「9 『何がありますか』と『何かがありますか』」参照。

#### (5) 場所の関係の表し方——「上、<sup>1</sup>下、中、前、後ろ、横、そば」など——

「机の上に」を英語では“on the desk”と言う。このように、英語では前置詞で表すところを、日本語では関係を表す名詞を使って次のように表す。

机の上に    いすの下に    かばんの中に    家の前に    店の後ろに  
銀行の横に    駅のそばに

なお、この「に」は存在文の文型だから「に」となるのであって、動作を表す文型では「で」となる。

机の上に    ……があります。  
木の下で    ……遊びます。

#### (6) 存在文の問答

存在文を使った問答の例を挙げておく。特に否定で答えるときに注意。

机の上に本がありますか。	いいえ、机の上には本はありません。
机の下に何がありますか。	いすがあります。
どこに本がありますか。	ピアノの上にあります。
机の上に何かがありますか。	いいえ、何もありません。
どこかにいい本がありますか。	いいえ、どこにもありません。

「何か」「何も」については「9 『何がありますか』と『何かがありますか』」参照。

## (7) 「は」と「が」

「は」と「が」が問題になるのは、学習者が自分の言語に訳してみると、「～は」も「～が」も同じになってしまうからである。朝鮮語には「は」と「が」の区別があるから、問題にならない。母語が朝鮮語の学習者には「は」と「が」の区別をあれこれ説明する必要はない。

上に述べた存在文と所在文を提示したあたりから、「は」と「が」を問題にする学習者が現れる。これは、英語、中国語で次のように訳し分けられる。訳し分けられるようになれば学習者は質問に来なくなるものである。

机の上に本があります。	本は机の上にあります。
There is <u>a book</u> on the desk.	<u>The book</u> is on the desk.
卓子上 有 一本書。	書 在 卓子上。

## (8) 行事などの存在を表す文

存在文に関連して、行事などの存在を表す文を習う。「に」と「で」が対照的であるところから、この文型は重要である。

体育館に ピンポンの台が あります。

体育館で ピンポンの試合が あります。

つまり、物の存在を表す文では「に」、動作・活動・行事の存在を表す文では、その行われる場所は「で」で示される。その際、「ある」は「行われる」という意味になる。



## ⑨ 「何がありますか」と「何かありますか」

存在文との関連で「何か」という言い方が出てくる。「何」は what で、「何か」は something なのだが、これを外国語を使わずに教えるとしたら、どうするか。

次に一般的な提出例を示そう。

「何がありますか。」	「何かありますか。」
「本があります。」	「はい、あります。」
	「何がありますか。」
	「本があります。」

「何が」に対しては「本が」と直接答え、「何か」に対しては「はい」とまず返事をしておいて、次の「何が」の間を待って「本が」と答える。この「何か」に対して、まず「はい」と答えるというのが要点である。

### (1) 「何かが」から「何か」へ

何が ありますか。

何か ありますか。

と並べると、「が」と「か」が対立しているように見えるが、実はそうではない。もともと

**何** が ありますか。

**何か** が ありますか。

のように、「何」と「何か」が対立しているのである。そして、「何か」の場合、「か」が落ちたのである。

## (2) 「何かを」から「何か」へ

これは存在文の「あります」のときにだけ現れるのではなく、他の一般の動詞のときにも現れる。「飲みます」を例にして示してみる。

「何を飲みますか。」 「コーヒーを飲みます。」	「何か飲みますか。」 「はい、飲みます。」 「何を飲みますか。」 「コーヒーを飲みます。」
----------------------------	--

何	を	飲みますか。
何か	を	飲みますか。

明らかに「何」と「何か」が対立していることがわかる。そして、「何か」の場合、「を」が落ちたのである。

格助詞は「何か」の後につく。

何かが	何かを	何かに	何かへ	何かから
-----	-----	-----	-----	------

これは「何」という疑問詞だけではない。他の疑問詞の場合も同じである。例をあげる。

誰かが	誰かを	誰かに		誰かから
どこかが	どこかを	どこかに	どこかへ	どこかから
どれかが	どれかを	どれかに	どれかへ	どれかから

## (3) 否定の場合

否定の場合は「も」と否定形を使う。

何も ありません。  
何も 飲みません。

格助詞は「何」と「も」との間に入って次のようになる。

何がも 何をも 何にも 何からも

格助詞「が」と「を」は常に落ちる。(ごくたまに「～をも」と言うことがある。)  
その他の格助詞は落ちない。

他の疑問詞の場合。

だれがも	だれをも	だれにも		だれからも
どこがも	どこをも	どこにも	どこへも	どこからも
どれがも	どれをも	どれにも	どれへも	どれからも

## 10 形容詞

これはおいしいバナナです。  
 ここは静かな部屋です。  
 このバナナはおいしいです。  
 このりんごはおいしくありません。  
 きのうは暑かったです。  
 きのうは寒くなかったです。

### (1) イ形容詞とナ形容詞

高い、大きい、おいしい、白い……イ形容詞(形容詞)

静かな、きれいな、親切な、丈夫な……ナ形容詞(形容動詞)

日本語教育で形容詞と言われているものには、「イ形容詞」と「ナ形容詞」がある。前者は、ふつう単に形容詞と言われ、後者は形容動詞と言われている。

基本形としてあげるときはイ形容詞は叙述形、ナ形容詞はその特徴をとって連体形をあげる。

文法的にみると、形容動詞つまりナ形容詞は、ほとんど名詞と同じ振舞いをする。“形容名詞”あるいは“名詞形容詞”と言ってもいいくらいである。英語では Adjectival Noun とか Qualitative Noun という。

◎「大きな」は名詞を修飾する働きがあるだけで、述語とならない(つまり「大きくだ」と言わない)から、形容動詞ではない。連体詞と考える。

◎「同じ」は直接名詞を修飾する。特殊な品詞である。

同じ人      同じことば

## ② 形容詞の働き

形容詞の命名の由来から言えば、名詞を修飾するというのがその本来の働きのはずである。その他に、文の述語にもなる。またいわゆる連用形になって動詞を修飾する働きもある。この場合、副詞と同じような働きをする。

	イ形容詞	ナ形容詞
名詞を修飾する 述語になる 動詞を修飾する	<u>おいしい</u> リング このリングは <u>おいしい</u> 。 おいもを <u>おいしく</u> 煮る。	<u>静かな</u> 部屋 この部屋は <u>静か</u> だ。 子供が <u>静かに</u> 眠っている。

## ③ 形容詞の変化 イ形容詞「高い」の例

		普通形		丁寧形	
		肯定形	否定形	肯定形	否定形
叙述形	現在形	高い	高くない	高いです	高くありません 高くないです
	過去形	高かった	高くなかった	高かったです	高くありませんでした 高くなかったです
連体形	現在形	高い	高くない		
	過去形	高かった	高くなかった		
中止形 テの形 タラの形 バの形		高く 高く 高かったら 高ければ	高くなく 高くなくて 高くなかったら 高くなければ		高くありませんで 高くありませんでしたら

ナ形容詞の例

		普 通 形		丁 寧 形	
		肯定形	否定形	肯定形	否定形
叙 述 形	現在形	静かだ	静かではない	静かです	静かではありません
	過去形	静かだった	静かではなかった	静かでした	静かではありませんでした
連 体 形	現在形	静かな	静かではない		
	過去形	静かだった	静かではなかった		
連用形		静かに			
中止形		静かで	静かではなく		
テの形		静かで	静かではなくて		静かでありませんで
タラの形		静かだったら	静かでなかったら		静かでありませんでしたら

④ 形容詞の用法で特に注意すべきこと＝「多く、近く、遠く」

＊ 多い人が映画を見ていました。

many people を直訳して「多い人が」という間違いが多い。「多くの人」とし  
なければならない。

「～く」の形が名詞となるのは、他に「近く、遠く」がある。

近くの本屋      遠くにある駅

「近く」の用法で一番多いのは、次の例のように「だいたい」という意味の接尾

語的な場合である。

100万人近くの人が海外に出かけたそうだ。

## 11 属性形容詞と感情形容詞

日本語の形容詞(ナ形容詞を含む)の中に、きわだった特徴を示し、広く他の文法事項にも影響をおよぼす一群の形容詞がある。

「感情形容詞」と呼ばれているのがそれである。それと対をなすのは「属性形容詞」である。

そこで、それぞれの構文的特徴などを見てみよう。

### (1) 属性形容詞——客観的な物事の形状・属性を表す

「高い」「広い」の例

あの山は高い。	* 私はあの山が高い。
	? <u>私にとって</u> あの山は高い。
この部屋は広い。	* 私はこの部屋が広い。
	<u>私にとって</u> この部屋は広い。

属性形容詞は客観的な物事の形状・属性を表すもので、構文は

～は [形容詞]

と簡単である。

感情形容詞は、原則として話し手の感情を表すものであるから、暗黙のうちに主語は「私」になっているが、属性形容詞では、上の構文の中に「私」の入る余地はない。(もっとも、「私」の属性を言おうとするときは別であるが。)

強いて属性の判断者を入れるとすれば、「～にとって」という言い方があるが、これとて「私にとってあの山は高い。」というのはちょっとおかしい。

それから、感情形容詞では、構文の中に感情の対象を表すことばが入ることがあるが、属性形容詞ではそういうことはありえない。

「私は顔が広い。」という言い方はあるが、この「顔」は「広い」の属性の持ち主



であって、対象ではない。

## (2) 属性形容詞の構文をとる「おいしい」

\* 私はおいしい。

この料理はおいしい。

私はこの料理がおいしい。

私にとって この料理はおいしい。

「おいしい」は感情形容詞のように見えて、実は属性形容詞の構文をとる。感情形容詞なら「私はおいしい。」と言っておかしくないのだが、この文はおかしい。無理に解釈すると、「この料理はおいしい。」の「料理」のように、「私」が食べられる対象と解されるからである。

ただし、対象の「～が」はとる。

「私はこの料理がおいしい。」

## (3) 感情形容詞——話し手の主観的な感情、感覚、評価を表す

私はさびしい。

\* 山田さんはさびしい。

山田さんはさびしがっている。

「さびしい」は典型的な感情形容詞である。単に、「さびしい」とあれば、話し手(一人称)が主語と解される。そして、三人称を主語にして言うことはできない。もし、三人称を主語にするなら、「さびしがっている」のように動詞にしなければならない。

この点が感情形容詞のきわだった特徴である。ただし、三人称主語でも言えないのは、はだかの述語の場合だけで、次の場合は言える。

過去形 山田さんはさびしかった。

「～のだ」 山田さんはさびしいのだ。

「～そうだ」 山田さんはさびしそうだ。

## 連体修飾 さびしい山田さん

要するに、後に何か続く場合は言えるのである。

### (4) 対象をとる感情形容詞

上と同じであるが、対象をとることだけが違う。

私は [対象]が [形容詞]

という構文になる。

**注意！** たまたま人が対象になる場合、見かけ上は三人称主語の構文と同じになる。例えば、

田中さんがうるさい。

田中さんはうるさい。(上の文を主題化変形したもの)

どちらも「田中さん」は対象である。省略されている主語「私」が、「うるさい」と感じている主体である。

うるさい [対象]が 音楽がうるさい  
田中さんがうるさい

私は音楽がうるさい。	* 山田さんは音楽がうるさい。 山田さんは音楽をうるさがっている。
------------	--------------------------------------

---

私は田中さんがうるさい。	山田さんは田中さんをうるさがっている。
--------------	---------------------

退屈だ [対象]が 授業が退屈だ  
田中さんが退屈だ

私は授業が退屈だ。	* 山田さんは授業が退屈だ。 山田さんは授業を退屈がっている。
-----------	------------------------------------

---

私は田中さんが退屈だ。	山田さんは田中さんを退屈がっている。
-------------	--------------------

## (5) 属性形容詞的な働きの「面白い」

さらにやっかいなことに、感情形容詞の中のあるものは、属性形容詞の構文をとることもある。次の「落語」も「田中さん」も「面白い」の属性を持つものである。

この落語は面白い。  
田中さんは面白い。

面白い      [対象]が      落語が面白い      田中さんが面白い

私はこの落語が面白い。      \* 山田さんはこの落語が面白い。  
山田さんはこの落語を面白がっている。

私は田中さんが面白い。      山田さんは田中さんを面白がっている。

## (6) 「好きな、きらいな」

最も基本的な感情である好き嫌いを表すことばが、いわゆる感情形容詞の振舞いをしないのだから、ことばというものは面白い。

つまり、三人称主語で言え、「～がる」という形がないのである。

私はバナナがすきです。      山田さんはうなぎが好きます。  
私はニンジンがきらいです。      山田さんはお酒がきらいです。  
\* すきがる      \* きらいがる

## 12 数詞・助数詞・序数詞

教室に机が五つあります。  
コーヒーを3杯飲みました。  
友だち3人に電話しました。  
3人の友だちから手紙が来た。

### (1) 数詞

日本語の数詞には和語の系列と漢語の系列がある。

和 語 系	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	漢 語 系	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
	ひとつ	ふたつ	みっつ	よっつ	いつつ	むっつ	ななつ	やっつ	ここのつ	とお		イチ	ニ	サン	シ	ゴ	ロク	シチ	ハチ	ク	ジュウ

11以上は漢語系のことばになってしまう。

但し、じゅうよん(14)、じゅうなな(17)、よんじゅう(40)、ななじゅう(70)などのように、和語が混じり込んでいる場合もある。これは、主にシジュー、シチジューという発音の困難性が理由のようである。

### (2) 数詞を含む文型

数詞の導入は存在文の続きでするのが一般的である。

[場所] に [物] が [数詞] あります  
 [場所] に [人] が [数詞] います

教室に 机が 五つ あります。  
 図書室に 学生が 5人 います。

しかし動詞文の場合も十分考慮に入れておかなければならない。

N(名詞)を 数詞 Vt(動詞)

コーヒーを 3杯 飲みました。

それは、以下に示すように、関係する格助詞によって文型の形式に制限があるからである。

数詞とそれに関わる「物／人」を表すことばとの関係には、次の4形式がある。このうち、A形式が基本となる。

- A 机が 五つ あります。
- B 五つ 机が あります。
- C 机 五つが あります。
- D 五つの 机が あります。

- A コーヒーを 3杯 飲みました。
- B 3杯 コーヒーを 飲みました。
- C コーヒー 3杯を 飲みました。
- D 3杯の コーヒーを 飲みました。

A形式が基本であるが、

机が 五つ あります。  
 コーヒーを 3杯 飲みました。  
 \* 友だちに 3人 電話します。  
 \* 友だちから 3人 手紙が来た。  
 \* 友だちと 3人 ダンスをした。

こう並べてみて、「友だちに3人電話します」以下の文が言えないのは、どう考えたらいいのだろうか。これは格助詞が「に、から、と」の場合である。一般に、格助詞が「が、を」のときだけ言えるのである。A形式で言えない場合は、代わりに他の形式を使うことになる。

友だち 3人に 電話します。(C形式)  
 友だち 3人から 手紙が来た。  
 友だち 3人と ダンスをした。  
 3人の 友だちに 電話します。(D形式)  
 3人の 友だちから 手紙が来た。  
 3人の 友だちと ダンスをした。

数に関する表現でよくある誤りは

\* 机が 五つが あります。  
 \* コーヒーを 3杯を 飲みました。

というもので、格助詞「を」を二箇所につけてしまう間違いである。

### (3) 助数詞

「5人」の「人」、「3台」の「台」などを日本語では助数詞と言う。

(「五つ」は助数詞を伴わない数詞だけの表現である。また、数詞と助数詞とをまとめて、数詞と言うこともある。)この「～人」とか「～台」とかは、日本語では必ず数を表すことば(一、二、三、…千、など)の後に付けて用いられるので、数を助けることばというわけで「助数詞」と言われる。

中国語やタイ語にもこのような「助数詞」は多い。しかし、中国語やタイ語では、数を数えるときの外に、

中国語 這 匹 馬 (この馬)

タイ語 nǎngsǔuu lēm ní (この本)

のように、数詞がなくても使われ、もっぱら名詞の種類分けのために使われることがあるので、類別詞(Classifier)と言われる。

助数詞を教えるとき注意すべきことは、日本語のいろいろな助数詞を羅列することではなくて、基本的な助数詞だけを取り上げて、

一、六、八、十

それに

三と何(数に関する疑問詞を作る＝「何人、何杯、何回など」)がつくところで、発音が変わることがある、ということを示すことである。

イ ッ ポ ン ー	ニ ホ ン	サ ン ボ ン	ヨ ン ホ ン	ゴ ホ ン	ロ ッ ポ ン	ナ ナ ホ ン	ハ ッ ボ ン	キ ュ ウ ホ ン	ジ ッ ポ ン	ナ ン ボ ン
イ ッ サ ッ	ニ サ ッ	サ ン サ ッ	ヨ ン サ ッ	ゴ サ ッ	ロ ク サ ッ	ナ ナ サ ッ	ハ ッ サ ッ	キ ュ ウ サ ッ	ジ ッ サ ッ	ナ ン サ ッ

とかく初心の教授者は、助数詞を日本語の特徴の一つだと思って、あらゆる助数詞の一覧表を示したがるものだが、そんな必要はさらさらない。

この発音の変化は、日本人には何でもないし、漢字で表記しては、気づきにくいことであるが、学習者には、難しいことである。

(4) 序数詞

同じ「じょうし」でも助数詞と序数詞とは違う。英語では助数詞は習わずに序数詞を習う。序数詞というのは「first, second, third…」などのことである。つまり、順序を示す数詞というわけである。

日本人にとって序数詞がそんなに重要だとは思われていない。  
英語の数詞(序数詞に対して基数詞と言うことがある)と序数詞を挙げる。

基数詞										
one	two	three	four	five	six	seven	eight	nine	ten	
序数詞										
first	second	third	fourth	fifth	sixth	seventh	eighth	ninth	tenth	

英語ではこのように形が異なるが、日本語では

基数詞	一	二	三	……
序数詞	第一	第二	第三	……
	一番目	二番目	三番目	……

と規則的であるから、とくに序数詞が問題になることは少ないのである。  
また、日本語では基数詞と序数詞があいまいに使われている場合がある。  
はっきりと区別して使用するという意識が薄いのである。例えば、「ふつか」と言った場合、特定の月の第二日(the second day)なのか、24時間の二倍(two days)なのか、はっきりしない。強いて区別するなら、「ふつかめ」(the second day)とか「ふつかかん」(two days)とかと言う。



## 13 「ごろ」と「ぐらい」—時刻と時間(と量)

数詞に関連して「時刻」と「時間」の言い方を習う。さらに、大体の時刻、大体の時間(量)の言い方、そこに使われる「ごろ」と「ぐらい」について学ぶ。

10時ごろに起きました。

十日ごろに来ました。

10月ごろに始めます。

10時間ぐらい寝ました。

十日間ぐらい北海道にいました。

10か月ぐらいかかりました。

そこに人が100人ぐらいいます。

十日(間)ぐらい待ってください。

このくつは2000円ぐらいです。

鉛筆を10本ぐらい買いました。

### (1) 時刻と時間

特定の時刻を言うときと、一定の長さの時間を言う言い方は、次のように区別されている。

時刻	1 時	2 時	3 時	.....
時間	1 時間	2 時間	3 時間	.....

[時刻] 私は 1 時に ここへ来ました。

[時間] 1 時間 待ちました。

日常言語ではこれをまとめて「時間」と言っているのですが、紛らわしいが、この章に限って、上のような使い方をすることにする。

時刻と時間の区別は、分とか秒の単位になると、はっきりとは区別されていない。強いて区別したい場合のみ、時間の方に「間」ということばをつける。

時刻	10分	40秒
時間	10分(間)	40秒(間)

## (2) 日付の言い方

この「時刻」「時間」という考え方を日付(月、日)の場合にも広げて考えてみよう。漢字では区別がはっきりしないので、ひらがなで表記する。

### ①日の場合

時刻	ついたち	ふつか	みっか	よっか	……	とおか
時間	いちにち	ふつか	みっか	よっか	……	とおか

表記は、時刻も時間も「一日、二日、……」と同じになる。読み方も「ついたち、いちにち」以外は同じになる。非常に紛らわしい。

時間で特に明示するときは、「ふつかかん(二日間)」のように「かん(間)」をつける。

「ににち、さんにち、よんにち、……」とはあまり言わない。

### ②月の場合

時刻	いちがつ	にがつ	さんがつ	しがつ	……
時間	いっかげつ	にかげつ	さんかげつ	よんかげつ	……

次のような語は非常に読み間違いやすい。

4月 \*よんがつ    7月 \*なながつ    9月 \*きゅうがつ

これは時刻と時間の言い方を混同するからである。例えば、9月を「きゅうがつ」と言ってしまうのは、9か月(きゅうかげつ)と混同するからである。

【問】「ひとつき、ふたつき」という言い方はどのように扱ったらよいか。教育上の配慮を考えなさい。

### (3) 「ごろ」——大体の時刻

時刻と時間の区別に関連して「ごろ」と「ぐらい」を教える。

8時ごろに起きました。 8月ごろに原稿を集めます。	10時間ぐらい寝ました。 8か月ぐらいかかるでしょう。
------------------------------	--------------------------------

「ごろ」がつくと「に」はなくてもよい。

8時ごろに 起きました。

8時ごろ 起きました。

◎ところが、最近(昭和60年7月ぐらいから)「ごろ」の代わりに「ぐらい」という人が多くなった。

### (4) 「ぐらい」——大体の数量

「ぐらい」は元来大体の時間(時刻でなく)を示すだけでなく、外の一般の数量について用いられることばである。

ここに本が100冊ぐらいあります。  
フロッピーをもう100枚ぐらい買いました。  
車にガソリンを30リットルぐらい入れた。

### (5) 「ころ」と「ごろ」

大体の時刻を表す「ごろ」に関連して、紛らわしい「ころ」と「ごろ」がある。

「ころ」は名詞なので他の名詞に後続する場合、名詞と名詞を結びつける「の」を使い「～のころ」となる。

・ 子どものころ    学生のころ

また、普通名詞のように連体詞が前に来る。

このころ    そのころ    あのころ

「ごろ」は接尾語で、あるときを漠然と示す。

いつごろ    このごろ    ちかごろ

見ごろ    食べごろ

したがって、「このころ」と「このごろ」では意味が異なる。

このころあまり勉強しませんでした。

(「この」はある特定の時を指す。)

このごろあまり勉強しません。

(「このごろ」は一語で、現在を含んだ漠然とした期間を意味する。)

「このごろ」という語はあっても「\*そのごろ」「\*あのごろ」という語はない。これは非常に間違いやすいことである。

〔答〕「ひとつき、ふたつき」は時間の意味であって、「一月」「二月」と書く。これは「いちがつ、にがつ」と表記が同じになって紛らわしいから、初歩の段階では避けるべきである。この言い方をしなくても、「いっかげつ(1か月)、にかげつ(2か月)」という言い方があるから表現に困ることはない。さらに、具合の悪いことには、「ひとつき、ふたつき」のシリーズには、「いつつき、むつき、ななつき」など数が多くなると、あまり使わない言い方になる。同じようにはそろっていないのである。

## 14 動詞について

### (1) 動詞の基本的な働き

動詞の基本的な働きは、文の要となることである。この働きをするとき、通常文末に置かれる。こうして、動詞は文に文としての体裁を与えるのである。動詞のこの働きを「文の述語となる」と言う。

### (2) 動詞の変化

動詞は、その働きによっていろいろな形をとる。

叙述、意志、命令を表すときは、それぞれ「叙述形」「意志形」「命令形」をとって文末におかれる。

名詞を修飾するときは、「連体形」をとる。

条件や並行動作を表すときは「バの形」、「ナガラ」の形」などをとる。

動詞は変化の仕方から見て、

(1)五段動詞	[強変化動詞(Strong Verb)、 子音幹動詞(Consonant Verb)]
(2)一段動詞	[弱変化動詞(Weak Verb)、母音幹動詞(Vowel Verb)]
(3)不規則動詞	

に分かれる。[ ]内のような名称で呼ぶこともある。

不規則動詞は「来る」と「する」だけである。

「勉強する」など動作名詞+「する」の動詞も、この「する」と同じ変化をする。

動詞の各変化形の作り方は、常にこの三種類に分けて説明される。

五段動詞 一段動詞 不規則動詞	-uで終る -eru、-iruで終る	読む、書く、行く 食べる、見る、教える 来る、する (「勉強する」「運動する」などを含む)
-----------------------	-----------------------	--

◎-eru、-iruで終わる五段動詞

五段動詞は-uで終わるものだが、-eru、-iruで終わっていても矛盾しない。しかし、学習者にはあらかじめ示しておかないと、変化の仕方がわからない。

-eru、-iruで終わる五段動詞には、次のものがある。

知る、走る、入る、帰る、切る、要る、すべる、減る、照る、練る、散る、蹴る、あせる、かじる、混じる、しゃべる、せびる

五段動詞「読む」、一段動詞「見る」、不規則動詞「来る」、「する」、受身形「読まれる」、希望形「読みたい」の例を58ページ以下に掲げる。

③ 動詞の種類

動詞の文法的な意味による分類にはいろいろあるが、次の三つが特に重要である。文法の研究が進めば、その他の分類もありうる。

①自動詞と他動詞

自動詞	対象を表す「～を」をとらない動詞	いる、ある、おきる、ねる、歩く、見える、開く、付く
他動詞	対象を表す「～を」をとる動詞	読む、食べる、なぐる、持つ、見る、開ける、付ける

「道を歩く」の「を」は対象を表す「を」ではないので、「歩く」は自動詞である。

## ②継続動詞と瞬間動詞

詳しくは「25『～ている』の意味」のところで述べる。

継続動詞	「本を読んでいる」のように 「～ている」の形で進行の状 態を表す動詞	読む、書く、話す、走る、笑う、 歌う、(雨が) 降る
瞬間動詞	「窓が開いている」のように 「～ている」の形で結果の状 態を表す動詞	開く、割れる、こわれる、折れ る、並ぶ、知る、持つ

## ③意志動詞と無意志動詞

意志動詞	人間の意志的な動作を表す 動詞	勉強する、読む、歩く、計画する、 下りる
無意志動詞	人間の意志によってコント ロールできないことを表す 動詞	びっくりする、忘れる、(試験に) 受かる、落ちる

人間以外の物の動きを表す動詞は当然“無意志”動詞であるが、特に無意志動詞とは言わない。

五段動詞「読む」の例

		普通形		丁寧形	
		肯定形	否定形	肯定形	否定形
叙述形	現在形	読む	読まない	読みます	読みません
	過去形	読んだ	読まなかった	読みました	読みませんでした
連体形	現在形	読む	読まない	読みます	読みません
	過去形	読んだ	読まなかった	読みました	読みませんでした
意志形		読もう	———	読みましょう	———
命令形		読め	読むな	———	———
中止形		読み	読まず	———	———
テの形		読んで	読まないで 読まなくて	読みまして	読みませんで
ナガラの形		読みながら	———	———	———
バの形		読めば	読まなければ	———	———

◎表の説明

(1)叙述形の八つの形は最も基本的なものである。「現在形」「過去形」は、必ずしも、それぞれ「現在」「過去」を表すものではないから、「ルの形」「タの形」と言うこともある。



## 一段動詞「見る」の例

		普通形		丁寧形	
		肯定形	否定形	肯定形	否定形
叙述形	現在形	見る	見ない	見ます	見ません
	過去形	見た	見なかった	見ました	見ませんでした
連体形	現在形	見る	見ない	見ます	見ません
	過去形	見た	見なかった	見ました	見ませんでした
意志形 命令形		見よう	——	見ましょう	——
		見ろ／見よ	見るな	——	——
中止形 テの形		見 見て	見ず 見ないで 見なくて	—— 見まして	—— 見ませんで
	ナガラの形 バの形	見ながら 見れば	—— 見なければ	—— ——	—— ——

(2)連体形は、基本的に叙述形と同じである。ただ、網掛けのところ、丁寧形はあまり使われない。

(3)叙述形、意志形、命令形はそこで文が切れる。言い替えると、単文ではそこで文が切れる。この後に来るのは終助詞ぐらいである。一段動詞の命令形は「一ろ、一よ」の二つある。「へ見よ！ 東海の空あけて……」

## 不規則動詞「来る」の例

		普通形		丁寧形	
		肯定形	否定形	肯定形	否定形
叙述形	現在形	くる	こない	きます	きません
	過去形	きた	こなかった	きました	きませんでした
連体形	現在形	くる	こない	きます	きません
	過去形	きた	こなかった	きました	きませんでした
意志形 命令形		こよう こい	—— くるな	きましょう	——
中止形 テの形		き きて	こず こないで こなくて	—— きまして	—— きませんで
ナガラの形 バの形		きながら くれば	—— こなければ	—— ——	—— ——

(4)中止形、テの形、ナガラの形、バの形は、文の途中で使われる。言い替えると、文をつなぐ働きがある。なお、ナガラの否定形「読まないながら」もないことはないが、一般的ではないので空欄としておく。

(5)テの形の否定形は二つある。「読まないで」と「読まなくて」である。使い分けもある。

## 不規則動詞「する」の例

		普通形		丁寧形	
		肯定形	否定形	肯定形	否定形
叙述形	現在形	する	しない	します	しません
	過去形	した	しなかった	しました	しませんでした
連体形	現在形	する	しない	します	しません
	過去形	した	しなかった	しました	しませんでした
意志形 命令形		しよう しろ／せよ	—— するな	しましょう	——
中止形 テの形		し して	せず しないで しなくて	—— しまして	—— しませんで
ナガラの形 バの形		しながら すれば	—— しなければ	—— ——	—— ——

(6)タリの形、タラの形は表の一番下のわくに入るべきものであるが、はんぎつをさけるため省いた。

## 受身形「読まれる」の変化

		普通形		丁寧形	
		肯定形	否定形	肯定形	否定形
叙述形	現在形	読まれる	読まれない	読まれます	読まれません
	過去形	読まれた	読まれな かった	読まれました	読まれませんでした
連体形	現在形	読まれる	読まれない	読まれます	読まれません
	過去形	読まれた	読まれな かった	読まれました	読まれませんでした
意志形		読まれよう	——	読まれ ましょう	——
命令形		読まれろ	読まれるな	——	
中止形		読まれ	読まれず	——	——
テの形		読まれて	読まれないで 読まれなくて	読まれまして	読まれ ませんで
タラの形		読まれたら	読まれな かったら	読まれ ましたら	読まれません でしたら
バの形		読まれれば	読まれ なければ	——	——

(7)受身形「読まれる」、使役形「読ませる」は五段動詞の基本形から派生したものとする。受身形、使役形は、それぞれが一つの一段動詞として、上の表のように変化する。

## 希望形「読みたい」の変化

		普通形		丁寧形	
		肯定形	否定形	肯定形	否定形
叙述形	現在形	読みたい	読みたくない	読みたいです	読みたくありません
	過去形	読みたかった	読みたくなかった	読みたかったです	読みたくありませんでした
連体形	現在形	読みたい	読みたくない	——	——
	過去形	読みたかった	読みたくなかった	——	——
中止形		読みたく	読みたからず	——	——
テの形		読みたくて	読みたくなくて	——	——
タラの形		読みたかったら	読みたくなかったら	——	——
バの形		読みたければ	読みたくなければ	——	——

(8)希望形「読みたい」も基本形からの派生で形容詞の変化にしたがう。

## 15 動詞を述語とする構造文型

ここでは動詞を述語とする主な構造文型をまとめる。

### (1) 自動詞の文型

#### ① Nが Vi

日が くれる  
雨が ふる

#### ② N1に N2が Vi

机の上に 本が ある  
木の下に 犬が いる

N 1 は場所を表す名詞。「に」は存在場所を表す。

N 2 が物を表す名詞のときは Vi は「ある」、人・動物を表す名詞のときは「いる」となる。

#### ③ N 1 で N 2 が Vi

ホールで 集会在がある

N 1 は場所を表す名詞。「で」は動作の行われる場所を表す。

N 2 は動作・行事を表す名詞(パーティー、会議など)。

Vi は「ある」。この文型の場合、「ある」は「行われる」という意味になる。

#### ④ Nに Vi

ここに 立つ	会社に 勤める
いすに すわる	港に 着く
木に 止まる	車に 乗る
東京に 住む	

「に」は到着点を表す。

## ⑤Nへ Vi

ヨーロッパへ 行く	玄関の前へ 集まる
東京へ 来る	地球へ 近づく
家へ 帰る	部屋へ 入る

④のNは場所とは限らないが、⑤のNは場所を表す名詞である。「へ」は方向を表すが、ほとんど「に」と言い替えられる。

## (2) 他動詞の文型(その1) 主に「物」を対象とするもの。

### ①Nを Vt

窓を 開ける	本を 読む
木の枝を 折る	テレビを 見る
糸を 切る	音楽を 聞く
虫を 殺す	
おもちゃを こわす	
ご飯を 食べる	
水を 飲む	
紙を 燃やす	
コップを 割る	

Vt は他動詞。最も一般的な他動詞の文である。

## ②Nを Vt

	手紙を	書く
	ご飯を	たく
山に	あなを	ほる
空き地に	小屋を	建てる
ぶどうから	ぶどう酒を	作る
海水から	塩を	とる
小麦粉で	パンを	作る

①との違いはNが作り出す対象であること。Vt は一般に生産動詞と言われるグループのものに限られる。作り出した物が存在することになる場所は「Nに」で表す。

原料(製品になると素材が変化するもの)は「Nから」で、材料(製品に素材がそのまま生きるもの)は「Nで」で表す。

## ③N1に N2を Vt

部屋に	ステレオを	置く
封筒に	切手を	はる
山に	木を	植える
引出しに	財布を	しまう
コップに	ビールを	注ぐ
車に	荷物を	積む
かべに	ペンキを	塗る
トラックに	荷物を	のせる
本に	しおりを	はさむ



直接対象と間接対象の二つの対象にかかわる動作を表す文型である。直接対象は「～を」で表し、間接対象は「～に」で表す。

「N1に」と「N2を」とを入れ換えて、「N2を N1に Vt」としてもよい。

④N1から N2を Vt

机の上から	本を	とる
首から	首飾りを	はずす

「Nから」は離れるところを表す。

**(3) 他動詞の文型(その2)** 主に「人」を対象とするものをまとめる。

①[人]を Vt

子どもを	ほめる
学生を	しかる

②[人]の Nを Vt

子どもの	絵を	ほめる
学生の	行いを	しかる

①と②に同じ「ほめる、しかる」という動詞が用いられている。この種の動詞は両方の文型で用いられる。

③[人]に [動作]を Vt

ガイドに	案内を	たのむ
先生に	解説を	お願いする
社長に	面会を	要求する

「[人]が[動作]を行う」ことを、主体がお願いしたり、求めたりする意味。

## ④[人]を [場所]へ Vt

友だちを	公園へ	案内する
学生を	教官室へ	よぶ

「へ」は「に」でもいい。

## ⑤[人]に Nを Vt

## ⑥[人]から Nを Vt

あなた	に	これを	あげる
あなた	に	これを	かす
あなた	に	これを	うる
あなた	に	これを	くばる
あなた	に／から	これを	もらう
あなた	に／から	これを	かりる
あなた	から	これを	かう
あなた	から	これを	うけとる

「[人]に／から」は相手である間接対象を表す。やりもらい関係の動詞である。ある動詞は「に」でも「から」でもよい。

## ⑦[人]に [人]を Vt

知人に	娘を	紹介する
-----	----	------

直接対象も間接対象も「人」の場合である。

## (4) 引用

引用関係の文型をまとめる。動詞は「思う」と「言う」である。本当に「引用」と言えるのは(ii)と(iii)である。

- ①「思う」
- (i) Nを 思う
  - (ii) [文]と 思う
  - (iii) Nを Nだと 思う  
Aと 思う  
ANだと 思う
  - (iv) Nを Nと 思う  
Aく 思う  
ANに 思う
- 「AN」はナ形容詞を表す。

(i) 秋を 思う わが子を 思う
(ii) あしたは雨が降ると 思う
(iii) それを うそだと 思う これを うれしいと 思う これを 親切だと 思う
(iv) それを うそと 思う これを うれしく 思う これを 親切に 思う

(i)「Nを思う」にはNが物・事の場合と、人の場合がある。意味があいまいで、「想像する、心配する、追想する」のような意味がある。さらに人の場合は、「恋いしたう」という意味も付け加わる。

(ii)「あしたは雨が降る」は文の体裁を整えており、それ全体が「思う」の対象となる。

(iii)思考の対象が「Nを」として分離し、思考の内容が「うそだ」「うれしい」「親切だ」となったものである。これらは文ではないが、述語の形を保持してい

る。

(iv) 思考の内容「うそと」「うれしく」「親切に」は述語の形をしていない。

- ②「言う」
- (i) Nを 言う
  - (ii) [文]と 言う
  - (iii) Nを Nだと 言う  
Aと 言う  
ANだと 言う
  - (iv) Nを Nと 言う  
Aく 言う  
ANに 言う

(i)	相手に	冗談を	言う
(ii)	相手に	これはいいと	言う
(iii)	相手に	これを	動詞だと 言う
	相手に	これを	いいと 言う
	相手に	これを	きれいだと 言う
(iv)		これを	動詞と 言う
	相手に	これを	よく 言う
	相手に	これを	きれいに 言う

「思う」と「言う」の文型を平行的に考えたいが、いろいろな違いが現れてくる。全体的に「言う」の文型は、相手を表す「に」で広げることができる。上には広げた文をあげた。ただし、命名を表す意味になる場合は、相手を表すことばは付かない。

(iii)と(iv)とは全然意味が違ってくる。

## 16 自動詞と他動詞

自動詞と他動詞の区別は学習者にとって難しいものである。形の上の対応の規則が一応はあるが、規則が多すぎて、結局一つ一つ覚えなければならない。

意味上の対応は次のようになるのが基本である。

**他動詞は、人が主語で物を対象とし、この物に働きかける動作を表す。**

**自動詞は、物が主語で、この物の自発的な動きを表す。**

つまり、

「ーが Vi」 Vi=Intransitive Verb (自動詞)

「ーを Vt」 Vt=Transitive Verb (他動詞)

としたとき、[-]のところには同じ[物]が来る。例えば、

窓が 開く。

窓を 開ける。

ところが、このような対応を示さないものもある。

試験に 受かる。          お金を 預かる。

試験を 受ける。          お金を 預ける。

「対象を示す『を』をとる動詞を他動詞という」という定義では、「預かる」も「預ける」も他動詞になってしまう。しかも、我々の意識では「開く、開ける」と同様の対をなす動詞という感じがする。これらを仲間はずれにすることはない。そこで、ここで問題にする動詞は、

**語根の一部を共有する対になっている動詞**

と定義しなおさなければならなくなる。こうした動詞を挙げる。

左側が自動詞、右側が他動詞である。

## (1) ARU-U

husagARU-husagU

ふさがる	ふさぐ
からまる	からむ
くるまる	くるむ
つかまる	つかむ
またがる	またぐ

## (2) ARU-ERU

agARU-agERU

上がる	上げる
かかる	かける
下がる	下げる
閉まる	閉める
始まる	始める
終わる	終える
変わる	変える
集まる	集める
止まる	止める
当たる	当てる
植わる	植える
薄まる	薄める
埋まる	埋める
おさまる	おさめる
かぶさる	かぶせる
重なる	重ねる
固まる	固める
決まる	決める
染まる	染める

そなわる	そなえる
すわる	すえる
高まる	高める
たまる	ためる
伝わる	伝える
まざる	まぜる
丸まる	丸める
もうかる	もうける
休まる	休める
弱まる	弱める
受かる	受ける
加わる	加える
助かる	助ける
曲がる	曲げる
見つかる	見つける
あずかる	あずける

## (3) U-ERU

akU-akERU

開く	開ける
付く	付ける
育つ	育てる
立つ	立てる
並ぶ	並べる
進む	進める
いたむ	いためる
かたむく	かたむける
落ち着く	落ち着ける
そろう	そろえる

縮む	縮める
届く	届ける
ゆるむ	ゆるめる
やむ	やめる
近付く	近付ける
続く	続ける
浮かぶ	浮かべる

もれる	もらす
燃える	燃やす
遅れる	遅らす
肥える	肥やす
慣れる	慣らす
逃げる	逃がす
ぬれる	ぬらす

## (4) ERU-U

torERU-torU

取れる	取る
切れる	切る
焼ける	焼く
破れる	破る
割れる	割る
折れる	折る

## (5) ERU-ASU

dERU-dASU

出る	出す
生える	生やす
増える	増やす
負ける	負かす
さめる	さます
荒れる	荒らす
枯れる	枯らす
こげる	こがす
絶える	絶やす
冷える	冷やす

## (6) RERU-SU

taoRERU-taoSU

倒れる	倒す
壊れる	壊す
くずれる	くずす
けがれる	けがす
よごれる	よごす
こぼれる	こぼす
流れる	流す
あらわれる	あらわす
かくれる	かくす
離れる	離す
外れる	外す

## (7) U-ASU

herU-herASU

減る	減らす
動く	動かす
かわく	かわかす
もる	もらす

## (8) IRU-ASU

nobIRU-nobASU

のびる      のぼす  
 みちる      みたす  
 生きる      生かす  
 懲りる      懲らす

くだる      くだす

通る      通す  
 なおる      なおす  
 回る      回す  
 渡る      渡す

## (9) IRU-OSU

okIRU-okOSU

起きる      起こす  
 落ちる      落とす  
 降りる      降ろす  
 滅びる      滅ぼす

## (11) RU-SERU

miRU-miSERU

見る      見せる  
 着る      着せる  
 浴びる      浴びせる  
 似る      似せる  
 乗る      乗せる

## (10) RU-SU

nokoRU-nokoSU

残る      残す  
 うつる      うつす  
 起こる      起こす  
 かえる      かえす

## (12) その他

見える      見る  
 消える      消す  
 聞こえる      聞く  
 生まれる      生む  
 入る      入れる

## 「着る 着せる」「浴びる 浴びせる」について

「～を」をとる動詞を他動詞とする定義によると、これらは共に他動詞ということになるが、次のような意味の違いがあるところから、これらも“自他の対”と認めてよいと思う。

着る	着物を着る	着物を自分に着せる
着せる	他人に着物を着せる	着物を他人に着せる
浴びる	水を浴びる	水を自分にかける
浴びせる	他人に水を浴びせる	水を他人にかける

また、「見る」は「見える 見る 見せる」という三つの段階をもつ特殊な動詞であり、「見える 見る」「見る 見せる」のように「自他」の対が二つ認められる。



## 17 複合動詞

新宿で地下鉄に乗りかえて、銀座へ行きます。  
宇宙研究所は新しいロケットを打ちあげました。

日本語には、二つの動詞が結び付いて、一つの動詞となったものが多い。例えば、「乗りかえる」は「乗る」という動詞と「かえる」という動詞とが結び付いたものである。これを複合動詞と言う。その場合、前の動詞は「乗り」というように連用形になる。

複合動詞は、語彙論とも関連するが、後項の動詞が利用度の高い(生産的な)ものだと、文法の問題として取り上げることになる。

主な複合動詞はおおよそ次のように分類することができる。

- ①アスペクトを表すもの
- ②方向を表すもの
- ③動作のやり方を表すもの
- ④対象関係を変えるもの
- ⑤強意を表すもの
- ⑥動作とその結果を表すもの

### (1) アスペクトを表す複合動詞

動作の開始、継続、終了を表すものの三つに分ける。「23 アスペクトについて」を参照。

- ①動作の開始を表すもの

	語 例	文 例
～はじめる	降りをはじめ	雨が降りはじめた。
～だす	降りだす 笑いだす	突然雨が降りだした。 それを聞いて、思わず笑いだしてしまっ
～かける	読みかける やりかける	読みかけた本をどこかに忘れて来た。 やりかけたことは最後までやりたい。

## ②動作の継続を表すもの

～つづける	歩きつづける	一日中歩きつづけて疲れてしまった。
～つづく	降りつづく 鳴りつづく	このところ雨が降りつづいている。 雷が鳴りつづいた。
～とおす	やりとおす	その仕事を終わりまでやりとおした。

「～つづく」は上の二語に限られるようだ。

## ③動作の終了を表すもの

～ぬく	生きぬく	せちがらいこの世を生きぬいてきた。
～きる	出しきる 数えきる	百メートル走って、力を出しきった。 数えきれないほどたくさんの星。
～あげる	書きあげる	彼は作文を書きあげた。
～あがる	できあがる	やっと料理ができあがった。
～おえる	話しおえる	講演者はやっと話しおえた。

## ② 方向を表す複合動詞

### ①上方向への動作

～あげる	打ちあげる	新しいロケットを打ちあげた。
	抱きあげる	赤ん坊を抱きあげる。
～あがる	飛びあがる	飛行機が飛びあがった。
	舞いあがる	鳥が舞いあがった。

## ②下方向への動作

～おろす	積みおろす	トラックから荷物を積みおろす。
～おりる	舞いおりる	鳥が舞いおりてきた。
～おとす	打ちおとす	鉄砲で鳥を打ちおとした。
～おちる	流れおちる	川の水が滝から流れおちている。

## ③外方向への動作

～だす	流れだす	洪水で川から水が流れだした。
	考えだす	これは私が考えだした計画です。
～でる	流れでる	湖から水が流れでて川になる。
	あふれでる	目から涙があふれでた。

## ④内方向への動作

～こめる	閉じこめる	犯人を倉庫に閉じこめた。
～こむ	さしこむ	この部屋には暖かい日がさしこむ。
	のぞきこむ	私の手もとをのぞきこんだ。
	書きこむ	書類に必要事項を書きこむ。
～いれる	取りいれる	外国からすぐれた制度を取りいれる。
	受けいれる	留学生を受けいれる。

### (3) 動作のやり方

「もう一度書く」ことを「書きなおす」、「慣れてしまうほど何回も見ると」ことを「見なれる」というように、単に「書く、見る」という動作でなく、その動作のやり方、状況を規定するものである。

～なおす	書きなおす	レポートを何回も書きなおした。
～なれる	考えなおす	もう一度考えなおしてください。
	見なれる	見なれた風景も少しずつ変わる。
	はきなれる	ハイキングにははきなれた靴がいい。
～あさる	読みあさる	夏休みには推理小説をよみあさった。
～かえる	乗りかえる	JALからKLMに乗りかえる。

### (4) 対象関係を変える複合動詞

単に「話す」と言えば「何を」が関心事である。それが、「話しあう」と言えば「誰と」、「話しかける」と言えば「誰に」が関心事となる。

このように、主要な補語の格を変えることを「対象関係を変える」と言う。

[人]と	[こと]を	話す
[人]に	[こと]を	話す
<hr/>		
[人]と	[こと]を	話しあう
<hr/>		
[人]に	[こと]を	話しかける

「巻く」と「巻きつける」の補語の格の関係を見てみよう。

「巻く」では①「包帯を 巻く」、②「足を 巻く」の二つの言い方があるが、「巻きつける」では「足に 包帯を 巻きつける」(あるいはこの順を逆にした「包帯を 足に ～」)の言い方しかない。

「～を」を直接対象(直接目的)、「～に」を間接対象(間接目的)として、この関係を示せば次図の通り。

材料	直接対象	間接対象	動詞
(～で)	(～を)	(～に)	
	包帯	足	巻く、巻きつける ①
包帯	足		巻く ②

「巻きつける」では、直接対象、間接対象に補語が割り当てられている。「巻く」では、二通りの補語の割り当て方があり、その一つ(①)は「巻きつける」の場合と同じであるが、もう一つ(②)は直接対象と「材料」に補語が割り当てられている。

～あわせる	はりあわせる	紙をはりあわせて厚くする。
～あう	話しあう	目下の問題について話しあった。
	助けあう	助けあわなければならない。
	認めあう	彼らはお互いの実力を認めあっている。
～かける	話しかける	女の子はお母さんに話しかけていた。
～つける	張りつける	ポスターを張りつけた。
	結びつける	二人を結びつけたのはお互いの趣味だ。
	巻きつける	さおに糸を巻きつける。
～つく	張りつく	紙が張りつく。
	結びつく	提携によって強く結びつく。
	巻きつく	さおに糸が巻きつく。

## (5) 強意を表す複合動詞

ある動作を強度に行うことを表すものである。例えば、「考える」に対して

「考えこむ」は「深く考える」という意味になる。この場合、文法的には無意志動詞になる。ただし、強意を表す複合動詞がすべてそうなるわけではない。

～こむ	考えこむ	考えこんでいる。
	思いこむ	思いこんでしまった。
～すぎる	食べすぎる	ご飯を食べすぎる。
～まわす	見まわす	あたりを見まわした。
～まわる	歩きまわる	一日中歩きまわって疲れた。
～つける	痛めつける	痛めつけてやろう。

## (6) 動作とその結果を表す複合動詞

ある動作とその結果を表す動詞とを連ねたものである。

～とる	学びとる	学問の仕方を学びとる。
	感じとる	真意を感じとった。
	読みとる	行間から読みとった。
	聞きとる	外国語を聞きとることは難しい。
～ころす	打ちころす	打ちころされた。
	なぐりころす	なぐりころされた。
	さしころす	さしころされた。
～たおす	打ちたおす	敵を打ちたおす。
	なぐりたおす	犯人をなぐりたおした。

ある複合動詞の後項成分は二つの機能を有する。つまり、同じ後項成分が(1)～(6)の分類の二か所に出てくる。この場合、意味の見分け方が問題となる。例えば、「流れ出す」と言った場合、「流れ始める」と同様に(1)アスペクトの意味なのか、「流れ落ちる」と同様に、単に(2)方向を表すだけなのか。

流れ出す	流れ始める	アスペクト
流れ出す	流れ落ちる	方向

こういった点で問題になりそうなのは、およそ次の場合である。

～だす	アスペクト	方向
～あげる	アスペクト	方向
～あがる	アスペクト	方向
～かける	アスペクト	対象関係
～かかる	アスペクト	対象関係
～つける	対象関係	強意
～こむ	方向	強意

## 18 往來の目的

私は日本へコンピュータの勉強に来ました。  
図書館へ本を借りに行きます。

### (1) 往來の目的

述語動詞が「行く、来る、帰る、出る、入る、もどる」など移動を示すものであるときに限って、その「往來」の目的を表す言い方がある。それには、動詞の連用形に「に」をつける。連用形はマスの形から「ます」をとったものである。

私は図書室へ本を読みに行きます。  
友だちが私のところへお金を借りに来ました。  
花子は自分の部屋へテレビを見にもどりました。  
太郎は家へお金をとりに帰りました。

動作の行われる場所は **この部屋でテレビを見ます** のように「で」で示されるが、次のように言うのはおかしい。

\* この部屋でテレビを見に来ました。

往來の目的の言い方では「[場所]へ」としなければならない。

この部屋へテレビを見に来ました。

### (2) 動作名詞＋「に」

以上は、動詞の連用形に「に」がつく場合だったが、「に」は動作名詞にもつく。



食堂へ食事に行きます。

デパートへ買い物に行きます。

スポーツ・センターへ卓球の練習に行きます。

「食事、買い物、練習」は「勉強」と同じく「～する」と言える動作名詞である。

### (3) 「勉強をする」「勉強する」と往来の目的の文

私は 勉強を します。

私は 勉強 します。

この限りではどちらも正しい。しかし、「コンピュータの」を付け加えると、

私は コンピュータの 勉強を します。

\*私は コンピュータの 勉強 します。

となる。つまり、「勉強する」は一語の動詞で、対象は「コンピュータを」となる。

私は コンピュータを 勉強します。

これを「\*私は コンピュータを 勉強を します。」のように言う間違いがかなり多い。

さて、

コンピュータの勉強をする。

コンピュータを勉強する。

この文を往來の目的の文の中に入れると、次のようになる。

私は コンピュータの 勉強を しに 来ました。

私は コンピュータを 勉強しに 来ました。

さらに「勉強」は動作名詞だから、

私は コンピュータの 勉強に 来ました。

となる。これを

私は コンピュータを 勉強に 来ました。

ということもあるが、まぎらわしいので初級では提示しないほうがよい。

#### (4) 「～のところ」

私は 友だちのところへ 遊びに行きました。

私は 窓のところへ 行きました。

私は 窓のところで 本を読みました。

「～へ行く」という場合の「～へ」は、場所を表す名詞(場所名詞)でなければならない。非場所名詞を場所名詞にするには、ふつう「のところ」をつける。

「教室、玄関、事務所、体育館、病院、会社」などや「東京、ローマ」などの地名は場所名詞である。

場所化のために「のそば」「のまえ」「のほう」などが用いられることもある。ただし、その場合は、意味が場所化すると同時に、それぞれの意味が加わる。「のところ」は、無色のまま場所化だけが行われるのである。

花子が私のほうへ来ました。  
次郎は机のそばで遊んでいます。

動作の行われる場所を示す「で」の前の名詞も、当然場所名詞でなければならない。そうでないと、「で」は手段・方法の意味か、無意味になる。

黒板のところで遊びました。(場所)  
黒板で遊びました。(「黒板で」は手段の意味に解される。)

場所名詞にさらに「のところ」がつくと、その場所そのものでなく、「その付近」の意味になる。

事務所へ行きました。  
事務所のところへ行きました。(事務所の付近)

## 19 動詞のテの形

私は朝起きて、ご飯を食べて、学校へ行く。  
コンピュータを使って、複雑な計算をする。

### (1) テの形の作り方

日本語教育では、テの形の作り方が初歩の段階での、いわばハイライトである。

	語 尾	例
五 段 動 詞	う、つ、る→って	会う→会って、打つ→打って
	取る→取って	
	む、ぶ、ぬ→んで	飲む→飲んで、飛ぶ→飛んで
	死ぬ→死んで	
	く→いて	書く→書いて、咲く→咲いて
	[例外]	行く→行って
	ぐ→いで	泳ぐ→泳いで、かぐ→かいで
	話す→して	話す→話して、写す→写して
一 段 動 詞	る→て	見る→見て、教える→教えて
不規則動詞		来る→来て、する→して

## ② テの形の用法

順次動作、並行動作、手段・方法、原因・理由などを表す

「～てください」の形で依頼を表す。

「～ている、～てある」などの形でアспектを表す。

「～てもいい、～てはいけない」などの形で許可、禁止などを表す。

「～てあげる、～てくれる」などの形で恩恵の授受を表す。

## 20 テの形の意味

順次動作	～してから、～する
並行動作	～した状態で、～する
手段・方法	～することによって、～する
原因・理由	～ので／から～

テの形の意味をいくつかに分類する試みが今までいろいろなされてきた。しかし、テの形自身の意味は、動作をつなぐことだけである。それが、前後の動詞の性質によっていろいろに解釈されるのである。

そうかと言って、“意味は一つだけだから、細かく分ける必要はない”とは言えない。後にも見るように、テの形の用法については、学習者の誤用がかなりあり、なぜ誤用なのかを説明してやらないと、学習者はなかなか納得しないからである。

以下、基本的な意味から、その他の意味を順に説明していくつもりであるが、軽々しく一般化はできない。すぐ反例が見つかるからである。そして、反例の言い訳、つまり例外になる理由を一々説明していたら、いつまでも説明が終わらないと思われるからだ。

日本語文法のこの部分、テの形の意味の解釈では、言語外の一般常識が作用していることがかなり多いように思われる。もっとも、すべての言語現象について、それは言えるかもしれないが、そう言い切ってしまうては、元も子なくなる。特に、日本人の常識、日本語の話し手の常識と違う考えを持つ学習者には、そういったことの説明が必要である。

### (1) 順次動作——「～してから、～する」

私は6時半に起きて、7時に朝ご飯を食べます。

テの形の基本的な意味は、順次動作である。これは、ある動作があつて、次に別の動作に移ることを表すものである。

三つ以上の動作をつなぐことも可能である。

私は6時半に起きて、7時に朝ご飯を食べて、7時半に学校へ出かけます。

「～する、次に～する」という意味である。多くの場合、「～してから、～する」と言い替えられる。

## (2) 並行動作——「～した状態で～する」

電車に乗って本を読む。(電車に乗った状態で)  
かばんを肩にかけて歩く。(肩にかけた状態で)  
いすにこしかけて新聞を読む。(こしかけた状態で)

テの形の意味の二番目に、「～した状態で～する」という意味になる場合がある。

上の文を説明するのに、「電車に乗る」という動作があつて、次に「本を読む」という動作がある、と言えば、ここまでは(1)の説明と同じになる。

しかし、本を読むとき、まだ電車に乗っているわけで、降りていてわけではない。「乗る—降りる」という動作の途中で他の動作をすることを表しているのである。それで、並行動作と言われる。

並行動作は一般に、「～ながら」で表される。

テレビを見ながらご飯を食べる。

しかし、「電車に乗りながら本を読む」と言うのはおかしい。つまり、並行動作を表すのに「～ながら」が適当な場合、「～て」が適当な場合があるのである。

テレビを見ながらご飯を食べる。 ? テレビを見てご飯を食べる。  
 電車に乗って本を読む。 \* 電車に乗りながら本を読む。

これを、「継続動詞」の場合、「結果動詞」の場合と単純には分けられないから難しい。「見る」は継続動詞であるが、

かがみを見ながらひげをそる。 かがみを見てひげをそる。

ともに言える。

上の「テレビを見てご飯を食べる」は、意味があいまいである。これを「テレビを見てからご飯を食べる」とすると順次動作の意味がはっきりする。これを「テレビを見ながらご飯を食べる」とすると並行動作の意味がはっきりする。

テレビを見てからご飯を食べる。  
 順次動作  
 ? テレビを見てご飯を食べる。  
 テレビを見ながらご飯を食べる。  
 並行動作

さて、「電車」の例で「～てから」とすると順次動作の意味になるかということ、そうでもない。

この場合は

電車に乗ってから本を読む。

と言っても同じことである。つまり、これも電車の中で本を読むことと解釈される。

ところが、遊園池に遊びに来た親子づれが、

ジェットコースターに乗ってからお弁当を食べよう。

と言ったとすれば、スケジュールとして、「ジェットコースターに乗って、降りて、それから」の意味に解釈される。つまり、ここでは、「乗って」は「乗って、降りて」の意味に解釈されているのである。これは、常識でジェットコースターの上では落ち着いてお弁当が食べられない状態であることを知ってい



るから解釈できることであろう。

ジェットコースターに乗ってお弁当を食べる。

と「から」なしでも、常識解釈が文法解釈より優先されるようだ。

このように、常識で判断している例が実はかなり多くて、文法説明を複雑にしているのである。次の例はどう解釈されるであろうか。

お風呂に入って、ビールを飲む。(出てから)

cf. 温泉につかりながら、日本酒を飲む。(出ないで)

お風呂に入って、ラジオを聞く。(出てから；？お風呂で)

お風呂に入って、新聞を読む。(出てから)

(注：「ぬれない紙」ができれば「お風呂で」も可)

お風呂に入って、ひげをそる。(お風呂で)

トイレに入って、新聞を読む。(トイレで)

トイレに入って、ご飯を食べる。(出てから)

トイレに入って、着替える。(出てから；トイレで)

これを言い分けていう言語があるかどうか。イタリア語では、「そこで」に当たる小辞(短いことば)を入れて、これを言い分けることができる場合があるそうである。

### ③ 手段・方法——「～することによって、～する」

コンピュータを使って、複雑な計算をする。(＝コンピュータで)  
手紙を書いて、知らせる。(＝手紙で)

テの形の意味の三番目に、「～することによって、～する」という手段・方法の意味になる場合がある。多くの場合、単に「[名詞]で」と置き換えることができる。

コンピュータを使って、複雑な計算をする。(＝コンピュータで)

手紙を書いて、知らせる。(＝手紙で)

自転車に乗って、本屋に行く。(＝自転車で)

アルバイトをして、お金をためる。(＝アルバイトで)

しょうゆを入れて、味をつける。(＝しょうゆで)

また、前件と後件を入れ換えるとすると、「目的の表現」でつながることになる。

複雑な計算をするために、コンピュータを使う。

知らせるために、手紙を書く。

本屋へ行くために、自転車に乗る。

お金をためるために、アルバイトをする。

味をつけるために、しょうゆを入れる。

ところで、

自転車に乗って、本屋に行く。

という例は、(2)で述べた、

電車に乗って本を読む。

という例に似ている。そこで、(2)と(3)の違いを考えてみよう。これは、本を読むために、電車に乗る。

という意味かどうかということが、(2)か(3)かの分かれ道になる。

いろいろな例に当たり、突き詰めて考えると、(1)、(2)、(3)とも区別があいまいになってしまう。そこで、最初に帰る。細かく分ける必要はないのではないかと。しかし、学習者のために、典型的な例を挙げて、できる範囲で分けてみたい。

#### (4) 原因・理由——「～ので／から、～」

人命を救って、表彰された。

その話を聞いて、なんとかしなくてはと思った。

テの形の意味の四番目に、「～ので／から、～」という原因・理由の意味になる場合がある。

(1)、(2)、(3)では、前件も後件も意志表現であったが、原因・理由の文では

後件が無意志表現であるという点で、前の三つとはかなり異なったものだと言える。また、前件と後件とを逆にしたとき、目的の表現でつなぐことができない点でも(3)と異なる。

\* 表彰されるために、人命を救った。

\* なんとかしなくてはと思うために、その話を聞いた。

しかし、(1)の「 $V_1$ の動作があり、次に $V_2$ の動作があること」という説明は、この例の場合にも当てはまる。

### ◎なぜマニュアルはわかりにくいのか

日常の言語生活では、ある言語形式にいくつかの意味があっても、常識で判断して区別している。ところが、マニュアルはわからないから読むのである。意味の解釈に「常識」は役に立たないだけでなく、むしろ役に立ててはいけないのである。

書く方は、まず、このことをよく承知しておくべきである。そして、日本語文法に精通して、ある形に二つ以上の意味がある場合をよく心得ておき、意味の区別をつけるために、書き方に工夫をこらすべきである。

テの形には、上に見たようにいろいろの意味があるが、誤解されやすい場合は、テの形は使わないことである。

例えば、

「cls と打ち込んで、RET キーを押す。」

なら順次動作の意味だが、

「cls と打ち込んで、画面を消す。」

では、方法の意味になる。

もし、読む方が順次動作の意味ととると、cls と打ち込んだあと、画面を消すのにどうすればいいのかな、と迷うことになる。これを、「そんなこと常識でわかるだろう」と思ってはならない。

順次動作であることを明示するには「～てから」とする。

「cls と打ち込んでから、RET キーを押す。」

「ESC キーを押してから、Tを押す。」

方法であることを明示するには、名詞だけで表す、などとすればいいだろう。

「cls で画面を消す。」

「ESC でメニュー画面を出す。」

### ◎どう説明すればいいのか

漢字入力モードに入るには、

「CTRL キーを押して、XFER キーを押します。」

と説明すると、初心者は、CTRL キーを押して、離して、次に XFER キーを押す。

これではうまくいかない。そこで、説明を変えてみる。

「CTRL キーを押しながら、XFER キーを押します。」

すると、今度は CTRL キーと XFER キーを同時に押す。

これでは、タイミングがちょっとずれると（XFER の方が先に押されると）思わぬ結果になる。

「CTRL キーと XFER キーを同時に押します。」

と言ってみても同じことだ。

漢字入力モードに入るキー操作を、的確に表現する日本語はないものか。

「～て」も「～ながら」も使えないのだろうか。

# 21 連体修飾

連体修飾語(句)＋名詞の形を連体修飾構造と言い、この場合の名詞を底と言う。

太郎が喫茶店で女友だちとコーヒーを飲んだ。	
(a)          喫茶店で女友だちとコーヒーを飲んだ	太郎
(b)太郎が          女友だちとコーヒーを飲んだ	喫茶店
(c)太郎が喫茶店で          コーヒーを飲んだ	女友だち
(d)太郎が喫茶店で女友だちと          飲んだ	コーヒー

## (1) 内の関係の連体修飾

「太郎が喫茶店で女友だちとコーヒーを飲んだ。」という文があるとする。その各補語を底にして連体修飾構造にしたのが(a)～(d)である。これを見ると、図の空白のところにあったことばが右辺へ飛んで底になっている。これを“内の関係の連体修飾”と言う。

連体修飾の底になると、元々あった格助詞が落ちる。例えば、

- (a)「太郎が」の          「が」が落ちている。 [主格の連体修飾]
- (b)「喫茶店で」の          「で」が落ちている。 [場所格の連体修飾]
- (c)「女友だちと」の          「と」が落ちている。 [共同格の連体修飾]
- (d)「コーヒーを」の          「を」が落ちている。 [対格の連体修飾]

連体修飾句(a)～(d)の中では、(a)と(d)はわかりやすいが、(c)はわかりにくいだろう。(b)はその中間である。つまり、主格と対格の連体修飾はわかりやすいが、場所格はその次で、共同格になるとわかりにくくなる。

連体修飾句は、句であるから、次のように他の文の一部になるのである。

私は	喫茶店で	女友だちとコーヒーを飲んだ	太郎	を知っている。
	太郎が	女友だちとコーヒーを飲んだ	喫茶店	は新宿にある。
	太郎が 喫茶店で	コーヒーを飲んだ	女友だち	は花子の親友だ。
	太郎が 喫茶店で	女友だちと	飲んだ コーヒー	はおいしかった。

② 外の関係の連体修飾

次の例では、「太郎が喫茶店で女友だちとコーヒーを飲んだ。」という部分に空白が生ぜず、元の文の補語になかった要素が底になっている。これを“外の関係の連体修飾”と言う。

私は	太郎が喫茶店で女友だちとコーヒーを飲んだ	こと	を知っている。
	太郎が喫茶店で女友だちとコーヒーを飲んだ	帰り	に花子に会った。
	太郎が喫茶店で女友だちとコーヒーを飲んだ	といううわさ	が広まった。

外の関係では「という」がつくつかつかないかという問題がある。

内の関係の連体修飾では、関係代名詞、関係副詞によって機械的に翻訳できるが、外の関係の連体修飾では、機械的な翻訳が難しい。それが、内と外の連体修飾構造が問題になる大きな理由の一つである。

③ 外の関係と紛らわしい場合

では、

私は、太郎が喫茶店で女友だちとコーヒーを飲んでいて時間に、家でテレビを見ていた。

という文で、

太郎が喫茶店で女友だちとコーヒーを飲んでいて 時間

という部分は、内の関係だろうか、外の関係だろうか。

これは、

太郎が喫茶店でその時間に女友だちとコーヒーを飲んでいた。

→太郎が喫茶店で 女友だちとコーヒーを飲んでいた 時間  
と考えられるので、やはり内の関係である。

#### (4) 相対関係を表す名詞が底になっている場合

次の例も内の関係であるが、典型的な内の関係とはちょっと違う。

塔が立っている右側に切符売り場がある。

「塔が立っている右側」は、「塔は右側に立っている」からできた連体修飾だろうか。そうではない。「塔が立っている場所の右側」の意味である。

私たちは、塔が立っている場所で写真を写した。

と比べてみると、よくわかるだろう。この「塔が立っている場所」は、「塔はその場所に立っている」からできたふつうの連体修飾である。

相対関係の名詞の連体修飾	通常の連体修飾
<p>塔が<del>右側に立っている</del></p> <p>塔が            立っている右側</p> <p>  </p> <p>塔が立っている場所の右側</p>	<p>塔がその場所に立っている</p> <p>↓</p> <p>塔が            立っている場所</p>

このように「右」とか「左、上、下、前、後」など相対関係を表すことが底になっている連体修飾では、通常の連体修飾と異なるから、注意が必要である。次の例も同様である。

鈴木君が住んでいる二階に高橋君が住んでいる。  
芽が出たあとに実がなります。

## (5) 「ガノ可変」

連体修飾句の中の主語を表すのは通常「が」なのだが、「の」もそれを表すとして、よくこれが大事な学習項目に挙げられている。しかし、「の」にできない場合が多いし、何よりも、常に「が」を使っていれば“安全”なのだから、そんなに重要な項目とは思われない。ともあれ、「の」でも「が」でも可能なことを「ガノ可変」と言いならわしており、有名な文法現象となっている。

太郎が飲んだコーヒー = 太郎の飲んだコーヒー

塔が立っている右側 = 塔の立っている右側

太郎が喫茶店で女友だちと飲んだコーヒー

≠ 太郎の喫茶店で女友だちと飲んだコーヒー

( cf. 誰かが太郎の喫茶店で女友だちと飲んだコーヒー )



## 22 「～たり ～たり する」—動作の列挙

日曜日にどんなことをしますか。

日曜日には本を読んだり、テレビを見たり、買い物をしたりします。

### (1) タリの形

タリの形は、過去形「～た」に「り」をつけることによって得られる。

	基本形	過去形	タリの形
五段動詞	読む	読んだ	読んだり
同 否定形		読まなかった	読まなかったり
一段動詞	食べる	食べた	食べたり
同 否定形		食べなかった	食べなかったり
不規則動詞	来る	来た	来たり
〃	する	した	したり
イ形容詞	強い	強かった	強かったり
同 否定形		強くなかった	強くなかったり
ナ形容詞	静かな	静かだった	静かだったり
名詞+「だ」	男だ	男だった	男だったり

### (2) タリの形の意味——動作の列挙

タリの形の意味は、基本的には、「本を読んだり、テレビを見たりする」のように動作を列挙することである。ふつう、

～たり ～たり する

という形で用いる。

さらに、「～たり」が、

～たり ～たり ～たり する

のように三つ(以上)のこともあり、逆に、

～たり する

のように一つだけのこともある。この場合は、他の動作を暗示させるわけである。

タリ の数	備 考	例
一つ	他の動作を暗示	本を読んだりします。
二つ	[基本形]	本を読んだり、テレビを見たりします。
三つ	動作の列挙	本を読んだり、テレビを見たり、 買い物をしたりします。

(3) 対になる動作

タリの形で動作を列挙するとき、その動作は対になるものである場合が多い。

泣いたり、笑ったりする。  
歌ったり、踊ったりする。

また、正反対の動作を列挙することもある。

押したり、引いたりする。  
戸を 開けたり、閉めたりする。  
あかりを つけたり、消したりする。  
立ったり、すわったりする。

したがって、肯定文と否定形をつらねる場合もある。

したり、しなかったりする。  
見たり、見なかったりする。

#### (4) 形容詞、名詞の場合

形容詞、名詞+「だ」のタリの形はあまり使われない。形容詞、名詞の場合は、“動作”の列挙という説明が当てはまらないからである。次の、aはbのように言うのがふつうである。

① a ? 勝つのは 赤組だったり、白組だったり します。

b 赤組が勝ったり、白組が勝ったり します。

② a ? 事故を起こしたのは 列車だったり、船だったり、飛行機だったり しました。

b 列車や 船や 飛行機が 事故を起こしました。

③ a ? 私は 病気だったり、元気だったり しました。

b 私は 病気になったり、元気になったり しました。

つまり、

①動詞をベースにした文にする。

②名詞を「や」でつなぐ。

③「～なる」という形にする。

などの方法で言いかえるのである。

## 23 アスペクトについて

### (1) アスペクトはロシア語の ВИД から

いわゆる日本語の「アスペクト」を理解していただくために、このことばがどこから来たか、どんな現象のことをいうのか、なじみの外国語(英語など)の例で説明してみよう。しばらく外国語の例におつきあい願いたい。

「アスペクト」という概念は、ロシア語をはじめとするスラブ諸語のものである。ロシア語では動詞に「不完了体」と「完了体」の別があり、この区別を ВИД と言う。この ВИД を英訳したものが Aspect で、ここから日本語の「アスペクト」が来たものと思われる。

また、ВИД を直接日本語に訳した場合は「体」と言うが、このことばはロシア語学でしか使われていないようである。

### (2) 本来のアスペクト——その使い分けは発言意図の違いによる

きのう何をしたか、と聞かれて「本を読んだ」とも「本を読んでいた」とも答えることができる。

「本を読んだ」は動作をまるごと差し出しているのに対し、「本を読んでいた」はその動作の過程を心に描きつつ発話している。前者は完了体のアスペクト、後者は不完了体のアスペクトである。

このように、同じ現実に対して、ある時は「本を読んだ」と動作の一つ一つに注目せず、全体を一つの動作としてまるごと差し出して発言することがある。また、あるときは「本を読んでいた」とその動作の内部構成を一つ一つ確認しながら、発言することもある。このことをアスペクトの使い分けと言う。

アスペクトの使い分けは、事実の違いに対応しているのではない。発話者がそのときどういう意図で発言したいかによって異なるアスペクト形式が選ばれるのである。この区別が本来の意味のアスペクトである。

不完了体	過去	「本を読んでいた」	その動作の過程を心に描き つつ発話している。
完了体	過去	「本を読んだ」	動作をまるごと差し出して いる。

### ③ アスペクトとテンスの混同

スラブ諸語以外のヨーロッパの言語、例えば英語、ドイツ語、イタリア語では、アスペクトに当たることばはあまり使われていない。それは次のように、アスペクトの区別がテンス (tense = 動詞の時制) の組織の中に組み込まれているからである。

英語では「読んでいた」は Past Progressive : he was reading になり、「読んだ」は Past : he read になる。

イタリア語では「読んでいた」は Imperfetto : leggeva になり、「読んだ」は Passato Remoto : lesse になる。

イタリア語では Imperfetto (「半過去」と訳されている) も Passato Remoto (「遠過去」と訳されている) もテンスの一員として同列に並べられている。つまり、アスペクトとテンスとが混同されているのである。

イタリア語に英語のような進行形はないかという、これはあることはあるがあまり使われないという。sta leggendo という形である。

英語とイタリア語の例を個々に見てもわかりにくいから、次にそれぞれのテンスの組織を対照的に示してみよう。(次ページ)

英語の過去形に対するものが、イタリア語には二つある。これはテンスに入れられているが、実はアスペクトの区別なのである。

英語には have + 過去分詞という完了形がある。これに対するものはイタリア語にもある。イタリア語には、過去形が二つあるように、過去完了形に当たるものも二つある。Trapassato Prossimo と Trapassato Remoto である。

英語		イタリア語	
Present	he reads	Presente (現在)	legge
Past	he read	Passato Remoto(遠過去) Imperfetto(半過去)	lesse leggeva
Present Progressive	he is reading		sta leggendo
Past Progressive	he was reading		stava leggendo
Present Perfect	he has read	Passato Prossimo(近過去)	ha letto
Past Perfect	he had read	Trapassato Prossimo(大過去) Trapassato Remoto(先立過去)	aveva letto ebbe letto

イタリア語では、遠過去 lesse の代わりに近過去 ha letto がよく使われる。つまり、イタリア語では、英語の現在完了形に当たる ha letto という形が、過去形 read で表現すべきような場合に使われるのである。

中学校の英語では、過去と現在完了の区別をしつこく教えられる。例えば、現在完了は過去を示すことば(例えば「 yesterday 」など)と一緒に使うことはできない、などと。しかし、これは英語だけのことで、イタリア語でもフランス語でもドイツ語でもそんなことはない。過去を示すことばと一緒に使ってもかまわないのだ。上に述べたように、過去形の代わりに現在完了(に当たる)形が使われるのだから、これは当然だ。

一口にヨーロッパの言語と言っても、英、独、仏、伊の中で英語だけが他と違う。ヨーロッパの言語はみな英語に似ていると思うと大間違いである。英語を外国語の代表と考えるのは、間違いであることがわかるであろう。

中学校で英語を学ぶとき、過去は「読んだ」、現在完了は「読んでしまった」と訳し分けることがあるが、これは、日本語のテンスのことを考えると、どちらも「読んだ」でいい。

#### (4) 日本語教育では補助動詞の用法のこと

ともあれ、日本語文法では、特に日本語教育では、アスペクトは補助動詞の用法のこととして、説明される。それで、以下には補助動詞「～ている／てある／ておく／てしまう／てくる／ていく」について述べる。

## 24 補助動詞について

「いる」「ある」「おく」「しまう」「くる」「いく」「みる」は単独で述語として用いられる外に、補助動詞としての用法もある。

本動詞	補助動詞
木の上に鳥が <u>いる</u> 。 机の上に本が <u>ある</u> 。 テーブルの上にお皿を <u>おく</u> 。 冷蔵庫の中にチーズを <u>しまう</u> 。 朝手紙が <u>来た</u> 。 彼女は工場へ <u>行った</u> 。 テレビを <u>見る</u> 。	木の上で鳥が鳴いて <u>いる</u> 。 窓が <u>開けてある</u> 。 窓を <u>開けておく</u> 。 料理を食べて <u>しまった</u> 。 東の空が明るく <u>なってきた</u> 。 しだいに消えて <u>いった</u> 。 調べて <u>みましょう</u> 。

表の左側の欄にあげた例文では、それらは単独の述語として用いられている。これを「本動詞として使われている」という。右側の欄の例文は、それらの動詞が補助動詞として用いられている例である。つまり、これらの文の「いる、ある、おく」などはその前の動詞のテの形と共に用いられていて、ある文法的な意味を表している。そして、本来の意味を失っているか、あるいは本来の意味が弱くなっている。このような使われ方を「補助動詞として使われている」というのである。

本動詞として使われているか、補助動詞として使われているかは、中間段階のものもあって微妙である。



## 25 「～ている」の意味

- [1] 花子は手紙を書いている。
- [2] 花子の部屋の窓が開いている。
- [3] 花子の部屋は南に面している。
- [4] 花子は学生時代に富士山に登っている。
- [5] 花子は毎日ワープロで日記を書いている。

### (1) 問題のありか

「花子は手紙を書いている」では「～ている」は進行の状態を表しているのに、「窓が開いている」では「～ている」は結果の状態を表している。これはなぜか。それは、動詞の性質が違うからであると考えられる。機械翻訳などをするときには、それぞれの動詞に印をつけておけばよい、と当然考えられることである。そこで、「書く」に継続動詞、「開く」に瞬間動詞というラベルがつけられる、と考えてみよう。

### (2) 継続動詞と瞬間動詞

次に問題になるのは、どういう動詞が継続動詞で、どういう動詞が瞬間動詞か、その簡単な見分け方はないか、ということである。これは、

読む → <u>読んでいる</u> → 読んだ	となるのが 継続動詞
開く → 開いた → <u>開いている</u>	となるのが 瞬間動詞

と考えられる。

つまり、「～る」(現在形)で表される事態と「～た」(過去形)で表される事態

との間に「～ている」で表される状態が存在するような場合、そういう動詞は継続動詞である。また、「～る」で表される事態から「～た」で表される事態への変化が瞬間的に行われるような場合、その動詞は瞬間動詞である。この「変化が瞬間的に行われる」というところから、「瞬間動詞」という名称が与えられた。

### (3) 結果動詞

しかし、変化が瞬間的でなくても、「～ている」の形が進行の状態を表さず、結果の状態を表す動詞がある。例えば、「ふとる」である。これは次のようになる。

ふとる→ ふとった→ ふとっている

つまり、「ふとっている」は「ふとった」結果の状態を言うのである。決して「ふとる」過程を言っているのではない。しかし、「ふとる」と「ふとった」の間が瞬間的に行われるというわけでもない。(ふとる過程は、「ふとってくる」とか「ふとっていく」とかと言うだろう。)

これは、動作が瞬間的かどうかをいうことよりも、その動作の結果が後に残るかどうかということを重く見ているわけである。それで、「結果の状態」を表すのは「結果動詞」と呼んだほうが良いということになる。

### (4) 主な継続動詞

読む、書く、話す、聞く、見る、食べる、飲む、働く、遊ぶ、売る、買う、

歌う、おどる、泣く、笑う

歩く、およぐ、走る、流れる

思う、考える、心配する、願う、望む、信ずる、喜ぶ

住む、待つ、休む

(雨が)降る、(火が)燃える

### (5) 主な結果動詞

開く、閉まる、付く、消える、折れる、こわれる、倒れる、並ぶ、取れる、

外れる、残る、曲がる  
 ふとる、やせる、結婚する、死ぬ  
 知る  
 行く、来る、出る、入る、乗る、落ちる  
 立つ、すわる、起きる、寝る  
 着る、はく、かぶる、持つ、かかえる、背負う、かつぐ

## ⑥ 「～ている」の用例

### [1] 進行の状態(継続動詞)

花子は手紙を書いている。  
 太郎は本を読んでいる。／歌を歌っている。／プールでおよいでいる。  
 雨が降っている。／火が燃えている。

### [2] 結果の状態(結果動詞)

花子の部屋の窓が開いている。  
 太郎の部屋の電気がついている。／戸が閉まっている。  
 百合子はやせている。  
 知子はそのことを知っている。  
 いま家にお客が来ている。  
 太郎は立っている。／次郎はすわっている。  
 三郎ははでなシャツを着ている。

### [3] もとからの状態

花子の部屋は南に面している。  
 花子は菊子に似ている。  
 山がそびえている。  
 銅貨は丸い形をしている。

### [4] 経験(動詞の種類に関係ない)

花子は学生時代に富士山に登っている。  
 去年一度小川先生にその話を聞いている。

### [5] くりかえし(動詞の種類に関係ない)

花子は毎日ワープロで日記を書いている。

その地域では今も戦争で日に何人もの人が死んでいる。

## (7) 五つの意味の関係

「～している」の基本的な意味は[1]進行の状態と[2]結果の状態である。これは動詞についている継続動詞、結果動詞というラベルによってそれぞれの意味になる。

[3]もとからの状態は形容詞的である。英語では形容詞で訳す。「似る、そびえる」は動詞にこの意味になるラベルがついているものと考えられる。「～形をしている」は「～形だ」とほぼ同じ意味である。この「形」はかならず修飾される。つまり、「\*銅貨は形をしている」は不可。「銅貨は丸い形をしている」としなければならない。そして、これは「銅貨は丸い」とほとんど同じである。

[4]経験は動詞の種類に関係ない。「学生時代に、去年」のような過去を示すことばが、この意味を表すのに効いている。

[5]くりかえしは動詞の種類に関係ない。結果動詞がこの意味を表す場合ははっきりしているが、継続動詞では[1]進行の状態の意味か[5]くりかえしの意味か区別しがたいことがある。



ございます」と言うのである。したがって、「おきた」は完了を表していると考えられる。

次に、主文のテンスが過去形になった場合を考えてみよう。

3. よるねるとき「おやすみなさい」と言いました。  
未完 過去

4. あさおきたとき「おはようございます」と言いました。  
完了 過去

主文のテンスが過去形になった場合、ある特定の人の過去の特定のときの動作を表す。この場合も、修飾句の述語「ねる、おきた」はそのままの形で、それぞれ未完、完了を表していると考えられる。一般に、日本語では、主文が過去形に変わっても、修飾句のテンスを変える必要はないからである。(例 3、4)

しかし、修飾句のテンスを主文のテンスにしたがって変える場合もある。その場合は次のようになる。

5. よるねたとき「おやすみなさい」と言いました。  
過去 過去

6. あさおきたとき「おはようございます」と言いました。  
過去 過去

4と6とは形が同じであるが、意味が違う。つまり「ねた、おきた」というのを過去の意味にとるということは、過去の特定のときに「ねる、おきる」という動作があったということなのである。

5の「ねた」は過去であって、完了の意味にはとれない。もし、完了の意味だとすると、ねた後で「おやすみなさい」と言った、ということになる。次の例の「ねた」なら、完了の意味である。

7. よるねたときゆめを見ました。  
完了 過去

つまり、ねた後でゆめを見たのである。これは、過去の「ねた」と考えることもできる。

8. よるねたときゆめを見ました。  
過去 過去

4と6とが、形が同じで意味が違うように、7と8も形が同じで意味が違う。ところが、5の「ねた」は過去の意味があるだけで、完了の意味は持ち得ない。それは、1を、

\* よるねたとき「おやすみなさい」と言います。  
完了 現在

と言いかえられないのと同じ理由からである。

【問1】 次は有名な問題である。それぞれの文で、どこでかばんを買うことになるのか、考えてみなさい。

- (1)アメリカへ行くとき、 かばんを買う。  
(2)アメリカへ行ったとき、 かばんを買う。  
(3)アメリカへ行くとき、 かばんを買った。  
(4)アメリカへ行ったとき、 かばんを買った。

【問2】 次の中で、正しい文はどれか。どうしてそうなるか、考えてみなさい。

- |             |        |
|-------------|--------|
| (1)ご飯を食べるとき | はしを使う。 |
| (2)ご飯を食べるとき | 手を洗う。  |
| (3)ご飯を食べるとき | 歯をみがく。 |
| (4)ご飯を食べたとき | はしを使う。 |
| (5)ご飯を食べたとき | 手を洗う。  |
| (6)ご飯を食べたとき | 歯をみがく。 |

## (2) 連体修飾句のアスペクト

その人はめがねをかけています。 →めがねを <u>かけている</u> 人 →めがねを <u>かけた</u> 人	その人は本を読んでいます。 →本を <u>読んでいる</u> 人 ≠本を <u>読んだ</u> 人
---	---

このように連体修飾句の中で「～ている」を「～た」とした場合、同じことを表す場合と、意味が変わってしまう場合とがある。それで、どういう場合に意味が変わってしまうのか、どういう場合に意味が変わらないかが問題となる。

原則として述語のテンスは、連体修飾句の中に入っても、主文と同じ形をひっさげていくものである。だから

その人は本を読んでいる → 本を読んでいる人
------------------------

となるのが普通で、

その人は本を読んでいる → 本を読んだ人
----------------------

としたら、意味が変わるのは当然である。

「読む」のような継続動詞の場合は、「～ているN」と「～たN」とが同じことを表すことにはならない。

「～ているN」と「～たN」とがほぼ同じことを表すのは、結果動詞の場合である。しかし、すべての結果動詞がそうなるわけではない。例えば、

その人はあそこに立っている → あそこに立っている人  
≠ あそこに立った人

「～ているN」と「～たN」とがほぼ同じことを表すので有名なのは、「(めがねを)かける」のほか、「着る、かぶる、はく、(ネクタイを)しめる、(ネクタイを)する、(手袋を)はめる」などの着装動詞の場合である。



あの娘は赤いセーターを着ている。	赤いセーターを着ている娘	赤いセーターを着た娘
あの男はヘルメットをかぶっている。	ヘルメットをかぶっている男	ヘルメットをかぶった男
あの女は細いスラックスをはいている。	細いスラックスをはいている女	細いスラックスをはいた女
部長は蝶ネクタイをしている。	蝶ネクタイをしている部長	蝶ネクタイをした部長

それから、一部の結果動詞。

コーヒーがさめている。 てぬぐいが乾いている。 空が澄んでいる。	さめているコーヒー 乾いているてぬぐい 澄んでいる空	さめたコーヒー 乾いたてぬぐい 澄んだ空
--	----------------------------------	----------------------------

それから、「～ている」の形でもとからの状態を表す動詞。

あの人は変わっている。 あの人は猿に似ている。 この道は曲がっている。 この部屋は南に面している。 この道はどこまでも続いている。	変わっている人 猿に似ている人 曲がっている道 南に面している部屋 どこまでも続いている道	変わった人 猿に似た人 曲がった道 南に面した部屋 南に面する部屋 *どこまでも続いた道 どこまでも続く道
---	---	---

この中には「～たN」の外に「～るN」と言えるものもあり、反対に、「～たN」

と言えなくて「～るN」と言えるものもある。

いずれにしても、「～ているN」と言えるのだから、学習者はこの形を使えば“安全”であるわけで、特に「～たN」「～るN」とも言えますよ、と教える必要はないわけだ。“安全”というのは、学習者が作文などで、間違ったことを書くとき×をもらうのに対して、×をもらわずにすむことを言う。

[ 答 ]

[ 1 ]

- (1)日本で
- (2)アメリカで
- (3)日本で
- (4)日本で；アメリカで

[ 2 ]

- (1)(2)正しい。
- (3)おかしい。[～るとき＝～る前に]
- (4)(5)おかしい。[～たとき＝～た後で]
- (6)正しい。

# 27 「～てある」の意味

「～てある」の使用頻度は少ないが、「書いてある」だけは有用な表現である。

- [ 1 ]黒板に字が書いてある。
- [ 2 ]そのことはもう調べてある。
- [ 3 ]風がよく入るように、窓が開けてある。

## (1) 「～てある」に関する動詞の分類

「～てある」の意味を考える上で、重要な動詞の区別は、いわゆる設置動詞と処置動詞の別である。この区別については「28 『～ておく』の意味」参照。

設置動詞の「てある」の形は (1)結果の状態

処置動詞の「てある」の形は (2)動作が終わったこと

を表すというように、二分したものがそれぞれ別々の意味になればことは簡単であるが、ことばの問題の場合は、なかなかそういうことはない。

つまり、動作のレベルで考えると、設置動詞も一種の処置を表すと考えられるので、設置動詞は(1)を表す場合と(2)を表す場合とがあることになる。処置動詞が(1)を表すことはない。念のため。

以上を表示すれば、次のようになる。網掛けの部分が表し得る意味である。

	結果の状態	動作が終わったこと
設置動詞		
処置動詞		

## (2) 「～てある」の用例

### [1] 対象の結果の状態

この意味を表すのは設置動詞(対象の変化した結果をのこす意味を表す動詞)である。例えば「置く、入れる、しまう、ならべる、書く、開ける」など。

机の上に本が置いてある。  
 冷蔵庫にビールが入れてある。  
 金庫にお金がしまっている。  
 店先に果物がならべてある。  
 黒板に「消してはいけない」と書いてある。  
 窓が開けてある。

ただし、初めの四つの例では、「ある」は本動詞のようである。

机の上に本が <del>置いて</del> ある。	机の上に本が	ある。
冷蔵庫にビールが <del>入れて</del> ある。	冷蔵庫にビールが	ある。
金庫にお金が <del>しまっ</del> てある。	金庫にお金が	ある。
店先に果物が <del>ならべ</del> てある。	店先に果物が	ある。

このように「～て」を取り去ってもほとんど同じことを表している。しかし、下の二つの例で、「お金がしまっている」と言うのは単に「ある」と言うのとは違う。

それは、「しまう」が目的意識を表しているからである。また、「果物がならべてある」も「果物がつんである」という文があることを考えると、単に「果物がある」と言うのとは違うことがはっきりする。つまり、「ならべてある」の「ならべて」はあり方を規定しているわけである。

### [2] 動作が終わったこと

この意味を表すのは主に処置動詞であるが、(1)で述べたように設置動詞も動作そのものは一種の処置と考えられるのでこの意味を表すことがある。

そのことはもう調べてある。／発表してある。／言っている。  
7時までに店を開けてある。

### [3]準備

以上[1][2]はアスペクト的な意味である。これから文脈の助けによって準備の意味になる。

日本に来る前に日本語を習っている。  
よく練習してあるから、大丈夫だ。  
風がよく入るように、窓が開けてある。

### (3) ふたたび「ている」と「である」について

窓が開いている。	自動詞「て」+いる	結果の状態
窓が開けてある。	他動詞「て」+ある	対象の結果の状態 動作主を暗示する

「～である」の形でかならず問題になるのは、「窓が開いている」と「窓が開けてある」の異同如何というものである。簡単に言えば上のようになる。日本語教師になろうという人に問われる古典的な問題である。そこで、すでにいくつかの書物には模範的な解説があると思われるので、ここではなぜこの問題が問われるのかを考えてみよう。

日本語教育では翻訳をしない。なるべくしないようにしている。

日本語教育の練習では、だから学習者の母語を与えて日本語に直させるようなことはしない。なるべくしないようにしている。

しかし、あることを日本語で言わせなければならない。「あること」という

のは「ある概念」のことである。日本語で言わせるべきある概念を与えてやらねばならない。

そういうとき便利なのが日本語である概念を与えてそれをある規則によって変形したものを言わせることである。

一番いい例は肯定文を与えて否定文になおさせることである。例えば、「私は学生です」という文を口頭で与えて「私は学生ではありません」と言わせるのである。これは否定文の練習である。

このように日本語である概念を与えてそれに関連した、ある操作をほどこした文を言わせる、ということが広く行われている。

特によく似た意味の文があると、一方からもう一方の文を作らせることはよく行われる。「窓が開いている」と「窓が開けてある」はそのいい例である。

よく似た文があるところのような練習をさせる一方、その違いは何であるかが、教師の間で問題になる。このようにして、「窓」の問題はつねに教師たちに関心の持たれる問題になった。そして、新米の教師の力を試そうとすると、かならずこの問題が持ち出されるのである。

## 28 「～ておく」の意味

「ておく」は準備を表すと言われている。それはその通りだが、そうなる道筋を理解しておくべきである。

[1] 冷蔵庫にビールをいれておく。

[2] かならず明日までにそのことを調べておきます。

[3] あした店が休みだから、今日のうちにパンを買っておきます。

[4] 一応預かっておこう。

### (1) 本動詞の「おく」と補助動詞の「～ておく」

にもつはタンスの上にのせておきます。……「おきます」は本動詞  
あしたお客が来るから、今日掃除をしておきます。

……「おきます」は補助動詞

文法で「～ておく」を取り上げるのは、その文法的な意味を理解してもらうためである。

本動詞の場合は、つまり語彙的な意味の和として全体の意味がわかるなら、特に取り立てる必要はないわけである。

### (2) 「～ておく」に関する動詞の分類

「～ておく」の意味を、「店を開けておく」を例に取って考えてみよう。

「店を開けておく」は、「店を開ける」という動作と、その結果である「店が開いている」状態を持続させることを表している。

これを一般化して言えば、「～ておく」は

(1)対象を変化させ、その結果の状態を持続させることを表している、と言える。つまり、店(対象)を開け(変化させ)、店が開いている状態(その結果の状態)を持続させるという意味である。

ところが、「本を読んでおく」ではどうか。「本を読む」では、はっきり対象(本)を変化させるという意味はない。したがって、「その結果の状態」などは考えられない。

しかし、「本を読んでおく」という言い方はある。これは何を表していると考えたらいいのだろうか。これは、

(2)ある時までにある動作を行うこと

を表している、としか言いようがない。事実、「店を開けておく」では、

7時まで 店を開けておく。

という言い方ができるが、「本を読んでおく」では、

\* 7時まで 本を読んでおく。

という言い方はできない。

7時までに 本を読んでおく。

のように「[時間]までに」としなければならない。

### (3) 設置動詞と処置動詞

上の例の「開ける」のような動詞を設置動詞と言うことにしよう。また、上の例の「読む」のような動詞を処置動詞と言うことにしよう。

設置動詞の「～ておく」は

(1)対象を変化させ、その結果の状態を持続させること

処置動詞の「～ておく」は



(2) ある時までにある動作を行うこと

を表すというように、二分したものがそれぞれ別々の意味になればことは簡単であるが、ことばの問題の場合は、なかなかそういうことはない。これを次に考えてみよう。

ところで、「店を開ける」も、「[時間]までに」と共に用いられることがある。

7時までに 店を開けておく。

である。これは何を表しているのだろうか。これは

(2) ある時までに対象に変化を与えること。(その結果の状態には無関心)を表していると考えられる。

以上をまとめると次のようになる。

7時まで 店を開けておく。 \* 7時まで 本を読んでおく。  
7時までに 店を開けておく。 7時までに 本を読んでおく。

つまり、「開ける」のように、「～まで～ておく」と言える動詞が設置動詞、それ以外の動作を表す動詞が処置動詞である。

以上を表示すれば、次のようになる。網掛けの部分が表し得る意味である。

	対象を変化させ、 その結果の状態を 持続させること	ある時までにある 動作を行うこと
設置動詞		
処置動詞		

#### (4) 主な設置動詞

書く、記録する

入れる、のせる

掛ける、立てる、積む、積み上げる、積み重ねる

そろえる、並べる、まとめる、広げる

付ける、つなぐ、貼る、結ぶ

しまう、貯める、残す、保存する、捨てる

「～ておく」の形でよく用いられる設置動詞は、「おく」を場所、様態、関係、状況、目的などで規定した(モディファイした)意味を表すものが多い。例えば、「入れる」は「中におく」、「のせる」は「上におく」と言い替えられる。この「中、上」というのは場所を表すことばである。したがって、「入れる、のせる」は「おく」を場所によって規定した動詞ということになる。

このようにいくつかの設置動詞を「おく」で解説すれば次のようになる。

いける	入れ物の中に花などをおく
うえる	土の中に植物を育てる目的でおく
うめる	かくれた内部、ふつうは大地の中におく
おしこむ	何かの内部に力強くおく
かかげる	あることを広く人に知らせる、またはよく見せるために高い所におく
くみあげる	高い所にある入れ物の中に液体をおく
さす	物の間または筒状のものの中に細長いものをおく
たてかける	対象の一方を垂直の固定物につけ、他方を地面、床などの水平面につけるようにして、細長いもの、板状のものをおく
ふせる	ある物の主な面を下向きにして、それをかくすためにおく
ほうりこむ	ある物を何かの内部に無造作におく

## (5) 主な処置動詞

「～ておく」に特徴的なのは設置動詞である。設置動詞以外の動作を表す動詞はすべて処置動詞ということになるが、その中でもよく「～ておく」の形で使われる処置動詞がある。

言う、考える、おぼえる、知る、調べる、習う

## (6) 「～ておく」の用例

[1]対象を変化させ、その結果の状態を持続させること。

店を開けておく。  
冷蔵庫にビールを入れておく。

[2]ある時までには動作を行うこと(対象に変化を与えること)。

明日までに本を読んでおく。	(処置動詞から)
夜までに本を並べておく。	(設置動詞から)

以上の[1][2]はアスペクト的な意味である。これから、文脈の助けによって準備や一時的処置の意味になる。

## [3]準備

それを書いておくことによって、将来なにかの機会に役だつ。  
必要なことがらをあらかじめ調べておく。  
あしたお客が来るから、今日掃除をしておきます。  
日本に来る前に日本語を習っておく。

## [ 4 ] 一時的処置

とりあえずこの部屋にパソコンを置いておこう。

一応預っておこう。

わからない言葉にはとりあえず符号をつけておく。

## 29 「～てしまう」の意味

太郎は本を読んでしまった。

太郎の部屋のあかりが消えてしまった。

太郎は木を切ってしまった。

太郎はうっかりファイルを消してしまった。

磁石を近付けると内容が消えてしまう。

### (1) 完了

「～てしまう」と言えば「完了」、つまりある過程を持つ動作がおしまいまで行われること、と思われている。たしかに、基本的な意味は完了である。そして、英語の現在完了形の翻訳語として定着している感がある。英語の過去形は「～た」、現在完了形は「～てしまった」と機械的に訳すことがある。

「～てしまう」が完了を表すのは、「読む、書く、話す、食べる」などの継続動詞の場合が典型的である。その場合、「ぜんぶ、完全に、ひととおり」などの副詞を伴うことが多い。

本を読んでしまった。

本を一冊完全に読んでしまった。(＝読み終えた。)

### (2) その他の重要な意味

しかし、よく内省してみると、他の意味もあることがわかる。むしろ他の意味で使われることのほうが多いとも言える。

#### ①〈残念〉

紙が破れてしまった。  
糸が切れてしまった。  
木が燃えてしまった。

これを

紙が破れた。  
糸が切れた。  
木が燃えた。

と比べてみると「ああ、残念……」という意味が加わっていることがわかる。

このように、ある動作・作用が行われた結果の取りかえしがつかないという気持ちのことを〈残念〉と言うことにしよう。「～てしまう」の用例の中で一番多く、ほとんどの場合「破れる、切れる、燃える、倒れる、消える、折れる、くさる、死ぬ」など自動詞であり、「～てしまった」と過去形になる。

## ②〈めんどう〉

紙を破ってしまった。  
糸を切ってしまった。  
木を燃やしてしまった。

これを

紙を破った。  
糸を切った。  
木を燃やした。

と比べてみると、ここの「～てしまう」には二つの意味があることがわかる。

一つは「めんどうだから……」という意味である。

このように、積極的に動作に取り組み、これをかたづけることを<めんどう>とすることにしよう。多くの場合「破る、切る、燃やす、倒す、消す、折る、捨てる、かたづける」など他動詞がこの意味になり、「～てしまおう、～てしまいなさい」のように意志形、命令形で使われる。

### ③<うっかり>

もう一つは「ついうっかり……」という意味である。

このように、人の動作が無意識的に行われることを<うっかり>とすることにしよう。人の動作だから、他動詞のことが多いが、本来自他の別とは関係がない。また、次の例のように、「あがる、(せきを)する、(あくびを)する」などともとも無意志動詞であるものが「～てしまう」の形で使われることがある。

あがってしまった。  
せきをしてしまった。  
あくびをしてしまった。

### ④<不都合>

紙が破れてしまう。 紙を破ってしまう。  
糸が切れてしまう。 糸を切ってしまう。  
木が燃えてしまう。 木を燃やしてしまう。

これを

紙が破れる。 紙を破る。  
糸が切れる。 糸を切る。  
木が燃える。 木を燃やす。

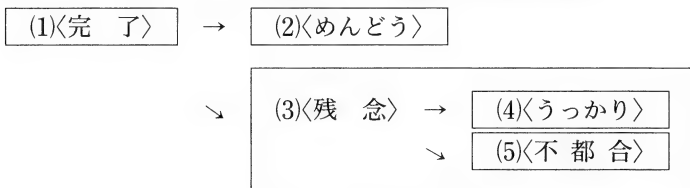
と比べてみると、「不都合なことに……」という意味があることがわかる。

このように、不都合なこと、期待に反したことが行われることを〈不都合〉ということにしよう。主語が無生物で、テンスが現在形の場合が多い。

〈残念〉〈めんどう〉〈うっかり〉〈不都合〉という名称は従来「逸走的、対抗的、無意志的動作、期待外」と言っていたものを、わかりやすく変えたものである。

### ③ 五つの意味の関係

五つの意味の関係は、図のようになっている。(1)はアスペクト、(2)(3)はアスペクト・ムード、(4)(5)はムードであると考えられる。





## 30 「～てくる」「～ていく」の意味(1) 本動詞としての「くる」「いく」

「～てくる」「～ていく」の意味が問題になるのは、その「くる、いく」が本動詞として用いられる場合と、補助動詞として用いられる場合があるからである。つまり、本動詞か補助動詞かの区別が問題になるのである。

本動詞の場合も、その本動詞らしさに段階がある。補助動詞の場合には、その文法的な意味が重要になってくる。

「くる、いく」はどんな動詞とよくいっしょに用いられるか。これは、「くる、いく」がその代表格である移動動詞の分析がポイントになる。これについては、後ほど述べる。

### (1) 本動詞としての「くる」「いく」

「くる・いく」前にする動作

「くる・いく」方法

「くる・いく」ときの状態

近よる動作・作用／遠ざかる動作・作用

[1] 本屋へ行って、本を買って来ました。

[2] 子どもが一人、歩いて来ました。

[3] 流し場から茶わんを二つ持って来る。

[4] その声をきいて、くまがあなから出て来ました。

[5] テレビは目と耳とに同時に訴えて来る。

#### [1] 「くる・いく」前にする動作

本屋へ行って、本を買って来ました。

この例で「買って来ました」は「買った、そして、来た」という意味である。

お弁当を買って行きました。

この文の「買って行きました」は「買った、そして、行った」という意味である。これらの例では、「～て来る」「～て行く」は、一般のテの形の意味〈順次動作〉と解される。

水をくんで来ました。

木の葉を拾って来ました。

お金を預けて来ました。

お祭りを見て来ました。

## [2]「くる・いく」方法

子どもが一人、歩いて来ました。

この例では、[1]のように「歩いた、そして、来た」ではない。「歩く」と「来る」のとは同時である。「来る」方法が「歩く」であり、「歩いて」は「来る」方法を示していると言える。次も同様な例である。

走って来ました。

走って行きました。

泳いで来ました。

泳いで行きました。

この例になる動詞は「方向性のない移動動詞」である。

## [3]「くる・いく」ときの状態

流し場から茶わんを二つ持って来る。

この例では、「持った、そして、来た」と考えられる。しかし、「持った」結果、主体の状態が変化する。その状態で「来た」という意味である。一般に「持つ」の類の動詞はこの意味になる。

本を持って来ました。

本を持って行きました。

鉄砲をかついで来ました。

鉄砲をかついで行きました。

毛布をかかえて来ました。

毛布をかかえて行きました。

次の例はどうであろうか。

「家の人に見つからなければいいが。」と、心配しながら、  
 左の手でこぶをかくしてきました。  
 自分たちでおった着物を着ていかなければいけない。

「左の手でこぶをかくす」とは自分のこぶをかくすことで、主体の状態を変化させる意味になる。その状態で「来た」という意味である。

「着物を着る」は、主体の状態を変化させる意味になる。

これらも主体の状態を変化させるという意味で同じ類に入るものと考えられる。

#### [4] 近よる動作・作用／遠ざかる動作・作用

その声をきいて、くまがあなから出て来ました。

この例では、「出る」ことがつまり「来る」ことである。「出る」は移動動詞である。しかし、[2]の移動動詞とは種類が違う。つまり、「出て」が「来る」方法を表しているとは考えられない。

[2]の移動動詞とどんな点が違うのだろうか。

[2]の「歩く、走る」などは方向性のない移動動詞であった。「方向性がない」とは、「～へ……」と言えないということである。例えば、

\*学校へ歩きました。

はおかしい。

学校へ歩いて行きました。

としなければならない。「歩く」に方向性がないからである。

これに対して「出る」は「外へ出る」のように「～へ出る」と言える。方向性があるからである。

この例に用いられる動詞は、次のような方向性のある移動動詞である。

あがる、のぼる、おりる、おちる、でる、はいる、かえる、  
 もどる、あつまる、にげる、ちかづく

テレビは目と耳とに同時に訴えて来る。

この例では「訴えて来る」の「訴える」は移動動詞ではない。しかし、ちかよる動作・作用を表している。これもこの例に入る。

この意味になる動詞は、移動ではないが、方向性を持っているいわば「方向動詞」と考えられる。これには、次のようなものがある。

うったえる、いう、おそう、はたらきかける

## (2) 移動動詞と方向動詞について

上で見たように「てくる、ていく」の用例を分類すると、移動動詞、方向動詞が浮かび上がってくる。そして、[2]と[4]で見たように、移動動詞には、方向性のないものと方向性のあるものとがあることがわかる。そこで、もう一度これらを定義しておこう。

移動動詞とは、主体の位置を変えるような動きを表す動詞のことである。

方向動詞とは、主体は移動しないが、ある方向に作用がおよぶことを表す動詞のことである。

## (3) 「近づく動作、遠ざかる動作」の動詞

「てくる、ていく」の意味を近づく動作、遠ざかる動作、として説明できる動詞には以上の外に、次のものがある。これらは上の定義に当てはまる移動動詞ではないが、移動動詞ときわめて近い。

「やる」……向こうから人がやって来る。

「わたる」……

(わたる<sub>1</sub>=～にそって進む      橋をわたって行く。)

(わたる<sub>2</sub>=よこぎる      川をわたって行く。)

「とおる、こえる、すぎる」……「～を」をとる。

これをまとめると次のようになる。

移動動詞 方向性なし [2] 「～へ……」と言えない。

移動動詞 方向性あり [4] 「～へ……」と言える。

方向動詞 方向性あり [4]

[2]に使われる動詞と[4]に使われる動詞をつなぐときは、[2]に使われる動詞が先に来る。

泳いでわたって来た。      \*わたって泳いで来た。

## 37 「～てくる」「～ていく」の意味(2) 補助動詞としての「くる」「いく」

### (1) 補助動詞としての「くる」「いく」

出現の過程／消滅の過程

徐々の変化

動作・作用の始まり

あるときまでの継続／あるときからの継続

[1] (1) ことばは生活の中から生まれてきます。

(2) 白鳥のむれがきえていく。

[2] (3) だんだんおなかがすいてきました。

(4) けれども、病気は、ますます重くなっていきました。

[3] (5) そのうちに、雨がふってきました。

[4] (6) おたがいにはげまし合ってきた、この年月。

(7) うまく宣伝して、新しい観光地として発展させていけばいい。

### [1] 出現の過程／消滅の過程

ことばは生活の中から生まれてきます。

白鳥のむれがきえていく。

この例では、

ことばは生活の中から生まれます。

白鳥のむれがきえる。

と言っても、ほぼ同じことを表している。補助動詞「くる、いく」はほぼリダントに(冗慢的に)使われているとも言える。なぜなら、出現を表す動詞に「てくる」がつき、消滅を表す動詞に「ていく」がついて叙述に具体性を与えるという働きをしているだけだからである。

出 現	消 滅
現れてくる      生まれてくる うかんでくる      よみがえってくる	消えていく      かすんでいく 死んでいく      うしなっていく

## [2] 徐々の変化

だんだんおなかがすいてきました。

病気は、ますます重くなっていきました。

この例では「すく」「重くなる」は出現、消滅を意味するものではない。この点で[1]から区別される。また、単なる「……すいた」「……重くなった」とも違う。

この「～てくる、～ていく」は徐々の変化を表す。この例に入る動詞は変化を表すもの(変化動詞)である。「(おなかが)すく」は変化動詞である。

「なる」は変化動詞の代表的なものである。

増えてくる      太ってくる	増えていく      太っていく
減ってくる      やせてくる	減っていく      やせていく
よごれてくる      かわいてくる	よごれていく      かわいていく
重くなってくる	重くなっていく
よく使われる副詞など 「しだいに、だんだん、～につれて」	

## [3] 動作・作用の始まり

そのうちに、雨がふってきました。

この例では、「ふる」は変化動詞ではない。この点で、[2]と区別される。変化動詞ではないから、徐々の変化とは言えない。

この「～てくる」は動作・作用が始まることを表す。「～ていく」にはこの用

法はない。この例に使われる動詞には次のようなものがある。

(雨)がふってくる ばらついてくる  
聞こえてくる 見えてくる わかってくる

なお、変化動詞がこの意味になることがある。その場合は、徐々の変化か動作・作用の始まりか、区別しがたいことがある。

太ってきた[徐々の変化](しだいに)太ってきた $\longleftrightarrow$ 太っていった  
太ってきた[動作・作用の始まり](=太り始めた)

[4]あるときまでの継続／あるときからの継続

おたがいにはげまし合ってきた、この年月。

うまく宣伝して、新しい観光地として発展させていけばいい。

この例では、「はげまし合う」「発展させる」は変化動詞ではない。何よりも、[1][2][3]と違うこの例の特徴は、動詞が長期にわたる動作を表すものだという点である。例えば、次のようなものである。

成長してきた	成長していく
育ててきた	育てていく
生活してきた	生活していく



## 32 「～てみる」の意味

もう一度よく考えてみます。

よく調べてみてから買います。

朝起きてみると、あたり一面真っ白になっていた。

### (1) 本動詞の「みる」と補助動詞の「～てみる」

「～てみる」の意味は「試しに行うこと」ですべてである。

ただ、この場合、本動詞と解釈される可能性のある動詞の場合があるので、注意が必要である。

① 食堂へ行って、テレビを見る。 〈本動詞〉

② 食堂へ行って、見る。 〈本動詞〉

③ 食堂へ行ってみる。 〈補助動詞〉

②では「行って」と「見る」との間に点(.)があり、ポーズがあるので、「見る」は本動詞と考えられる。

### (2) 「～てみる」の形でよく使われる動詞

本動詞は漢字で、補助動詞はひらがなで書くことにする。

見る、聞く、味わう、さわる、のぞく ……感覚を働かすことを表す動詞

開ける、近付く ……感覚を働かすことを助ける動作を表す動詞

調べる、探す、さぐる、考える ……思考・調査活動を表す動詞

### (3) 本動詞と解釈される可能性のある場合

次の動詞が「～てみる」の形をとった場合、「みる」は本動詞と解釈される可能性が大きい。

のぞく	のぞいてみる	方法「そろえて おく」の ように
(電気を)つける	つけてみる	「見る」ための動作
(包を)開ける	開けてみる	
近づく	近付いてみる	

例えば、

明りをつけてみる。

明りをつけて見る。

明りを消してみる。

明りを消して見る。[映画／スライドなど]

を比べよ。あるいは、

近付いてみる。

近付いて見る。

遠ざかってみる。

遠ざかって見る。[不自然]

を比べてみよ。

### (4) 本動詞と解釈される可能性の少ない場合

次の動詞が「～てみる」の形をとった場合、「みる」は本動詞と解釈される可能性は少ない。ということは、補助動詞「みる」の働きが大きいということである。

たたく、(やかんを)ふる、着る、はく	……単純な動作
合わせる、直す	……完了するまでに努力を要する動作

例えば、

やかんをふってみる = 水が入っているかどうか知るために ふる

着てみる = よく似合うかどうか調べるために 着る

という意味になり、「みる」の働きの大きいことがわかる。(単なる「ふる、着る」と比べてみよ。)

これを(2)でふれた思考・調査活動の動詞「調べる」と比べてみると、「調べる」では語彙そのものがその意味だから「みる」はリダンダント(冗慢的)な感じがするのである。

調べてみる ≡ 調べる

## (5) 「～しようとする」と「～てみる」

前項の「完了するまでに努力を要する動作」で補助動詞「みる」の働きの大きいと言うのは、次のようなことである。

こわれた茶わんのかけらを合わせてみたが、合わなかった。

\* こわれた茶わんのかけらを合わせたが、合わなかった。

上の例から「合わせてみた」と「合わせた」とは大きく違うことがわかる。つまり、合わせなくても、「合わせてみた」と言えるのである。この場合「合わせてみる」は「合わせようと努力する」という意味になる。

「～てみる」の英訳に try to ～を当てる考えがあるが、これが該当するのは、このような「～しようとする」という意味になる場合だけである。

## (6) 「～てみると、……」

「～てみると」「～てみたら」は“試しに行う動作”に当てはまらない場合がある。次の例では、発見する条件を表している。(「55 条件の表現(2)」の「と、たら」を参照。)

朝起きてみると、あたり一面真っ白になっていた。

帰って来てみると、もう古い家はなかった。

気が付いてみたら、お金がなくなっていた。

**(7) 「みる」の敬語形「ごらんになる」**

本動詞「見る」の敬語形は「ごらんになる」だが、補助動詞の「みる」もこの敬語形になる。

書いてみる	書いてごらんになる。
みなさい	書いてごらんなさい。
見てみる	見てごらんになる。
みなさい	見てごらんなさい。

## 33 依 頼

ちょっと待ってください。 おくれないでください。  
 こっちを見てください。 ここに入らないでください。  
 もう一度言ってください。 ここでたばこをすわないでください。

### (1) 依頼の表現

依頼の表現は

テの形+「ください」

で表す。否定形は

～ないで+ください

となる。テの形の否定形は「～ないで」と「～なくて」の二つあるが、「ください」に続けるときは、「～ないで」の方を使う。「～なくてください」ではない。

### (2) いろいろなレベルの丁寧な依頼

「～てください」は最も基本的な依頼表現の形式である。

依頼の表現を丁寧にするにはまず、質問の形にする。質問の形にすることは、実際はどうあれ、形式の上では相手に断わるチャンスを与えることになる。

お金を貸してください。  
 お金を貸していただけますか。

さらに、否定形、あるいは推量形にするともっと丁寧になる。

お金を貸してくださいませんか。  
お金を貸してくださいますでしょうか。

また、この組み合わせが考えられる。

お金を貸してくださいませんか。

「いただく」を使うともっと丁寧になる。この場合は「いただける」のように可能形を使う。これも、質問の形、否定形、推量形にすると、もっと丁寧になる。

お金を貸していただけますか。  
お金を貸していただけませんか。  
お金を貸していただけるでしょうか。  
お金を貸していただけないでしょうか。

「～ていただけますか」と可能形になるのがみそである。「～ていただきますか」は依頼の表現としてはおかしい。十分注意していただきたい。

これに対して、親しい間柄で使う次のような形がある。

お金を貸してちょうだい。  
お金を貸して。

## 34 命 令

直接的な命令を表すには「命令形」がある。

待て	立て
入れ	すわれ

しかし、ふだんは命令形よりも、「～なさい」の形を使う。

読みなさい。	書きなさい。
--------	--------

丁寧な命令には「お～なさい」を使う。

お読みなさい。	お書きなさい。
そこにおかけなさい。	へやにお入rinaさい。

しかし、「お～なさい」の形はすべての動詞からできるわけではない。

お～なさい	～なさい	特別形
* お来なさい お行きなさい	(ここへ)来なさい (あちらへ)行きなさい	おいでなさい おいでなさい
* おいなさい	(ここに)いなさい	おいでなさい
* おしなさい	(勉強を)しなさい	なさい

特に、複合動詞は「お～」となりにくい。

書きなおす	?(この字を)お書きなおしなさい	書きなおしなさい
話し合う	?(みんなで)お話し合いなさい	話し合いなさい



## 35 意 志

意志を表す形には次のものがある。

現在形	行きます。
意志形	行こう。 行こうと思います。
形式名詞「つもり」	行くつもりです。

### (1) 意志を表す形

意志は動詞の現在形のままでも表すことがある。

行きます。

しかし、意志は現在形の本来の意味ではない。意志を積極的に示すのは意志形である。

行こう。

これにはよく「～と思う」が続く。

行こうと思う。

意志形には否定形がない。それで、その意味を表すには、次のような言い方をする。

行くのをやめよう。

行かないことにしよう。

また、現在形の否定形は否定の意志を表すことがある。

行きません。

### (2) 意志形の用法

意志形は意志を表すだけではない。この形には、次のような用法がある。

意志 誘いかけ 推量	お金を <u>借り</u> よう。 夏休みに田舎に <u>行</u> こうと思う。 いっしょに散歩に <u>行</u> こう。いっしょに <u>行</u> きましょう。 明日は <u>晴</u> れよう。
------------------	--

一般の動詞の意志形が推量を表すことは少なくなった。「晴れよう。」はふつう「晴れるだろう。」となる。つまり、「だ」の“意志形”(ウの形)が使われるのである。

### (3)「つもり」

形式名詞「つもり」を使って意志や予定を表すことができる。

肯定形	否定形
行くつもりです。	行かないつもりです。 行くつもりはありません。

否定形は「行かないつもりです。」あるいは、「行くつもりはありません。」となる。

Vた(過去形)＋「つもり」は、錯誤、あるいは仮想の意味になる。

錯誤 仮想	とらの絵を <u>かいた</u> <u>つもり</u> です。 本を <u>買った</u> <u>つもり</u> で貯金する。
----------	--

「錯誤」というのは、上の例で、実際は猫のように見える絵をかいたにもかかわらず、本人はとらの絵をかいたと思い、そう言い張る、ということである。

「仮想」というのは、上の例で、本を買わなかったにもかかわらず、そしてそのことを知っていながら、本を買ったと仮に想定することである。

この形式名詞「つもり」は、「意図」というほどの意味であるが、単独では使

えない。形式名詞は、英語で、つねに(あるいは、たいてい)修飾される名詞 (Nouns Always Modified あるいは Nouns Usually Modified)と説明されるように、動詞の修飾語がつくのがふつうである。このことを教えておかないと、次のような間違いがよく起こる。

\*私のつもりは夏休みに田舎へ行くことです。

## 36 誘いかけ

散歩に行きましょう。  
映画を見に行きましょう。  
お茶でも飲みに行きませんか。

### (1) 意志形による誘いかけ

「行こう」は、本来、意志形であるが、誘いかけに使われることもある。

「行きましょう」も、本来は丁寧形(マスの形)の意志形であるが、自分の意志について「丁寧形」を使うのはおかしいので、意志の意味で使われることはあまりない。その代わり、誘いかけの意味で使われるようになった。丁寧形を使って話す相手に対する誘いかけである。

行こう	目下、親しい相手に対する誘いかけ
行きましょう	同等、改まった感じの誘いかけ

意志形による誘いかけには、終助詞「か、よ」がつくことがある。

行こうか。	行こうよ。
行きましょうか。	行きましょうよ。

「～か」は、質問の形で相手に拒絶の可能性を与えるだけ、ソフトな誘いかけになる。「～よ」は、これに対して、自分の考えを相手に押し付けるような意味あいがある。

## (2) 否定疑問文による誘いかけ

意志形を使わずに誘いかけを表すには、「否定疑問文」を使う。

行きませんか。

これに対する応答は、

承諾なら、「ええ、行きましょう。」

拒絶なら、「ちょっと、都合がわるいので……。」

などとなる。

「行きませんか。」に対して「はい、行きません。」

「いいえ、行きます。」

と答えるのは、相手のことばを純粹に質問の意味にとらえた場合である。

## 37 希望の表現「～たい」

私は本が読みたい。

太郎は本を読みたがっている。

太郎は本を読みたいと言っている。

### (1) タイの形

動詞のタイの形で希望の表現を表す。タイの形は連用形に「たい」をつける。

読む → 読みたい

見る → 見たい

来る → 来たい

する → したい

できあがったものは、一種の形容詞として変化する。

### (2) 「～たい」表現の構文

本を読む。

水を飲む。

遠い町へ行く。

→本が読みたい。

→水が飲みたい。

→遠い町へ行きたい。

→本を読みたい。

→水を飲みたい。

「～を」は「～が」になると考えられているが、「～を」のままでよい。他の格助詞は変わらない。

「水が飲みたい」か「水を飲みたい」かでは、「水が飲みたい」がふつうで、「水を飲みたい」は破格だという感じがする。しかし、他の例では、「～を～たい」と言うことが断然多い。この議論を「水」の例で代表させるのはどうかと思う。

### ③ 三人称

「～たい」の形は叙述形現在では、一人称でしか使えない。これは感情形容詞と同じである。三人称の希望を表すには工夫がいる。よく「～たがる」という形が公式のように用いられているが、その外に「～と言っている」という形でもいいはずである。

\* 太郎は新聞が読みたい。

太郎は新聞を読みたがっている。

太郎は新聞が読みたいと言っている。

## 38 部分の表現 「～は ～が ～」など

象は鼻が長い。

私は頭が痛い。

### (1) 部分の表現

象は 鼻が 長い。

花子は 目が 大きい。

見かけ上「～は ～が ～」と、主語が二つもあるような構文になる文にはいろいろな種類があるが、最も有名なのは、「象は鼻が長い」で代表されるものであろう。

$N_1$  は  $N_2$  が 形容詞

象 は 鼻 が 長い

この文で「鼻」というのは「象の鼻」のことである。 $N_1$  と  $N_2$  とは全体と部分の関係になっている。

よく聞かれる質問は、

①象は鼻が長い。

②象の鼻は長い。

はどう違うか、というものである。

これについては、「～は」は主題を表すことから、次のようになる。つまり、①は「象」の性質を言う文、②は「象の鼻」について言う文ということになる。



「象」の性質を言う文	「象の鼻」について言う文
象は 鼻が長い。 象は 足が太い。 象は 目が小さい。	象の鼻は 長い。 象の鼻は 水を吸い込む。 象の鼻は 手のようによく動く。

## ② 体のある〈個所〉

「私は 痛い」では意味の完結性がない。もし、そう言われたら、「どこが？」と聞きたくなるであろう。

それで、次のようになる。

私は	頭が	痛い。
私は	歯が	痛い。
私は	おなか	が 痛い。
私は	背中	が 痛い。

ここで注意すべきことは、「何が？」でもなく、「どれが？」でもなく、「どこが？」だということである。「どこ」は、ふつうは広い場所を表すが、体の一部分のような狭いところについても用いられる。それで、これを〈個所〉と言うことにする。これは、つながっていて切り取ることができないもの、という共通性がある。

39 無意志的な動作の表現

私はめまいがする。  
私はおなかがすいている。  
私はかぜをひきました。

(1) 人の無意志的な動作の表現

自動詞の「する」を用いるもの	めまいがする はきけがする 頭痛がする
その他の自動詞を用いるもの	おなかがすく のどがかわく 足がつかれる
他動詞を用いるもの	病気を かぜをひく おなかをこわす けがをする 熱を出す 下痢をする

(2) 外国語では

「おなかがすいている。」「のどがかわいている。」のような人間の生理現象を表す言い方は、各国語によって特徴が出るものである。

言 語	表 現	直 訳
英 語	I am hungry.	私はひもじい。
	I am thirsty.	私は渴いている。
イタリア語	Ho fame.	私は飢えを持つ。
	Ho sete.	私は渴きを持つ。
フィンランド語	Minun on nälkä.	私には飢えがある。
	Minun on jano.	私には渴きがある。
	Minua nälättää.	(それが)私を飢えさせる。
	Minua janottaa.	(それが)私を渴かせる。

フィンランド語には二つの言い方がある。Minun on nälkäの直訳は、実は難しい。minunはminä「私」の生格である。

## 40 比較の表現

太郎は 次郎より 将棋が 強い。  
私は りんごより バナナが 好きだ。

### (1) 比較の表現の前に

例えば、「太郎は強い」と言っても、意味が完全ではない。これでは何が強いのかわからない。「将棋が強い」のように「～が」ということばが必要である。

太郎は 将棋が 強い。  
花子は 絵が 上手だ。  
次郎は 背が 高い。  
東京は 人口が 多い。

### (2) 「Aは Bより ～」(比較級)

太郎は 次郎より 将棋が 強い。  
花子は 恵子より 絵が 上手だ。  
恵子は 次郎より 頭が いい。  
次郎は 三郎より 背が 高い。  
東京は 大阪より 人口が 多い。

比較の表現というのは、英語では形容詞のところに出て来る。英語では形

容詞が、比較級、最上級と変化するからである。英語、ドイツ語では比較の表現で形容詞が変化するが、イタリア語では英語で more を使うように、形容詞の前に più をおく。比較級「より高い」を次のように言う。

英 語	high	higher
ドイツ語	hoch	höher
イタリア語	alto	più alto

日本語では、比較の表現だからといって形容詞は変化しない。比較の表現で重要な役割を果たすのは、助詞「より」である。英語などの比較級を訳して「より大きい」などと言うこともあるが、「より」は元来前の名詞につくべきものである。

### ③ 主体の比較と対象の比較

次の例に注意。

- |     |               |               |    |     |       |
|-----|---------------|---------------|----|-----|-------|
| ①私は | <u>あなた</u> より | コーヒーを         | よく | 飲む。 | 主体の比較 |
| ②私は | <u>お酒</u> より  | <u>コーヒー</u> を | よく | 飲む。 | 対象の比較 |
| ③私は | あなたより         | バナナが好きです。     |    |     |       |
| ④私は | りんごより         | バナナが好きです。     |    |     |       |

つまり、日本語では「主体の比較」と「対象の比較」が文法の形式上ははっきりしないのである。①②では、常識でわかるが、③では、わからない。ふつうは③を主体の比較、④を対象の比較の意味にとるが、③を対象の比較の意味にとることもできる。もし、③が対象の比較の意味に受け取られると、相手に「まっ、失礼な」と言われかねない。

「より」に当たることばは、英語、ドイツ語、イタリア語で次のようになっている。すべて語源が違う。

「より」に当たることば			
英語	than	ドイツ語	als
イタリア語	di あるいは che	フィンランド語	kuin

「より」に当たることばは、イタリア語の di（これは前置詞）以外は、接続詞である。フィンランド語の kuin も接続詞であるが、フィンランド語では、この外に分格という格形を使って形容詞の前におくという方法もある。

あなたは私より背が高い。

Te olette pitempi kuin minä.

あなたは である 背が高い より 私

Te olette minua pitempi.

あなたは である 私より 背が高い

こうなると日本語の語順に一步近づく。

(4) 「……の中で 一番～」(最上級)

英語、ドイツ語では形容詞が最上級という形に変化し、さらに冠詞をつける。イタリア語では più を使い(ここまでは比較級と同じ)、さらに冠詞をつける。

英 語	the highest
ドイツ語	der höchst
イタリア語	il più alto

日本語では形容詞の前に「一番」ということばをおく。  
範囲を示すことばは「～で、～の中で」である。

太郎は	クラスで	将棋が	一番	強い。
花子は	学校で	一番	絵が	上手だ。
次郎は	兄弟の中で	一番	背が	高い。
東京は	日本で	一番	人口が	多い 都市だ。
富士山は	日本で	一番	高い	山だ。

「一番」の位置であるが、上の例に見るように「絵が上手だ」「背が高い」などのつながりが強いと、あまりその中に割って入ることはなく、たいていその前におかれる。

## ⑤ 「～のほうが」

日本語には「Aのほうが～」という比較の表現がある。

- |           |          |           |
|-----------|----------|-----------|
| ①東京と大阪とでは | どちらが     | 人口が多いですか。 |
| ②東京のほうが   | 人口が多いです。 |           |
| ③東京のほうが   | 大阪より     | 人口が多いです。  |
| ④東京は      | 大阪より     | 人口が多いです。  |
| ⑤東京は      | 大阪より     | 人口が多いですか。 |
| ⑥はい、東京は   | 大阪より     | 人口が多いです。  |

「Aのほうが～」という言い方は、①のように聞かれたときの返事として、②あるいは③のように言うときに使われる。このとき④のように答えてはならない。④は⑤のように問われたときの返事⑥の部分として使われるのである。

## ⑥ 「AはBほど～ではない。」(比較の否定)

- |        |      |     |       |
|--------|------|-----|-------|
| (1)次郎は | 太郎ほど | 将棋が | 強くない。 |
|--------|------|-----|-------|

比較の否定は、こうなるのが普通の構文なのだが、よく学習者から

(2)次郎は 太郎より 将棋が 強くない。

のように

AはBより～ではない。

という構文ではいけないのかと、質問される。

予断を持たず客観的に比較するときは、(2)の構文がいいだろう。一方、太郎が強いという予断を持っていて、次郎も強いが太郎ほどではないというときは(1)の構文になる。



## 41 忠告の表現「～たほうがいい」

少し休んだほうがいいですよ。

傘を持って行ったほうがいいですよ。

あまりたばこをすわないほうがいいですよ。

### (1) 「～たほうがいい」

忠告の表現は「～たほうがいい」で表す。

つまり、動詞の過去形に「ほうがいい」がつく。

少し休んだほうがいいですよ。

傘を持って行ったほうがいいですよ。

否定、つまりしないことを忠告する場合には、「～しないほうがいい」となる。

つまり、現在否定形に「ほうがいい」がつく。

1時間以上テレビゲームをしないほうがいいですよ。

あまりたくさんお金を持って行かないほうがいいですよ。

過去形が使われるのは、そうなった状態を想定して、忠告するところから、過去形のほうがふさわしいと考えられたものと思われる。終助詞「よ」がつく。

### (2) 起源は比較の表現

「～ほうがいい」は元来、次の例のように比較の表現で使われるものである。

コーヒーを飲みますか、お酒を飲みますか。

そうですね。コーヒーを飲むほうがいいです。

## 42 経験の表現「～たことがある」

イタリアへ行ったことがあります。  
イタリアへ行ったことはありません。

### (1) 「～たことがある」

経験の表現は「～たことがある」で表す。各種の変化は、この「ある」が受け持つので、否定は「～たことがない」となる。質問に対する返事では「～たことはない」となることがある。

### (2) 複合述語

「～たことがある」は **〔動詞の過去形〕＋ことが＋ある** という構成になっているが、全体で一つの複合述語と考えられる。

複合述語というのは、数語から成る述語という意味である。数語から成る語であっても、分析せずに、一語から成る述語のようにあつかうのが便利である。いわば、一つの長い語尾変化と考えるのである。

それは、まず何よりも日本語の話し手の意識に合っているからである。これを、「しか～ない」という呼応する構文によって見てみよう。

「しか」は否定形と呼応する。

一回 行った	一回しか 行かなかった。
百円 使った	百円しか 使わなかった。

しかるに、次のようになる。

一回しか 行ったことが ない。  
百円しか 使ったことが ない。

この文では、「しか」は「行った、使った」とでなく、「こと」を乗り越してその後の「ない」と呼応している。つまり、「行ったことがある」を一つの長い述語とみて、その否定形と呼応しているのである。

③ 経験の表現に対する否定の答え

- ①イタリアへ 行ったことが ありません。  
②イタリアへは 行ったことが ありません。  
③イタリアへ 行ったことは ありません。  
④イタリアへは 行ったことは ありません。

「イタリアへ行ったことがありますか。」に対して否定で答えるとき、この四通りの返事のうち、どれが適当か。また、それはなぜか。

質問に対し、否定で返事をするときは、原則として「は」が要る。否定の焦点を示すためである。

質問に対する返事でなければ、①のように「は」がなくてもいい。また、④のように「は」が二か所に出てくるのは、焦点が二つあるようなもので、焦点ぼけになってよくない。

したがって、適当な返事は②か③になるが、そのニュアンスは異なる。

②イタリアへは 行ったことが ありません。	どこか他のところへ行ったこと がある、という含み。
③イタリアへ 行ったことは ありません。	行ったことはないがイタリアのこと はよく知っている、という含み。

## 43 許可「～でもいい」

このワープロを使ってもいいですか。

はい、使ってもいいです。／はい、どうぞ。

ここで写真をとってもいいですか。

いいえ、ここで写真をとってははいけません。[禁止]

### (1) 許可の表現

許可の表現は「～でもいいです」、許可を求める表現は「～でもいいですか」となる。それに対する肯定の返事は「はい、～でもいいです」、実際の会話では「はい、どうぞ。」などとなる。

否定の返事は「禁止」(「～てはいけません」)になる。

### (2) バリエーション

「～てもかまいません」 消極的、ソフトな言い方。

### (3) 「～でもいい」の広がり

無関心	そんなことをして、病気になってもかまいませんか。 (これは相手が「病気になっても」である。)
消極的な賛成	はい、病気になってもかまいません。 (これは、自分が「病気になっても」である。)
当然	[自分の動作について言う場合] 「今晩うちへ来る?」「行ってもいいけど。」
希望	このような本があってもいい。(あるはずだ) このような本があってもいい。(あればいいのに)

## 44 禁止「～てはいけない」

このワープロを使ってはいけません。  
ここで写真をとってはいけません。

### (1) 禁止の表現

禁止の表現には表題のような「～てはいけない」の外に次のようなものがある。

～ないように	お金を落とさないように。 宿題を忘れないように。
～ないこと	むだ使いをし <u>ない</u> こと。
～な	くぐる <u>な</u> 。(ふみきりの垂れ幕)
～べからず	この中に入る <u>べ</u> からず。
～禁ず	張紙を <u>禁</u> ず。

### (2) バリエーション

- ～てはいけません 聞き手に対してというニュアンス。  
 ～てはなりません 社会によって当然と考えられていること。  
 ～てはだめです 口語的。  
 ～ては困ります 口語的、やや消極的。

### (3) 「～てはいけない」の広がり

<p>社会的な規範</p>          <p>指示 医者が患者に 先生が学生に 自分自身の励まし</p>	<p>寮生は門限に遅れてはいけない。 お酒を飲んで運転してはいけない。 代議士がそんなことをしてはいけない。 かたいものを食べてはいけません。 宿題を忘れてはいけない。 こんなことでへこたれてはいけない。</p>
---	--

## 45 義務「～なければならない」

本を読まなければならない。  
 お金を払わなければならない。  
 11時までに帰らなければならない。

### (1) 「～なければならない」の基本的な意味

社会で一般的に期待されていること		学生は勉強しなければならない。
主語が一人称	義務を確認する	私は学校へ行かなければならない。
主語が聞き手を含む「私たち」	みなに決断を迫る	我々は増税案に反対しなければならない。
主語が二人称	命令的	君はもっと勉強しなければならない。

### (2) バリエーション

- ① {～なければ} と {～ならない} の組み合わせで四つの言い方ができる。

～なければなりません    ～なくてはなりません

～なければいけません    ～なくてはいけません



～なければ (間接的) ～なくては (直接的)	～ならない 行為者の意志にかかわりなく 要求されることがら ～いけない 行為者自身の主体的な判断に 依存する余地を残す
----------------------------------	--

- ②～なければだめです 「だめ」を使ったもの。口語的。  
 ～なくてはだめです
- ③～ねばならぬ、など 「なければ」を「ねば」、「ない」を「ぬ」と縮めたもの。  
 文章語。
- ④～べき 文語的。

### ③ 「～なければならぬ」と勧め

英語で “You must eat it.” と言って勧めることがあるそうだ。これを直訳して、「あなたはこれを食べなければなりません。」と言われると、びっくりする。この場合次のように言うべきだ。

ぜひ召し上がってください。  
 ぜひ食べたほうがいいですよ。

### ④ 「～なければならぬ」の広がり

ソフトな 断わり 言い訳	「今晚一杯どうですか。」 「せっかくですが、この仕事をどうしても今日中 にしてしまわなければなりませんので……」 「どうして先週いらっしやらなかったのですか。」 「すみません。急に出張しなければならなくなっ たんです。」
--------------------	---

## 46 不必要「～なくてもいい」

今日お金を払わなくてもいいです。

### (1) 「～なくてもいい」の基本的な意味

#### ①～する必要がある

もう一度打ち直さなくてもいいです。

その文書のコピーがとってあります。打ち直すのはむだです。

打ち直す必要がありません。

「打ち直す」+「なくてもいい」

#### ②～ないことを許可する

ニンジンがきらいなら食べなくてもいいですよ。

本当は食べたほうが体にいいのだが、……食べないことを許可する。

「食べない」+「てもいい」

### (2) バリエーション

#### ①～なくてもかまいません

入場料を払わなくてもいいです。

入場料を払わなくてもかまいません。(消極的、ソフト)

#### ②～必要ありません。

入場料を払う必要はありません。

### (3) 「～なくてもいい」の広がり

「しなくてもいい」から「してはいけない」という禁止の意味になる場合がある。

そんなことをしなくてもいい。……>してはいけない。

不必要

禁止

## 47 可 能

私は泳ぐことができます。

私は泳げます。

私は水泳ができます。

子どもは半額で入ることができます。

子どもは半額で入れます。

子どもは半額で入場できます。

### (1) 可能の表現

可能の表現には次の三つがある。

#### ①動詞の基本形に「ことができる」をつける。

私は泳ぐことができる。      私は読むことができる。

#### ②可能動詞を用いる。(後に作り方の規則を述べる。)

私は泳げる。      私は読める。

#### ③「できる」を用いる。

私は水泳ができる。      ひまなとき、読書ができる。

その外に「可能」ということば自体を使う「～ことが可能だ」や、「～の立場にある」などの言い方もある。

### (2) 可能動詞の作り方

#### ①五段動詞の語尾の -u をとって -eru をつける。

読む yomu → yomeru      読める

会う au → aeru      会える

## ②一段動詞からは、可能動詞を作ることができない。

みだれた形としてよく取り上げられる「\*見れる」は、「見る」が一段動詞であるにもかかわらず、五段動詞としての可能動詞の作り方を適用したものである。

見る miru → \*mireru \*見れる

食べる taberu → \*tabereru \*食べれる

一段動詞では、受身形が可能動詞として用いられる。一段動詞の受身形は -ru をとって -rareru をつける。

食べる taberu → taberareru 食べられる

見る miru → mirareru 見られる

## ③不規則動詞

来る → 来られる(こられる)

する → できる

可能動詞は一つの一段動詞として各形に変化する。

読める 読めない 読めた 読めなかった	読めます 読めません 読めました 読めませんでした
読めて 読めないで 読めなくて 読めれば 読めなければ	

## ③ 可能の意味

ここで「可能」と言っている意味には、次の二つが含まれている。

(1)練習して技術を習得した結果、そうする能力がある。

(2)そうすることが一般に可能だ、許されている。

日本語では、それを言い分けることをしない。基本的な可能の表現は三つあるが、その使い分けは語形の問題で、意味によるものではない。

この意味の違いを教えてくれるのが、我々が中国語を習ったときである。  
中国語では、この違いを(1)は「会」、(2)は「能、可能」を使って言い分ける。

(1)技術習得の結果の能力	(2)一般的な可能、許可
私は泳ぐことができます。 この子は英語が話せます。 花子は自転車に乗れます。 太郎はワープロができます。	ここでは10時まで泳げます。 教室では英語が話せません。 子どもは半額で入れます。 雨の日でも野球ができます。

#### (4) 可能表現の構文

英語の新聞を読みます。	→英語の新聞が読めます。
その町まで30分で行きます。	→その町まで30分で行けます。

「～を」は「～が」になる。他の格助詞は変わらない。

もとの文の主語が「に」になることがある。能力の所有者を表す「に」と言われている。次の文に対しては二つの可能の文ができることになる。

私は      この問題を    解きます。	
私は      この問題が    解けます。 私には    この問題が    解けます。	私は      この問題が    解けません。 私には    この問題が    解けません。

「には」になる場合は、否定形になることが多いが、必ずしもそうとは言えない。

ぼくにできないことが君にできるか。

? ぼくができないことが君ができるか。

これらを比べると「が」で紛らわしくなるとき、「に」になるものと思われる。

## 48 伝聞の表現「～そう」

雨が降るそうです。  
雨が降ったそうです。  
雨が降っているそうです。

紛らわしい「そう」が二つある。伝聞の「そう」と様態の「そう」である。ここでは伝聞の「そう」について、次項で様態の「そう」について述べる。この区別を「～そう」(伝聞)、「一そう」(様態)と書き表すことにする。

### (1) 「～そう」(伝聞)

伝聞の「～そう」は「～と言っている」と言い替えることができる。

雨が降るそうです。 = 雨が降ると言っています。

「そう」の前の形は、現在形でも過去形でもいい。また、肯定形でも否定形でもかまわない。伝えることの内容によって決まることがらだからである。

雨が降ったそうです。  
地震があったそうです。  
雪が積もっているそうです。  
大きな事故にはならなかったそうです。

「そう」自身はテンスによる変化をしない。

\* 雨が降ったそうでした。

## (2) 伝聞の出どころを表すには

伝聞のソース(出どころ)は「～によると」「～では」などで表す。

テレビによると

テレビのニュースによると

松田さんによると

松田さんの話によると

松田さんの話では

} 事故の犠牲者は数十人にのぼったそうです。

## 49 様態の表現「—そう」

花子はうれしそうです。

花子はうれしそうな顔をしています。

あっ、テーブルから花びんが落ちそうだ。

雨が降りそうです。

あの人は自動車を買いそうです。

### (1) 「—そう」(様態)

様態の「—そう」は動詞の連用形に続く。できあがったものは一つの“ナ形容詞”となる。

降りそうだ。

降りそうな 天気

降りそうに なる。

一部の形容詞、ナ形容詞の語幹にも続く。

おいしい おいしそう おいしそうなうな井

健康な 健康そう 健康そうな赤ちゃん

その場合、「いい、ない」はそれぞれ「よさそう、なさそう」となる。見てすぐわかる状態を表すことばにはつかない。

\* きれいそう

### (2) 「—そう」の意味

「—そう」の意味は、「～ように見える」ということであるが、つくことばによって、次のように細分される。



様態	無意志動詞	形容詞、状態動詞
切迫	〃	瞬間動詞＋現場
予測	〃	瞬間動詞、継続動詞
未発	意志動詞	継続動詞

### (3) 様態(狭い意味の「様態」)

形容詞に「一そう」のついた場合が様態の本来の意味である。

〔イ形容詞〕 うれしそう、おいしそう、いたそう、ほしそう

〔ナ形容詞〕 静かそう、あたたかそう、健康そう、元気そう

動詞のうち、状態動詞も形容詞と同じと考えられる。

〔状態動詞〕 ありそう、かかりそう

可能動詞は状態動詞の一種である。

〔可能動詞〕 できそう、読めそう、買えそう、行けそう

(可能形) 食べられそう、おぼえられそう

タイの形は形容詞の一種である。

〔タイの形〕 読みたそう、買ったそう、食べたそう

このバナナは太くて、おいしそうだ。〔形容詞〕

花子はおいそうなうなぎを食べている。

太郎はワインをおいそうに飲んでいる。

あの人はお金がありそうだ。〔状態動詞〕

### (4) 切迫

「一そう」の意味できわだった特徴をなすのはいわゆる切迫を表すものである。

あっ、テーブルから花びんが落ちそうだ。  
谷からころげ落ちそうになりました。

この意味になるのは次のような動詞である。

【瞬間動詞】 落ちそう、切れそう、倒れそう、沈みそう、割れそう  
これらは瞬間動詞という範疇でまとめられそうだ。

受身形も瞬間動詞として働く。

【受身形】 食べられそう、とられそう、やられそう

瞬間動詞とは、状態の変化を表す動詞で、その変化の時点が瞬間的であるところからその名が付いたものである。瞬間動詞+「一そう」は、その変化の時点に事態が近づいていることを示すので、切迫の意味になるものと考えられる。

しかし、単に瞬間動詞であれば、この意味になるかというところでもない。切迫は、話し手がその場にいて見た状況をすぐさま口に出すという場合である。それで、「主題一述語」という、いわゆる題述判断をするひまがないので無題文になる。形式から言うと主体が「～が」で示されるのである。

これを継続動詞の場合と比べてみよう。

瞬間動詞	継続動詞
花びんが落ちそうです。 糸が切れそうです。 木が倒れそうです。 船が沈みそうです。	雨が降りそうです。

例えば、「木が倒れそうですよ。」と言われると、「えっ、そりゃ大変だ。」との反応をするが、「雨が降りそうですよ。」と言われても「ああ、そうですか。」ぐらいののんびりした受け答えで済ませられる。ちっとも緊迫感がない。

なお、一段動詞では、可能形と受身形が同じ形になるが、意味はそれぞれ別のものになる。例えば、「食べられる」には可能の意味と受身の意味とがあるが、これに「一そう」のついたものはそれぞれ次のようになる。

今日はおいしくご飯が食べられそうだ。[可能形] 様態  
魚が猫に食べられそうだ。 [受身形] 切迫

あの魚は猫に食べられそうだ。

この文は、いかにもものんびりしている。切迫感は感じられない。こうなると、次の「予測」に近づく。

いや、もともと「一そう」の意味は、

様態 > 特殊なもの > 予測 > 特殊なもの > 切迫  
なのだ。

## (5) 予測

では、状態動詞でなく、瞬間動詞でもないもの、瞬間動詞であっても上の条件に当てはまらないものはどうなるか。

雨が降りそうだ。

あと十日ぐらいで仕事が終わるそうだ。

一週間ぐらいいい天気が続くそうだ。

来月はいそがしくなりそうだ。

これらは、様態「～ように見える」に似ているが、状態動詞ではないから動きがある。「現在の状況から見て、予め推測される動き」を表す、と言える。

## (6) 未発

以上はすべて無意志動詞に「一そう」のついたものであった。これに対して、意志動詞に「一そう」のついたものは、やや特殊な例である。

**【意志動詞】** 読みそう、買いそう、食べそう、言いそう

この形は、「まだその動作をしないが、現状から見て、間もなくそうする可能性がある」ということから未発としよう。

この形は、第三者の意志を話し手が推測する意味になる。したがって、一人称主語で意志動詞に「一そう」のついた形を使うのはおかしいことになる。

\* ぼくは本を読みそうだ。

もし言うなら、無意志動詞化しなければならない。

ぼくは味方を撃ってしまいそうだ。

次の例を比較せよ。

あの人は自動車を <u>買い</u> そうだ。	【意志動詞】	未発
あの人は自動車が <u>買った</u> そうだ。	【タイの形】	様態
あの人は自動車が <u>買え</u> そうだ。	【可能動詞】	様態

## (7) 否定形

「一そう」の否定形はゆれていて、決まった形はないようだ。

「一そう」は一種のナ形容詞になるから、否定形は

一そうではない

となるのが原則だが、形容詞に「一そう」のついたもの以外は、ふつうは

一そうもない

一そうにない

一そうにもない

を使う。

できそうもないと思うことができるようになる。それはとてもすばらしいことなの。

うれしそうではない

\* ありそうではない

\* できそうではない

\* 読みたそうではない

\* 落ちそうではない

\* 降りそうではない

\* 買いそうではない

\* うれしそうもない

ありそうもない

できそうもない

読みたそうもない

落ちそうもない

降りそうもない

買いそうもない

\* うれしそうにない

ありそうにない

できそうにない

読みたそうにない

落ちそうにない

降りそうにない

買いそうにない

## 50 受身

### (1) 受身とは

受身というのは英語でおなじみである。「先生が太郎をしかる」に対して「太郎が先生にしかられる」を受動態とか受身と言う。つまり、表現する立場が変わるのである。このことを一般言語学で態(Voice)と言う。受身は受動態(Passive Voice)である。これに対して、もとの文を能動態(Active Voice)と言う。

### (2) 受身形の作り方

五段動詞	しかる	sikaru	→	sikarareru	しかられる
	読む	yomu	→	yomareru	読まれる
	思う	omou	→	omo-w-areru	思われる
一段動詞	見る	miru	→	mirareru	見られる
	食べる	taberu	→	taberareru	食べられる
不規則動詞	来る	kuru	→	korareru	来られる
	する	suru	→	sareru	される

omou「思う」のところに -w- が入ることに注意。

「持って来る、持って行く」は一語の意識が強いので、後の「来る、行く」の部分が変化する。それで、「持って来られる、持って行かれる」となる。「連れてくる、連れて行く」は、「連れて来られる、連れて行かれる」とも言うし、「連れられて来る、連れられて行く」とも言う。

このようにしてでき上がった受身形は一個の一段動詞として各形に変化する。

### (3) 受身の構文

英語の受身は、もとの文の目的語を主語にするものであるが、日本語の受身は、よく「日本語の特徴」として、自動詞も受身になると言われる。

しかし、日本語の特徴としては、「間接の受身」をあげるべきである。また、自動詞でも受身にならないものがけっこう多い。いわゆる所動詞と言われるグループである。

所動詞——受身にならない動詞——  
ある、できる、要る、見える、聞こえる

日本語の受身は、大きく自動詞の受身と他動詞の受身に、他動詞の受身はさらに直接の受身、間接の受身に分けられ、その各々がさらに細分される。

	直接の受身	間接の受身
自動詞		私は前の空席に女の人に すわられた。
他動詞	太郎は先生にしかられた。	私はだれかにフロッピーの データを消された。

### (4) 直接の受身

#### ①[人]を対象とする動詞

太郎は先生にしかられた。	← 先生が太郎をしかった。
次郎は太郎になぐられた。	← 太郎が次郎をなぐった。
三郎は太郎にいじめられた。	← 太郎が三郎をいじめた。
花子は先生にほめられた。	← 先生が花子をほめた。

他に次のようなことばがある。

愛する、なぐさめる、かわいがる、にくむ、きらう、裏切る  
 さそう、頼る、指導する、助ける、尊敬する  
 逮捕する、起訴する、(市長に)選ぶ  
 信ずる、信用する、信頼する、支持する  
 歓迎する、招待する、紹介する

②その他(一般の書物、実は新聞、雑誌で用いられる受身文では、この種類が  
 一番多いのである。)

スピードは、一定の空間を移動するのに要する時間で測られる。  
 貿易シンポジウムが開かれた。  
 道路標識には町名が記されている。  
 卒業式が行われる。  
 雑誌が発行される。(発売される。発表される。)  
 道端にゴミが捨てられる。

## (5) 間接の受身

間接の受身のうち、主な類型を挙げると、次の通り。

- ①自動詞から作られる典型的な迷惑の受身と言われるもの。
- ②体の部分についての受身。その持ち主が主語になる。
- ③持ち物についての受身。その持ち主が主語になる。
- ④動作の向けられる対象の受身。間接対象者(～に)が主語になる。
- ⑤その他



## ①自動詞

雨に降られる。	← 雨が降る。
親に死なれる。	← 親が死ぬ。
赤ちゃんに泣かれる。	← 赤ちゃんが泣く。
人に来られる。	← 人が来る。
前の空席に女の人にすわられた。	← 女の人が前の空席にすわった。

## ②体の部分

友だちにかたをたたかれる。	← 友だちが(私の)かたをたたく。
知らない人に足をふまれる。	← 知らない人が(私の)足をふむ。
犬に手をかまれる。	← 犬が(私の)手をかむ。
虫に顔をさされる。	← 虫が(私の)顔をさす。

## ③持ち物

どろぼうにお金をぬすまれた。	← どろぼうが(私の)お金をぬすんだ。
だれかにフロッピーのデータ を消された。	← だれかが(私の)フロッピーのデータ を消した。
友だちに手紙を読まれた。	← 友だちが(私の)手紙を読んだ。

#### ④動作の向けられる対象

タクシーにどろ水をひっかけられた。 ← タクシーが私にどろ水をひ  
つけた。

子どもに石を投げられた。 ← 子どもが私に石を投げた。

デモの人々に背中に石をぶつけられた。← デモの人々が私の背中に石をぶつけた。

デモの人々に頭に水をかけられた。 ← デモの人々が私の頭に水  
かけた。

## ⑤その他

その研究者は職を奪われた。←(その組織は)研究者の職を奪った。

従業員は単身赴任を ←(その会社は)従業員に単身赴任を強いた。  
強いられた。

歩道橋はみにくい体に、標語や広告をいっぱいつけられている。

← (かれらは)歩道橋のみにくい体に、……をいっぱいつけている。

## ⑥ 行為者を示す助詞について

行為者を示す助詞は、大方は「に」でいいのだが、その外に「によって、から」となることがある。

外国語を見てみると、英語 by、イタリア語 da、ドイツ語 von などとなっている。イタリア語の da は本来「から」という意味だし、ドイツ語の von は本来「の」あるいは「から」という意味で使われるから、日本語でも「から」が使われるのは、無理からぬことと思われる。

## ①「に」でも「から」でも言える場合

[人]を対象とする動詞の場合((4)の①)、たいていは「～に」でも「～から」でも言える。言えないのは「逮捕する」ぐらいだ。

## ②「によって」

(a)よく使われる場合(「～に」が言えない場合＝作り出す対象)

法隆寺は聖徳太子によって建てられた。

この雑誌は若い人たちによって編集されている。

(b)少し不自然だが文語的、中立的、客観的記述に使われる場合(たいていの場合はここに入る)

次郎はホームから落ちそうになったところを駅員によって助けられた。

(c)特に不自然な場合

\*彼はみんな によって 好かれている。

51 使 役

(1) 使役とは

「Aが何かする」ことをBがAに強制する、あるいは消極的に許可する、あるいは妨げない、ということを使役という。つまり、立場を変えて表現するのである。使役は、態(Voice)の一種である。英語で使役形(Causative Voice)と言う。

(2) 使役形の作り方

五段動詞	書く	kaku	→ kakaseru	書かせる
	読む	yomu	→ yomaseru	読ませる
	思う	omou	→ omo-w-aseru	思わせる
一段動詞	見る	miru	→ misaseru	見させる
	食べる	taberu	→ tabesaseru	食べさせる
不規則動詞	来る	kuru	→ kosaseru	来させる
	する	suru	→ saseru	させる

このようにしてできた使役形は一個の一段動詞として各形に変化する。

使役形からさらに受身形を作ることができる。使役形の受身形には長形と短形がある。

長形 kak-ase-rareru 「書かせられる」  
kak-as(er)areru

短形 kak-asareru 「書かされる」

長形は使役形を作る規則、受身形を作る規則を順に適用して作ったもの、短形は長形の中の -er- をとったものと考えることができる。

## 使役形「読ませる」の変化

		普通形		丁寧形	
		肯定形	否定形	肯定形	否定形
叙述形	現在形	読ませる	読ませない	読ませます	読ませません
	過去形	読ませた	読ませなかった	読ませました	読ませませんでした
連体形	現在形	読ませる	読ませない	読ませます	読ませません
	過去形	読ませた	読ませなかった	読ませました	読ませませんでした
意志形 命令形		読ませよう 読ませろ 読ませよ	—— 読ませるな	読ませましょう ——	——
中止形 テの形  タラの形  バの形		読ませ 読ませて	読ませず 読ませないで 読ませなくて	—— 読ませまして	—— 読ませませんで
		読ませたら	読ませ なかったら	読ませましたら	読ませません でしたら
		読ませれば	読ませなければ	——	——

基本形	使役形	使役形の受身形(長形)	使役形の受身形(短形)
書く 飲む 待つ	書かせる 飲ませる 待たせる	書かせられる 飲ませられる 待たせられる	書かされる 飲まされる 待たされる

### ③ 使役の構文

もとの文が他動詞か、自動詞かで大きく二つに分かれる。

①他動詞文の場合、動作主体は「に」で表される。

〔もとの文〕 Aが Cを ～する

〔使役文〕 Bが Aに Cを ～させる

②自動詞文の場合、動作主体は「を」あるいは「に」で示される。

〔もとの文〕 Aが ～する

〔使役文〕 Bが Aを ～させる／Bが Aに ～させる

もとの文の述語が意志動詞の場合、「Aを～」「Aに～」の両方が言える。

もとの文の述語が無意志動詞の場合、「Aを～」しか言えない。

Aを 行かせる。 Aを 笑わせる。

Aに 行かせる。 \*Aに 笑わせる。

### ④ 使役文の使用

①ふつうの使役 「(人)に ～させる」

初步的な使役文である。人が主語のふつうの他動詞文の使役である。

みなは 縄跳びの練習をする

(先生は) みなに 縄跳びの練習をさせる

先生はみなに一本ずつ縄を配って縄跳びの練習をさせた。

②謙讓的な動作 「させてもらう／～させていただく」

「～させてもらう／～させていただく」で、謙讓的に「～する」ことを表す。

おもちつきをさせてもらいました。

コンピュータを使わせてもらいました。

ピアノをひかせていただきました。

### ③他動詞化

大量輸送機関には、大量輸送機関を接続させて、移動しやすくする。

新方式はこの発想を百八十度転換させた。

子どもの時間帯にCMを集中させる。

食器を洗う、ぞうきんを縫うという能力を後退させないようにする。

仕事と余暇をほどほどに両立させる。

もとの文を考えると、次のように無生物が主語で自動詞が述語になっている。使役形はそれを他動詞化する働きをしている。

発想が転換する。 → 発想を転換させる。

CMが集中する。 → CMを集中させる。

能力が後退する。 → 能力を後退させる。

仕事と余暇が両立する。 → 仕事と余暇を両立させる。

### ④使役の受身

使役の受身形の例をいくつかあげておこう。

新幹線のスピードをめぐる裁判で、「スピード」についていろいろ考えさせられた。

みなで干潟わきに建てたプレハブの作業小屋が撤去させられた。

流れ作業できりぎり舞いをさせられた。

転勤命令を拒んで、会社をやめさせられた。

## 52 やりもらい

私はあなたに本を読んであげます。  
 友だちが私に英語を教えてくださいました。  
 私は友だちに英語を教えてくださいました。

### (1) 「やりもらい」ということについて

物の受給を表すのに、日本語では、だれがだれに物を与えるかによって、動詞の使い分けがある。また、物の受給だけでなく、行為の受給、つまり、だれがだれのためにその行為をするか、ということを表すのにも同じように動詞の使い分けがある。これら一連の関連する文法事項を「やりもらい」と言う。また、「授受表現」「授給表現」とも言う。

### (2) 「やりもらい」で問題となる動詞

「やりもらい」で問題となる動詞は、「あげる、やる、さしあげる、くれる、くださる、もらう、いただく」である。これらの動詞の使い分けを決める指標となるのは、行為者・受益者がだれかということと、その行為者、受益者が敬意を表すべき対象かどうかということである。

### (3) 物の受給と行為の“受給”——本動詞と補助動詞

- |                        |                          |
|------------------------|--------------------------|
| ①私は弟におかしを <u>あげた</u> 。 | ③私は弟に字を <u>教えてあげた</u> 。  |
| ②兄は私にノートを <u>くれた</u> 。 | ④兄は私に辞書を <u>貸してくれた</u> 。 |

上の文①②の「あげる、くれる」は、物を対象としており、物の受給を表し



ている。これに対して、③④の「あげる」「くれる」は、それぞれ「教える」「貸す」という行為の“受給”を表している。

前者の場合、「あげる」「くれる」は本動詞として働いており、後者の場合、それらは補助動詞として用いられている。

#### (4) 「あげる、やる、さしあげる」の構文

私は おぼれそうな子どもを 助けてあげました。

私は ジョンさんに お金を 貸してあげました。

私は 花に 水を まいてやりました。

私は 先生に 手紙を 書いてさしあげました。

Aは Bを Vて あげる

Aは Bに Vて あげる

A……「私」または私の側の人

B……利益を受ける相手

「あげる、やる、さしあげる」は同じ構文をとる。

「私」または私の側の人が行為者で、恩恵の与え手のとき、ふつうは「あげる」が用いられる。

「やる」は、相手(B)が特に劣等なもの、動植物などの場合に使う。

「さしあげる」は、相手(B)が敬意を表すべき対象と判断されたときに使う。

この三つのことばを同じ比重であつかう必要はない。まず、一般的な「あげる」で構文をしづかり固めるべきである。

「さしあげる」については、次のような問題点がある。

このことばを実際に本人に向かって言うのは適切な用法とは言えない。

「? 先生、荷物を持ってさしあげます。」

「? 先生、黒板を消してあげます。」

このように言うよりも、それぞれ次のように言ったほうが適切である。

先生、お荷物を お持ち いたします。

先生、私が黒板を消しましょう。

「Bを」か「Bに」に関しては難しいルールがあるが、およそ次のようになっている。

V自身が「[人]を」をとる場合 V自身が「[人]に」をとる場合 V自身は「[人]に」をとらず、 「～てあげる」の構文の中で 「Bに」となるもの	Bを Bに  Bに	子どもを助けてあげた。 あなたに見せてあげる。  子どもに本を読んであげた。
その他  Bの Bのために (Bを表さない)		あなたの絵を買ってあげます。 あなたのためにこれを買ってあげます。 窓を開けてあげましょう。

## ⑤ 「くれる、くださる」の構文

<p>となりの人が 私を</p>	<p>助けてくれました。</p>
<p>ジョンさんが 私に 本を</p>	<p>貸してくれました。</p>
<p>先生が 私に 推薦状を</p>	<p>書いてくださいました。</p>

<p>Aが Bを Vて くれる  Aが Bに Vて くれる  A……第三者  B……利益を受ける者であって、「私」または私の側の人</p>
---

「くれる、くださる」は同じ構文をとる。

ふつうは「くれる」が用いられるが、特にAに敬意を払おうとするときは「くださる」を使う。

「Bを」か「Bに」かについては、前項「あげる」のところで述べた例によるが、特にBを表さない場合が多い。「くれる」によって「私」のための動作とわかるからである。

先生が推薦状を書いてくださいました。

この構文は、学習者に特に難しい。誤って、「あげる」を使いやすいのである。

友だちは 私に いろいろな 物を 買って くれました。

\* 友だちは 私に いろいろな 物を 買って あげました。

## ⑥ 「もらう、いただく」の構文

私は となりの人に 助けて もらいました。

私は ジョンさんに 本を 貸してもらいました。

私は 先生に 推薦状を 書いていただきました。

Aは Bに Vて もらう

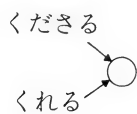
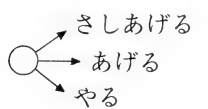
A……「私」または私の側の人で、同時に利益を受ける人

B……実際に動作をする人

「もらう、いただく」は同じ構文をとる。

ふつうは、「もらう」が用いられるが、特に、Bに敬意を払おうとするときは「いただく」を使う。

以上3種類7語の動詞の使い方を図示すると、次のようになる。



## 53 理 由

### (1) 理由の表し方——「ので、から、ため(に)、て」

「漢字がわからない」ということと「新聞が読めない」ということとを原因・理由の関係でつなぐと次のような文ができる。

漢字がわからないので、	新聞が読めません。
漢字がわからないから、	新聞が読めません。
漢字がわからないために、	新聞が読めません。
漢字がわからなくて、	新聞が読めません。

「原因」と「理由」とは、大体次のような違いである。

原因……「結果」の対語。ある結果を生じさせる元のことがら。

原因—結果の関係は無意志的。

理由……ある動作をするとき、なぜするかということ。

その動作は意志的。

安いので、	買います。
安いから、	買います。
* 安いために、	買います。
* 安くて、	買います。

「買います」という意志的表現が文の後半に来るとき、「ために、て」を使うとおかしな文になる。それで、「ので、から」は理由を表し、「ために、て」は原因を表すと言える。しかし、微妙な場合もあるので、これらを「原因・理由」と言いならわしている。

## (2) 「ので」と「から」の違い

理由を表す「ので」と「から」とはどう違うかは、学習者からのみならず日本人からもよく聞かれる質問である。これについては次のように考えられる。

電車がおくれたので、学校におくれました。  
電車がおくれたから、学校におくれました。

「ので」の文は単に事実を述べている。「から」は理由を全面に押し出し、「私が悪いわけではない」というニュアンスを持つ。

学習者にとって重要なことは、ニュアンスの違いよりも

①接続の仕方の違い

②「ので」の文の文末制限

である。これを次に述べる。

## (3) 「ので」と「から」の接続の仕方の違い

「ので」は連体形に、「から」は叙述形に続く。この違いがはっきり現れるのはナ形容詞、名詞+「だ」の場合だけである。動詞、イ形容詞では、連体形、叙述形が同じになるから、接続の違いは現れない。

この部屋は静かなので、  
ゆっくり休めます。  
子どもなので、半額です。

この部屋は静かだから、  
ゆっくり休めます。  
学生だから、半額です。

接続に関して、「\*広いなので、\*広いだから」と言う間違いが多い。  
イ形容詞とナ形容詞を混同するからである。

## (4) 「ので」の文の文末制限

ある表現は理由を表すのに「ので」を使うことができない。逆に言うと、「ので」を使うと、ある表現はできなくなる。文末に来る形が制限されるのであ

る。これを「ので」の文の文末制限と言う。それは大体次のようになっている。

	○買うことにします。	(決心)
	○買いたい。	(希望)
	○買おう。	(意志)
	? 買いますか。	(質問)
お金があるので	? 買うだろう。	(推量)
	? 買いましょう。	(勧誘)
	? 買ってください。	(依頼)
	* 買いなさい。	(命令)
	* 買ってはいけません。	(禁止)
	* 買ったほうがいい。	(忠告)

自分の動作についての主観的判断(決心、希望、意志)の場合は言える。

相手の動作について命令、禁止、忠告する場合は言えない。

その中間の場合(質問、推量、勧誘、依頼)は、ゆれている。

なお、「から」を使った文には文末制限はない。

〔問〕 上の文を「から」を使って言ってみなさい。

## (5) 立論の根拠——「から」

いつ北海道へ行きましたか。

——それは高校生のときですから、十年前です。

この「から」が学習者になかなか理解できない。今まで述べた理由の「から」と違うからである。

「から」のこの用法は、立論の根拠を表すと言われるが、理由の「から」から次

のような道筋を通してできたものと考えられる。

①「十年前」と言えるのは、「高校生のときだった」と覚えているからです。

②高校生のときだったと覚えているから、十年前と言えます。

③それは高校生のときですから、十年前です。

①は「～のは……からだ」の文、②は理由の「から」の文、③はここで問題にしている文である。②から③に進むことは、「と覚えている、と言える」が削除されることである。つまり、話し手の知覚、判断を表すことばが取り払われて、中身だけが差し出されるわけである。

【問】 (玄関で客の靴を見て)「靴があるから、来ているのでしょう。」この文はどんな道筋を通してできたものか。上の例にならってトレースしてみなさい。

【答】

①「(客が)来ている」と判断できるのは、靴があるのを見たからです。

②靴があるのを見たから、(客が)来ていると判断できます。

③靴があるから、来ているのでしょう。



## 54 条件の表現 (1) 問題点

### (1) 条件の言い方

ある一定の条件の下であることが成り立つことを表すには、次の言い方がある。

この道をまっすぐ行くと、駅の前に出ます。

お金があれば、もっといいパソコンを買いたいのだが。

この仕事が終わったら、すぐ行きます。

あなたがうなぎを注文するなら、私もそうします。

このように日本語では条件を表すのに四つの言い方がある。これを簡単に条件の「と、ば、たら、なら」と言う。これらの用法について、次の三つの問題点がある。

①四つの言い方の違いは何か。

②四つの言い方のうちどれが最適か。

③単なる仮定と事実とに反する仮定とはどう言い分けるのか。

### (2) 四つの言い方の違いは何か

次の例では、どれもあまり意味の差はなさそうである。

雨が降ると      出かけません。

雨が降れば      出かけません。

雨が降ったら    出かけません。

雨が降るなら    出かけません。

しかし、細かいニュアンスは微妙に異なる。この違いは一体何なのか、この違いはどこから来るのか。

### (3) 四つの言い方のうちどれが最適か

四つの言い方は、ニュアンスが異なるだけで、どれを使っても同じように言えるのかと言うと、そんなことはない。

- ① 雨が降っていたら、 出かけてはいけません。
  - ② \*雨が降っていると、 出かけてはいけません。
  - ③ ?雨が降っていれば、 出かけてはいけません。
  - ④ ?雨が降っているなら、出かけてはいけません。

上の例で、①「～たら」は言えるのに、②「～と」は言えない。また、③「～ば」、④「～なら」は何となくおかしい。これは一体どういう原則が働いているのか。一般に、ある条件の言い方に対して「と、ば、たら、なら」のうち、どれを使ったら一番適切な表現ができるのかという大きな問題がある。

### (4) 単なる仮定と事実に反する仮定とはどう言い分けるのか

一般にヨーロッパの言語では、「仮定」を単なる仮定と事実に反する仮定とに形の上ではっきり区別する。

英語では仮定法過去といって、事実に反する仮定の表現には過去形を使う。過去の意味でなくても過去形を使うという有名な文法事項だ。

イタリア語では、条件の方に接続法(Congiuntivo)、帰結の方に条件法(Condizionale)を使う。用語の使い方が逆のように思われるかもしれないがそうではない。いずれにしても、単なる仮定と、事実に反する仮定の区別はヨーロッパの言語では大事なことがらになっている。

日本語にこの区別はあるのか。条件の表現が四つもあるのだから、その四つの形はこの区別に関わっているだろうと考えたくなるが、実はそうではないのである。

①お金があれば、自動車を買います。

Se ho denaro, compro un automobile.

②お金が十分あれば、自動車を買うのだが。

Se avessi abbastanza denaro, comprerei un automobile.

接続法過去

条件法

③お金が十分あったら、その自動車を買ったのに。

Se avessi avuto abbastanza denaro,

接続法大過去

avrei comprato quell'automobile.

条件法過去

Se avevo abbastanza denaro, compravo quell'automobile.

半過去

半過去

①は単なる仮定。イタリア語では直接法現在を使っている。日本語で「あったら」と言っても同じである。

②と③は事実に反する仮定。②では接続法過去と条件法を使っている。③は過去における事実と反対の仮定。接続法大過去<sup>1</sup>、条件法過去を使っている。また、同じことを直接法半過去で言うこともできる。

日本語では「～ば」とか「～たら」でこの区別をしているのではない。文末の「～のだが」とか「～のに」でこれを明示しているのである。仮に「のに」がなくても、意味が多少とりにくくはなるが、その意味は変わらない。

## 55 条件の表現 (2) 形の作り方

### (1) 各形の作り方

①バの形 動詞の種類に関係なく -u をとって -eba をつける。

形容詞 -i をとって -kereba をつける。

②タラの形 過去形に「ら」をつける。

③トの形 叙述形(普通形)に「と」をつける。

④ナラの形 叙述形(普通形)に「なら」をつける。

	バの形	タラの形	トの形	ナラの形
行く 行かない	行けば 行かなければ	行ったら 行かなかったら	行くと 行かないと	行くなら 行かないなら
見る 来る する	見れば 来れば すれば	見たら 来たら したら	見ると 来ると すると	見るなら 来るなら するなら
赤い 赤くない 静かだ 学生だ	赤ければ 赤くなければ ———— ————	赤かったら 赤くなかったら 静かだったら 学生だったら	赤いと 赤くないと 静かだと 学生だと	赤いなら 赤くないなら 静かなら 学生なら

ナ形容詞、名詞にはバの形はない。

過去形に「なら」をつけた「行ったら」という形もあるが、あまり使われ  
ない。「～たなら」は「～たら」と同じではない。

## 56 条件の表現 (3) 導入法

### (1) 条件の導入

前に見たように条件の表現については、問題が大きく複雑なので、導入のレベルを分けて考えなければならない。

第1の段階では、「と、ば、たら、なら」という個々の形式を**典型的な例**で提示する。第2の段階では、それらを比較対照しながら、それぞれの特徴を見い出していくようにするのである。

### (2) 典型的な用法

典型的な用法とは次のようなものである。

#### ①「と」の例

2に2をたすと、4になる。

春になると、花がさく。

あの角を右に曲がると、駅の前に出る。

#### ②「ば」の例

この薬を飲めば、なおります。飲まなければ、なおりません。

雨が降れば、行きません。

話せばわかる。

#### ③「たら」の例

目的地に着いたら、すぐ連絡します。

読んだら、私に貸してください。

#### ④「なら」の例

「パソコンを買いたいのですが。」

「パソコンを買うなら、いい店を教えてください。」

- ①「と」は恒久的な原理とか道理、または道順説明に使われる。
- ②「ば」は条件らしい条件を示す。
- ③「たら」はほぼ達成されることがらについて、その成就を条件として(これを既定条件と言う)示す。
- ④「なら」は相手の言ったことを受けて、それを条件として示す。

もちろん各々の用法はこれだけではない。

このように、まず典型的な例を示しておけば、次第に違いがわかってくるものである。混乱はむしろ、あれもこれも提示するところから起こってくる。しかし、いろいろ学んだ後では、結局初めに示した問題が起こる。そのためにも、条件の形と用法をまとめておく必要がある。

## 57 条件の表現 (4) 文末制限

### (1) 文末制限から見た「と、ば、たら」

文末制限という面から、「と、ば、たら」を見てみよう。

と 文末が制限される。

ば バの形の述語(前件)が動作性だと文末が制限される。

バの形の述語(前件)が状態性だと文末が制限されない。

たら 文末制限がない。

### (2) 「と」——文末制限あり

制限される文末の形とは意志、命令、依頼、禁止、忠告、勧誘、希望の表現のことである。これらの表現をするときは、条件の「と」は使えない。「たら」なら使える。

	* 散歩しよう。	(意志)
	* 散歩しなさい。	(命令)
午後になると	* 散歩してください。	(依頼)
晴れたと	* 散歩してはいけません。	(禁止)
	* 散歩したほうがいい。	(忠告)
	* 散歩しましょう。	(勧誘)
	* 散歩したい。	(希望)

「午後になると」は作用(動作)、「晴れた」は状態表現である。いずれの場合も「と」を使うと、文末に意志、命令、依頼、禁止、忠告、勧誘、希望の表現が来ない。

### (3) 動作性述語の「ば」——文末制限あり

	* 見よう。	(意志)
	* 見なさい。	(命令)
テレビが始まれば	* 見てください。	(依頼)
あさって	* 見てはいけません。	(禁止)
ここへ来れば	* 見たほうがいい。	(忠告)
	* 見ましょう。	(勧誘)
	* 見たい。	(希望)

「テレビが始まる」「ここへ来る」は作用、動作である。「ば」を使うと文末制限が働いて、言えない文になる。

### (4) 状態性述語の「ば」——文末制限なし

	買おう。	(意志)
	買いなさい。	(命令)
安ければ	買ってください。	(依頼)
お金があれば	買ってはいけません。	(禁止)
	買ったほうがいい。	(忠告)
	買いましょう。	(勧誘)
	買いたい。	(希望)

「安い」「お金がある」は状態表現である。「ば」を使っても文末制限はない。すべての文が言える。

【問】 「たら」を使えばすべての場合に言える文になる。これを確かめなさい。



## 58 条件の表現 (5) 時間的前後関係について

### (1) 「ば」——「たら」と「なら」の間

あなたが薬を飲んだら、私も薬を飲みます。  
あなたが薬を飲むなら、私も薬を飲みます。

これを比べてみるとどんな違いがあるだろうか。「飲んだら」は「飲んでから」に近い。

あなたが飲んでから、私が飲む。

あなたが飲んで安全なのを見はからってから、私が飲む。

というわけで、「飲んだら、飲む」は“安全”である。

「飲むなら」では、飲む順序については明言していない。「私」の方が先に飲むのかもしれないので、それほど“安全”ではない。

これらに「ば」の文を加えて比較してみよう。

あなたが薬を飲めば、私も薬を飲みます。

「飲めば」は「飲んだら」を意味するとも、「飲むなら」を意味するとも考えられる。時間的順序については、両者の中間である。

類例をあげておこう。

あなたが行けば、私も行きます。  
あなたが歌えば、私も歌います。  
あなたが泳げば、私も泳ぎます。

## (2) 「たら」と「なら」

- ①イタリアへ行ったら、カメオを買って来てちょうだい。  
②イタリアへ行くなら、アリタリアが便利です。

これを対比させてみると、時間的な前後関係がはっきりしてくる。つまり、後半の部分は、「たら」ではイタリアへ行ってからの話、「なら」ではイタリアへ行く前の話である。この対比では「たら」と「なら」の違いがよく出ていてわかりやすい。

もっと類例をあげよう。

- ①カメラを買ったら、写してあげます。  
②カメラを買うなら、駅のそばの店が安いですよ。

- ①うなぎを食べたら、元気が出ますよ。  
②うなぎを食べるなら、家で作ってあげます。

ところが、実際には次のような例もあって複雑になる。

- ③イタリアへ行くなら、カメオを買って来てちょうだい。

この例では、「なら」を使っていて、しかもイタリアでの話である。つまり、①と③では「たら」と「なら」に差がないことになる。

もう一つ類例をあげよう。

- ③カメラを買うなら、私を写してちょうだい。

以上をまとめると、次のようになる。

後半は前半より後のこと	たら ①	③
後半は前半より先のこと	なら	②

①「たら」と③「なら」の違いは別に求めなければならない。

「なら」の特徴は「典型的な用法」のところであげたように、相手の言ったことを受けてそれを条件とする、ということである。

## 59 条件の表現 (6) まとめ

### (1) 文末が過去形の文

今まで文末が過去形のものはあつかわなかった。あつかうと混乱し、收拾がつかなくなるおそれがあるからである。事実、日本語教育の初級の段階ではこの形は出てこない。基本的に次の四つの用法について述べ、必要に応じてこれ以外の用法もあげる。

a 既定条件   b 発見   c 過去の習慣   d 反実仮想

### (2) 「と、ば、たら」の対照

と

- a コインを入れると、切符が出てきた。
- b 家に帰ると、手紙が来ていた。
- c 子どものころ日曜の朝が来ると、ラジオ体操をした。
- d \* 昔の人がコンピュータを見ると、びっくりしただろう。
- e [順次動作]私は家に帰ると、すぐ新聞を読んだ。

ば

- a \* コインを入れれば、切符が出てきた。
- b \* 家に帰れば、手紙が来ていた。
- c 子どものころ日曜の朝が来れば、ラジオ体操をした(ものだ)
- d 昔の人がコンピュータを見れば、びっくりしただろう。
- e [列挙]そこには若い人もいれば、お年寄りもいた。

たら

- a コインを入れたら、切符が出てきた。
- b 家に帰ったら、手紙が来ていた。
- c 子どものころ日曜の朝が来たら、ラジオ体操をした(ものだ)。
- d 昔の人がコンピュータを見たら、びっくりしただろう。
- e [提案・勧め]早く寝たら(どうですか)。

a 既定条件というのは、既に行ったことを条件としてとりたてる言い方である。「と」と「たら」で言える。「ば」では言えない。

b 発見というのは、前件の動作によって後件の状態を発見するという意味である。この意味になるのは後件が状態表現の場合である。

手紙が来ていた。

の「いたくいる」は状態動詞である。状態表現は述語が状態動詞、形容詞、名詞+「だ」の場合である。「と」と「たら」で言える。「ば」では言えない。

c 過去の習慣というのは、条件と帰結との関係が過去においてあった、という意味のものである。例えば、

日曜の朝が来るとラジオ体操をする。

ということが過去においてあった、ということである。

「子どものころ」ということばがそれを支えており、さらに「ものだ」ということばがそれを明示している。「と、ば、たら」いずれでも表現可能だが、「ば、たら」では「ものだ」がないと、その意味に取るのはかなり難しい。

d 反実仮想というのは、事実と反する仮定のことである。ヨーロッパの言語では接続法を用いるところである。「ば、たら」で言える。

「と」では言えないかということそうでもない。しかし、「ば」が好まれる傾向があるようである。

ビデオがあるといいのに。  
 ビデオがあるとよかったのに。  
 あなたも行くといいのに。  
 あなたも行くよかったのに。

e ここにあげたものはそれぞれの専門的用法で、他の形では表せないものである。

と[順次動作]。テの形で表す順次動作とよく似ている。前件と後件で主語が同一である点で、他の「と」の用法と違っている。

私は朝起きると、窓を開けた。 部屋に入ると、明りをつけた。  
 私は朝起きて、 窓を開けた。 部屋に入って、明りをつけた。

ば[列挙]。「し」によって表す列挙とよく似ている。

りんごもあれば、バナナもある。うなぎも食べれば、ニンジンも食べる。  
 りんごもあるし、バナナもある。うなぎも食べるし、ニンジンも食べる。

この構文のかぎは「も」である。「も」があると、列挙の意味がはっきりする。たら[提案・勧め]。「…たらどうですか。」という形で提案あるいは勧めを示す。しかし、この用法は「ば」にもないとは言えない。

## 60 逆接 (1) 「のに」による文の接続

### (1) 逆接——「のに」と「ても」

逆接を表すには、「のに」と「ても」がある。

お金がないのに、高いパソコンを買ってしまった。  
読んでも、わからない。

この文のように、前後で矛盾することがらを「のに」で結んだり、ある条件と順当でない帰結を「ても」で結ぶ表現を「逆接」と言う。英文法の用語を借りて「譲歩」(Concession)と言うこともある。

### (2) 「のに」の接続

「のに」は連体形に続く。

読むのに	読んだのに	読まないのに	読まなかったのに
大きいのに	大きかったのに	大きくないのに	大きくなかったのに

ナ形容詞、名詞の場合は「な」が現れることに注意。

元気 <u>な</u> のに	元気 <u>だ</u> ったのに	元気 <u>で</u> はないのに
子ども <u>な</u> のに	子ども <u>だ</u> ったのに	子ども <u>で</u> はないのに

### (3) 逆接の「のに」

逆接の「のに」の意味を次のように順を追って考えてみよう。

①はじめにある事実がある。 (例)お金がない。

②そこから当然期待されることがある。

(例)高いパソコンが買えない。

③何らかの理由でその通りにならない。

(例)高いパソコンを買ってしまった。

このうち、矛盾する二つのことから(①、③)を「のに」で結ぶと、次の文ができあがる。

お金がないのに、高いパソコンを買ってしまった。

これを逆接と言うのである。「のに」の文では、結果に対して、不服・意外の気持ちがある。

【問】 次の文について、上の①～③のように、順を追って文を作ってみなさい。

(1) 8月なのに寒い。

(2) 子どもなものによく知っている。

(3) 手伝ってあげたのに、文句を言われた。

#### (4) 「のに」の文型

「のに」にはそこで文を終わりにしてしまう終助詞的な用法がある。

よせばいいのに。

言えばよかったのに。

そのとき買ってしまえば、よかったのに。

#### (5) 注意すべき「のに」

「のに」は逆接以外の意味になる場合がある。それは、「のに」を分析すると「の＋に」となることから、わかる。

「の」はその前の句をまとめて名詞化する働きがある。これを準体助詞の「の」



という。名詞化された句に述語が必要とする「に」が付いて見かけ上「のに」となったものがある。

向こうから人が来るの に 気が付いた。

「向こうから人が来る」を名詞化すると「向こうから人が来るの」となる。

「気が付く」は「[名詞]に気が付く」という文型で使う。それで、上の文ができる。この「のに」は逆接を表してはいない。

外に次のようなものがある。

買い物に行くの に オートバイを使う。

この本を読み終えるの に 一週間かった。

# 【答】

- (1) ①8月だ。 ②暑いはずだ。 ③寒い。
- (2) ①子どもだ。 ②知らないはずだ。 ③よく知っている。
- (3) ①手伝ってあげた。 ②感謝されるはずだ。 ③文句を言われた。

## 61 逆接 (2) 「ても」による文の接続

### (1) 「ても」——逆接条件

ある条件の下で、順当な帰結が起こることを順接条件と言うのに対して、順当な帰結が起こらないことを逆接条件と言う。「ても」は逆接条件を表すわけである。

読めば、わかる。	順接条件
読ん <u>でも</u> 、わからない。	逆接条件

### (2) 「ても」の形

テの形+「も」である。動詞の場合も形容詞の場合も、名詞+「だ」の場合も同じである。

読んでも	読まなくても
大きくても	大きくなくても
子どもでも	子どもでなくても

### (3) 既定条件と仮定条件

ところで、「読んでも、わかりません。」と言った場合に、実際に読んだのか、読まなかったのか、これだけではよくわからない。

読めば、わかりますか。——いいえ、 <u>読んでも</u> 、わかりません。 読みましたが、わかりませんでした。 まだ読んでいませんが、 <u>仮に</u> 読んでも、わからないでしょう。
--

このように「～ても」には、実際にあったことを述べる場合と、実際にはなかったことを述べる場合とがある。「仮に」ということばがあれば、後者であることがわかる。前者を「既定条件」、後者を「仮定条件」と言う。

「ても」は「既定条件」と「仮定条件」を表すわけである。

#### (4) 逆接の既定条件

現実にあったことを「～ても」の形で述べ、その条件の下での実際の動作・状態を述べる文である。

交通機関が発達していても、それぞれを結ぶつなぎ目の部分が悪く、不便なのだ。

法隆寺のヒノキ材は 1300年を生きてもびくともしない。

パソコンのスイッチを入れても、起動しない。

物価が上がっても、給料は上がらない。

#### (5) 逆接の仮定条件

現実にはないことをあったと仮定して「～ても」の形で述べ、その仮定の下での動作・状態を述べる文である。「たとえ、仮に」などが付くことがある。

この建物は台風が来ても、大丈夫だ。

たとえ、ことばが通じなくとも、心は通う。

話す時に、多少まちがいがあっても、かまわない。

#### (6) 「ても」の文型

「ても」を使った類型的ないくつかのパターンをあげよう。

##### ①許可、不必要

「～てもいい」→許可

「～なくてもいい」→不必要

##### ②疑問詞＋「～ても」

疑問詞と「ても」で、

Aさんが来ても会わない。

Bさんが来ても会わない。

Cさんが来ても会わない。

...

誰が来ても会わない。

のように究極の場合を示すことになるので、表現が強調される。

誰 誰が来ても会わない。

誰と行っても面白くない。

何 何を見てもびっくりしない。

何でもいいの。

どこ どこへ行っても珍しいものばかりだ。

いつ いつ来ても忙しそうだ。

何度 何度やっても計算が合わない。

いくら いくら考えてもわからない。

どう どうしてもだめなの。

### ③「～ても～ても」

「ても」を二つ重ねた言い方には、同じ動詞を用いる場合と、反対方向の動作を表す動詞を用いる場合とがある。共に一つの「ても」より強調する表現になる。

同じ動作 拾っても拾ってもゴミが捨てられる。

反対方向の動作 押しても引いても動かない。

### ④「～ても～なくても」

肯定と否定の「ても」を連ねることにより、③同様の強調する表現になる。

肯定と否定 使っても使わなくても料金は同じだ。

## 索引

## あ

「あげる」……………195, 198  
 アスペクト……………14, 15, 75, 80, 81,  
 102, 103, 105, 111, 114, 119, 130  
 「あなた」……………24, 25  
 「ある」……………32, 64  
 「いいえ」……………26  
 〈言い訳〉……………171  
 「いく」(本動詞)……………131  
 ～(補助動詞)……………136  
 イ形容詞……………38, 39, 99, 179, 200  
 〈意志〉……………14, 15, 147, 148, 201, 209, 210  
 意志形……………55, 58, 59, 60, 61,  
 62, 129, 147, 148, 150, 191  
 意志動詞……………57, 181, 182, 192  
 「いただく」……………197, 198  
 イタリア語……………24, 27, 91, 103, 104,  
 157, 159, 160, 188, 204, 205  
 〈一時的処置〉……………126  
 一段動詞……………6, 32, 55, 56, 59,  
 63, 86, 99, 174, 184, 190  
 一人称……………24, 43, 153, 170, 182  
 〈逸走的〉……………130  
 移動動詞……………132, 133, 134, 135  
 〈依頼〉……………14, 15, 143, 144, 201, 209, 210  
 「いる」……………32, 64  
 〈引用〉……………68  
 〈受身〉……………15, 16, 184, 187, 188  
 受身形……………56, 62, 180, 181, 184  
 内の関係……………95  
 〈うっかり〉……………129, 130  
 ウの形……………148  
 英語……………25, 26, 27, 28, 33, 34,  
 38, 50, 102, 103, 104, 105, 149,  
 157, 158, 159, 160, 171, 185, 188, 204  
 「ええ」……………28  
 「AはBほど～ではない」……………161  
 「AはBより～」……………158  
 「おいしい」……………43  
 応答詞……………19, 26, 28  
 〈往來の目的〉……………82, 83  
 「大きな」……………45  
 「おく」……………121  
 「同じ」……………45

「面白い」……………45

## か

「か」……………19  
 「が」……………12  
 格助詞……………11, 12, 36, 37, 48, 152, 175  
 核文……………10  
 格文法……………10  
 過去形……………14, 15, 20, 32, 39, 40, 58, 59, 60,  
 61, 62, 63, 99, 104, 112, 127,  
 128, 163, 165, 176, 191, 214  
 〈過去の習慣〉……………214  
 〈仮想〉……………148  
 〈仮定〉……………204, 205  
 仮定条件(逆接の)……………220, 221  
 〈可能〉……………15, 16, 173, 175  
 可能形……………144, 179, 181  
 可能動詞……………173, 174, 179, 182  
 ガノ可変……………98  
 「から」……………188, 189, 199, 200, 201  
 ～(間接対象を表す)……………68  
 〈体のある個所〉……………155  
 体の部分についての受身……………186, 187  
 関係代名詞……………96  
 関係副詞……………96  
 感情形容詞……………42, 43, 44, 45, 153  
 〈間接対象〉……………67, 68, 79  
 間接の受身……………185, 186  
 〈間接目的〉……………79  
 〈勧誘〉……………201, 209, 210  
 〈完了〉……………127, 130  
 完了体(ロシア語文法の)……………102  
 機械翻訳……………10, 107  
 基数詞……………50  
 〈期待外〉……………130  
 〈既定条件〉……………214  
 既定条件(逆接の)……………220, 221  
 〈希望〉……………14, 16, 151, 167, 201, 209, 210  
 希望形……………56, 63  
 基本形……………9, 62, 63, 99, 100, 173, 191  
 基本文型……………6  
 〈義務〉……………15, 16, 170  
 疑問詞……………36, 49, 221  
 疑問文……………20  
 逆接……………217, 218, 220, 221

～条件	220
〈客観的記述〉	189
〈強意〉	75, 79
〈行事〉	34, 64
共同格	95
強変化動詞	55
〈許可〉	15, 16, 167, 221
〈禁止〉	15, 16, 168, 172, 201, 209, 210
「くださる」	196, 198
「ぐらい」	53
「くる」	131, 136
「くれる」	196, 198
〈経験〉	14, 16, 165, 166
敬語形	142
形式名詞	147, 148, 149
継続動詞	57, 90, 107, 108, 109, 110, 114, 180
形態論	8
形容詞	10, 29, 38, 39, 42, 44, 63, 101, 152, 154, 158, 159, 160, 178, 179, 206, 215
～文	10, 29
形容動詞	5, 38, 45
〈結果〉	107, 108
結果動詞	90, 108, 109, 110, 114, 115
〈決心〉	15, 16, 201
〈原因・理由〉	88, 92, 199
現在完了形	104, 127
現在形	14, 15, 20, 32, 39, 40, 58, 59, 60, 61, 62, 63, 147, 176, 191
〈謙譲的な動作〉	192
語彙論	75
行為者を示す助詞	188
〈行為の受給〉	194
後項成分(複合動詞の)	80
構造文型	5, 6, 10, 11, 12, 64
肯定疑問文	26, 27
肯定形	20, 32, 39, 40, 58, 59, 60, 61, 62, 63, 148, 176
構文論	8
コソアド	19, 20, 31, 33
五段活用	5
五段動詞	6, 32, 55, 56, 58, 62, 86, 99, 173, 174, 184, 190
語尾	86
～変化	165
コミュニテカティブな会話	7, 9
コミュニケーション	7, 8, 9

「ごらんになる」	142
「ころ」	53
「ごろ」	53

## さ

最上級	159, 160
〈錯誤〉	148
「さしあげる」	195, 198
〈誘いかけ〉	14, 16, 148, 150, 151
「～さん」	25
三人称	24, 43, 44, 45, 153
〈残念〉	127, 130
「し」(〈列挙〉の)	216
子音幹動詞	55
〈使役〉	15, 16, 190
使役形	62, 190, 191, 193
～の受身形	190, 191, 193
〈使役の受身〉	15, 16
使役文	192
〈時間〉	51, 52, 53
〈試行〉	14, 15
〈時刻〉	51, 52, 53
〈指示〉	21, 22, 169
時制	103
「～した状態で～する」	89
〈質問〉	143, 144, 201
質問文	20
「～してから、～する」	88
自動詞	56, 64, 71, 119, 128, 156, 186, 187, 192, 193
～の受身	185, 186
～文	192
〈自分自身の励まし〉	169
〈社会的な規範〉	169
弱変化動詞	55
修飾句	111, 112
終助詞	218
従属句(節)	111
主格	95
〈授給表現〉	194
〈授受表現〉	194
主題	12, 13
～化変形	12, 32, 44
―述語	180
〈手段・方法〉	88, 91
述語	10, 45, 70, 193, 209, 219
～動詞	12

受動態 .....184  
 瞬間動詞 .....57, 107, 108, 180, 181  
 〈順次動作〉 .....87, 88, 89, 90, 132, 214, 216  
 順接条件 .....220  
 準体助詞 .....218  
 〈準備〉 .....125  
 状況語 .....12  
 〈消極的な賛成〉 .....167  
 〈条件〉 .....17, 18, 55, 203, 204,  
 206, 207, 209, 211, 214  
 条件法 .....204, 205  
 状態性述語 .....210  
 状態動詞 .....179, 181, 215  
 〈状態の推移〉 .....15, 16  
 譲歩 .....217  
 所在文 .....31, 32, 34  
 叙述形 .....14, 15, 32, 38, 39, 40, 55, 58, 59,  
 60, 61, 62, 63, 153, 191, 200, 206  
 助数詞 .....46, 48, 49, 50  
 序数詞 .....50  
 所動詞 .....185  
 助動詞 .....5  
 処置動詞 .....117, 118, 122, 123, 125  
 進行形 .....103  
 〈進行の状態〉 .....107  
 〈推量〉 .....14, 16, 148, 201  
 推量形 .....144  
 数詞 .....46, 47, 49, 51  
 スラブ諸語 .....102, 103  
 「～することによって、～する」 .....91  
 生格(フィンランド語文法の) .....157  
 生産動詞 .....66  
 接続(文の) .....200, 217, 220  
 接続詞 .....160  
 接続法 .....204, 205, 215  
 設置動詞 .....117, 118, 122, 123, 124, 125  
 〈切迫〉 .....179, 180, 181  
 前置詞 .....33, 160  
 「～そう」(伝聞) .....176  
 「～そう」(様態) .....176, 178, 180, 181  
 属性形容詞 .....42, 43, 45  
 外の関係の連体修飾 .....96  
 〈ソフトな断り〉 .....171  
 〈ソフトな誘いかけ〉 .....150  
 存在文 .....31, 33, 34, 35

## た

「～た」(過去形) .....107  
 態 .....184, 190  
 「～たい」 .....152  
 対格 .....24, 25, 27, 28, 49, 95  
 タイ語 .....24, 25, 27, 28, 49  
 〈対抗的〉 .....130  
 題述判断 .....180  
 タイの形 .....152, 153, 179, 182  
 「～たことがある」 .....165  
 他動詞 .....56, 65, 67, 71,  
 119, 129, 156, 185, 192  
 ～化 .....193  
 ～文 .....192  
 「～たほうがいい」 .....163  
 「ため(に)」 .....199  
 「たら」 .....203, 204, 207, 208,  
 209, 211, 212, 213, 214, 215  
 タラの形 .....39, 40, 62, 63  
 「～たり～たり する」 .....99, 100  
 タリの形 .....61, 99, 100, 101  
 着装動詞 .....114  
 〈忠告〉 .....14, 16, 163, 201, 209, 210  
 中国語 .....24, 34, 49, 175  
 中止形 .....39, 40, 58, 59, 60, 61, 62, 63, 191  
 朝鮮語 .....24, 34  
 〈直接対象〉 .....68, 79  
 直接の受身 .....185  
 〈直接目的〉 .....79  
 つなぎの文型 .....16, 17  
 「て」 .....7, 199  
 「で」(動作の行われる場所を表す) .....64  
 「～てある」 .....117, 118, 119  
 底 .....95, 97  
 〈提案・勧め〉 .....215, 216  
 「～ていく」 .....131, 136  
 丁寧形 .....14, 15, 19, 20, 32, 39, 40,  
 58, 59, 60, 61, 62, 63, 150  
 「～ている」 .....106, 108, 109, 119  
 「～ておく」 .....121, 122, 125  
 「～てくる」 .....131, 136  
 「～てしまう」 .....127  
 テの形 .....5, 39, 40, 58, 59, 60, 61, 62, 63, 86,  
 87, 88, 89, 91, 92, 132, 143, 191, 220  
 「～で、～の中で」 .....160  
 「～では」 .....177

「～てはいけない」	168
「～てみる」	139, 141
「～てみると…」	141
「ても」	217, 220, 221
「～てもいい」	167
「～ても～ても」	222
「～ても～なくても」	222
テンス	103, 105, 111, 112, 114, 130, 176
〈伝聞〉	15, 16, 177
「と」(条件)	203, 204, 207, 208, 209, 214, 215
ドイツ語	8, 26, 27, 103, 104, 159, 160, 188
〈動作〉	64, 75, 76, 77, 78, 80, 82, 99, 100, 156, 186, 188
動作名詞	64, 82, 83
動詞	10, 11, 29, 31, 32, 38, 55, 67, 75, 107, 110, 117, 121, 132, 136, 137, 138, 145, 163, 173, 178, 185, 194, 200, 206, 222
～文	10, 29, 47
〈当然〉	167
特別形	145
トの形	206
「どれ」	21

## な

「ない」	6
ナガラの形	55, 58, 59, 60, 61
「～なくても…」	172
ナ形容詞	5, 39, 40, 42, 69, 99, 178, 179, 200, 206, 217
「～なければならぬ」	170, 171
「何」	21
「何か」	35, 36
「何かを」	36
「何かが」	35
「なら」	203, 204, 207, 208, 211, 212, 213
ナラの形	206
「に」	31, 64, 65, 79, 82, 175, 188, 189
二人称	24, 25, 170
「によって」	188, 189
「～によると」	177
人称代名詞	24
「の」	218
能動態	184
「ので」	199, 200, 201
「ので／から、～」	92
「のに」	217, 218
「～のほうが」	161

## は

「は」	12, 154
「ば」	203, 204, 207, 208, 209, 210, 211, 214
「はい」	26
「はい、そうです」	29
「はい、はい」(電話の)	27
「～は～が ～」	154
場所格	95
場所名詞	84, 85
〈発見〉	214
「は」と「が」	34
バの形	39, 55, 58, 59, 60, 61, 62, 63, 191, 206, 209
〈範囲〉	160
〈反実仮想〉	214
〈比較〉(主体の)	158, 159, 161, 163
比較級	158, 159
〈日付〉	52
〈否定〉	36
否定疑問文	26, 27, 151
否定形	20, 32, 36, 39, 40, 58, 59, 60, 61, 62, 63, 99, 143, 144, 148, 163, 165, 176, 182
否定文	25, 120
「人(に)～させる」	192
表現文型	5, 6, 10, 13
フィンランド語	157, 160
不完了体(ロシア語文法の)	102
不規則動詞	55, 56, 60, 86, 99, 174, 184, 190
複合述語	165
複合動詞	75, 145
副詞	18, 38
副文	111
普通形	20, 32, 39, 40, 58, 59, 60, 61, 62, 63, 206
〈ふつうの使役〉	192
〈不都合〉	130
〈不必要〉	15, 16, 172, 221
〈部分〉	154
フランス語	26, 27, 104
分格(フィンランド語文法の)	160
文型	5, 6
～練習	6, 9
〈文語的記述〉	189
文章語	24, 171
文末制限	200, 201, 209, 210



文末表現	14
「～へ…」	133, 135
〈並行動作〉(テの形)	87, 88, 89, 90
～(バの形、ナガラの形)	55
母音幹動詞	55
〈方向〉	21, 75, 76
方向動詞	75, 76, 134, 135
補語	10, 11
随意的～	11, 12
必須の～	11, 12
補助動詞	105, 106, 131, 139, 140, 141, 142, 194, 195
本動詞	106, 118, 131, 139, 140, 194, 195
翻訳語	24, 127

## ま

マスの形	9
マニュアルのわかりにくさ	93
〈未発〉	179, 182
「みる」(本動詞)	139, 140
〈無意志的動作〉	130
無意志動詞	57, 129, 181, 192
無意志表現	93
〈無関心〉	167
無題文	13, 180
名詞	12, 29, 30, 45, 54, 64, 65, 101, 159, 200, 215, 217, 219, 220
～化	218, 219
～+「だ」	10, 19, 99, 200, 215, 220
～文	10, 19, 21, 31
〈命令〉	14, 15, 201, 209, 210
命令形	55, 58, 59, 60, 61, 62, 129, 145, 191
迷惑の受身	186
〈めんどろ〉	128, 130
モダリティ	10
〈物の受給〉	194
「もらう」	197, 198

## や

〈やりもらい〉	15, 16, 68, 194
「やる」	195, 198
〈様態〉	15, 16, 179, 181
〈予測〉	179, 181
「より」	159

## ら

〈立論の根拠〉	201
〈理由〉	199
「～る」	107

類別詞	49
〈列举〉	214, 216
連体形	38, 39, 40, 55, 58, 59, 60, 61, 62, 63, 191, 200
連体詞	45, 54
連体修飾(構造)	16, 17, 44, 95, 96, 97
～(句)	95, 98, 111, 114
連用形	7, 38, 40, 82, 152, 178
ロシア語	102

## わ

「～を」	66
------	----

## 欧 文 索 引

Active Voice	184
Adjectival Noun	38
Aspect	102
Causative Voice	190
Classifier	49
Complement	11
Concession	217
Consonant Verb	55
Intransitive Verb	71
Modality	10
Nouns Always Modified	149
Nouns Usually Modified	149
Passive Voice	184
Past	104
Past Perfect	104
Past Progressive	104
Present	104
Present Perfect	104
Present Progressive	104
Proposition	10
Qualitative Noun	38
Strategy	9
Strong Verb	55
Subordinate Clause	111
te-form(テの形)	7
Tense	103
Transitive Verb	71
Voice	184, 190
Vowel Verb	55
Weak Verb	55

吉川武時（よしかわ たけとき）

東京外国語大学留学生日本語教育センター教授

**略歴** 1938年生まれ。東京外国語大学イタリア語学科卒業。73年モナシユ大学日本語研究科にて修士号修得。現在、日本語の文法、とくにシンタクスに関して研究。

**主著** 『日本語動詞のアスペクト』（共著、むぎ書房）、『日本語教材ガイド』（共著、北星堂）

NAFL選書6

## 日本語文法入門

---

1989年6月20日発行 1996年10月10日第10刷発行

著 者 吉川武時

発行者 平本照麿

発行所 株式会社アルク

〒168 東京都杉並区永福2-54-12

電話 03-3323-1001（書店営業部）

03-3323-5514（日本語出版編集部）

写 植 株式会社 三協美術

印刷所 凸版印刷株式会社

---

©1989 Taketoki Yoshikawa

Printed in Japan ISBN4-900105-68-6 C1381

乱丁・落丁本はお取り替えいたします。（定価はカバーに表示してあります）

## 参 考 文 献

- NAFL Institute 日本語教師養成通信講座『日本語の文法(1)』〔アルク〕  
NAFL Institute 日本語教師養成通信講座『日本語の文法(2)』〔アルク〕  
NAFL Institute 日本語教師養成通信講座『日本語の文法(3)』〔アルク〕  
寺村秀夫 『日本語の文法』(上)(下)〔国立国語研究所〕  
寺村秀夫 『日本語のシンタクスと意味』I II 〔くろしお出版〕  
三上 章 『現代語法序説』〔くろしお出版〕  
三上 章 『現代語法新説』〔くろしお出版〕  
三上 章 『象は鼻が長い』〔くろしお出版〕  
金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』〔むぎ書房〕  
奥田靖雄編『連語論・資料編』〔むぎ書房〕  
水谷静夫他『文法と意味 I』(「朝倉日本語新講座」3)〔朝倉書店〕  
国際交流基金『教科書ガイド』〔北星堂〕  
Alfonso, Anthony: “Japanese Language Patterns”〔上智大学〕  
豊田豊子 「接続助詞『と』の用法と機能(I)」(『日本語学校論集』5)  
〔東京外国語大学附属日本語学校〕  
豊田豊子 「日本語指導ノート」(未刊行資料)  
姫野昌子 「複合動詞『～でる』と『～だす』」(『日本語学校論集』4)  
〔東京外国語大学附属日本語学校〕  
吉川武時 「現代日本語動詞のアスペクトの研究」(金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』所収)  
〔むぎ書房〕  
吉川武時 「教科書から見た助詞指導の問題点」(『日本語教育』62)〔日本語教育学会〕  
吉川武時 「『～てみる』の意味とそれの実現する条件」(『日本語学校論集』2)  
〔東京外国語大学附属日本語学校〕  
吉川武時 「マイコンによる言語研究——日本語・フィンランド語の例——」(『日本語学校論集』9)  
〔東京外国語大学附属日本語学校〕  
吉川武時 「マイコンによる言語研究(2)——文脈付き語彙索引の作成およびフィンランド語動詞の変化——」(『日本語学校論集』10)  
〔東京外国語大学附属日本語学校〕  
Comrie, Bernard: “Aspect”〔Cambridge Univ. Press.〕  
Comrie, Bernard: “Tense”〔Cambridge Univ. Press.〕  
Lyons, John: “Introduction to Theoretical Linguistics”  
〔Cambridge Univ. Press.〕  
Ozaki, Yoshi: “Suomenkieli Neljässä Viikossa”〔大学書林〕  
Speight, Kathleen: “Teach Yourself Books: Italian”  
〔English Univ. Press LTD.〕

本文中の記号 \* : 非文法的文(言わない文、おかしい文、まちがえた文)

? : あまり言わない文、ちょっとおかしい文、なんとなくおかしい文